

旧上久堅村小字の意味・由来

来

小字の意味や由来はすでに忘れられていることが多い。それを思い出すことができれば、地名発生時の村々の歴史も少しは明らかになるのではないか、そんな期待があって、小字の悉皆調査を始めた。

難しい小字名についても、投げ出してしまわないで、それらしい解釈を挙げてみることにした。だからいくつかの解釈や意味を示すことになった。

この考え方はおかしいとか、こういう意味ではないのか、と議論が湧いてくれば、真実がはっきりしてくるのではないかと思う。

【産水沢】

ウブミザワ。

この小字は、国道 256 号線に沿った、下久堅柿野沢境にある。

ウブミザワとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ウブは「産神」のことか。ミザワ←ミ（水）・サワ（沢）で、「水気の多い谷」（語源辞典）を意味する。ウブミサワとは、「産神がおわすと思われる、水気の多い谷」ということになるだろうか。民俗大辞典によれば、産神とは、出産の前後に出産の場に訪れて産婦と生児の安全を守ってくれる神で特定の神社にまつられたり、具体的な神体などが無いことが多いといわれている。また、山の神や産土神などが産神とされているようだ。

②ウブ←ウム（熟）と転じたもので、「土地が柔らかくなる」ことから「湿地」をいう（語源辞典）。ミザワは、「流水のある谷」をういか。ウブミザ

ワとは、「湿地があって、流水のある谷」を意味するのであろうか。

全国地図には、ウブミザワ地名もウブミサワ地名も記載が無い。

【峯】

ミネ。

この小字は、ウブミザワ小字の上流側にある丘陵になっている。

ミは「神にかかわるものを表す接頭語」で、ネは「山の中でも特に高くそびえ立つ山や、その頂に近い高い所をいう」（以上は古典基礎語辞典）。

以上から、ミネとは、文字通り「神聖な雰囲気のある、丘陵の高い所」であろう。“神聖な”意味ははっきりしないが、現在では複数箇所に墓地がある。

全国地図には、ミネ地名は 112 ヶ所に記載されている。

【休石】

ヤスミイシ。

この小字は、ウブミザワ小字を見下ろす側稜の尾根にあり、現在でも山道はある。

ヤスミイシとは、これも字面の通で、「一休みしたい、坂道を登り切った所に腰掛けにいい石があった所」であろうか。側稜を上り詰めた所に、この小字がある。

全国地図には、ヤスミイシ地名は、中・大字として、6 ヶ所に載っていて、いずれも「休石」の字が当てられている。

【市場】

イチバ。

この小字は、国道 256 号線の南北両側にまたがっており、ワカミヤ（若宮）小字やヤクシマエ（薬師前）小字と接している。

イチバとは、いうまでもなく、「定

期的に市が開かれた場所」(民俗大辞典)をいう。生業を異にする人々がそれぞれの収穫物・生産物を持ち寄って交易をするだけではなく、人と人との交流も行われていたという。

中世には、寺社の門前で市が立つことが多かったらしい。この上久堅下平のイチバ小字も若宮や薬師堂の前にあり、市が立つ通例の場所であったと思われる。中世の後期には、市は不入権を持ち地子・諸役が免除され、自由通行権が保証されていたというから、賑わいも想像を越えるものがあつたに違いない。

全国地図にも、イチバ地名は多く、164ヶ所に中・大字として記載されている。

【小背・大後】

コウシロ・オオウシロ。

これらの小字は国道 256 号線の北側に並んでいる。下久堅の柿野沢との境界にある。北東-南西に走る側稜の尾根があつて、これらの小字は、尾根の北西側にある。対する南東側には、コウフクジ(光福寺)・イナリヤマ(稲荷山)・ワカミヤ(若宮)などの寺社に関わる小字が並んでいる。

コウシロ・オオウシロは何を意味しているのであるか。コ(小)⇔オオ(大)と対比して考えるのがいいと思い、一緒に扱うことにした。解釈を三つ挙げたい。

①ウシロは「山などの蔭になっている所」(語源辞典)をいう。コウシロとは「面積の小さい方の日蔭地」で、オオウシロとは、「面積の大きな方の日蔭地」をいうか。現在は、双方とも面積に違いはそれほどでもないが、地名発生当時には、かなりの面積上の差があつたのかもしれない。

②ウシロは「背後になる部分」か。コウシロは「寺社の背後に当たる部分で面積の小さな方」であり、オオウシロは「寺社の背後に当たる部分で、面積の大きな方」を意味するか。

③コ(此)には「近く。手前」(語源辞典)の意がある。対するオオ(大)は「程度のはなはだしい意を表す」(国語大辞典)という。コウシロとは「(寺社の)背後地になる近い方」をいい、オオウシロとは「(寺社の)ずっとウシロの方の土地」をいうか。

全国地図にはオオウシロ地名は載っていないが、コウシロ地名は3ヶ所にあり、「神代」「高代」「古城」の字が宛てられている。

【モロノキ】

この小字は、神之峯丘陵の北端の麓付近にある。国道 256 号線の南側にあたる。

モロノキとは何か。語源辞典に依りながら仮説を二つ。

①モロは、ムレ、ムロ、モリと同源で「山」のことをいう。ノキはヌキ(抜)で動詞ヌクの連用形で「崩壊・浸食地形」を表す。モロノキとは、「崩壊地のある山」を意味するか。

②モロは形容詞モロシ(脆)の語幹で「崩崖」をいう。ノキは下伊那地方の方言で「家の裏手の土地」をいうらしい。モロノキとは、「家の裏手に崩壊地のある所」をいうか。

全国地図には、2ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【若宮】

ワカミヤ。

この小字は、国道 256 号線の北側の南向き傾斜地にある。

ワカミヤとは、「若宮様が祀られている土地」ということになる。

ワカミヤ(若宮)とは、「本来は荒々しい崇りで人々を恐れさせるために、新たにまつられた御霊神を意味する」(民俗大辞典)という。巫女などのすすめで、非業の死を遂げた者の霊を慰撫するために神の御子としたのが若宮であるとする例が多いようだ。母子神信仰に由来するといわれている。

この上久堅のワカミヤ(若宮)が、現在、屋敷の敷地内や墓地に祀られている若宮とどのような関係になっているのか、はっきりはしていない。

全国地図には、中・大字として、ワカミヤ地名は85ヶ所に記載されている。

【泰沢】

タイザワ。

この小字は、下平にあり国道256号線と玉川に沿っている。タイザワ小字の周辺には、ワカミヤ・ヤクシマエ・イナリヤマ・ハウシンインなどの寺社との関連をうかがわせる小字が多い。

タイザワとは何か。一般的にはサワ(沢)は谷川を意味するが、ここには玉川が流れているだけで、タイザワという流水は無い。この地名が生まれた当時、玉川がタイザワと呼ばれていた可能性はないわけではないが、ここでは採らない。ではタイザワは何を意味しているのだろうか。

タイザワ←タイザと転じた語ではないかと考えたがどうだろうか。

タイザについては、「旧下久堅村の小字97」に沿って次のようにまとめておきたい。

I. タイザ地名は伊那谷南部には多く、他の地区にはほとんど見られないので、伊那谷南部に特有の地名である。全国地図には、中・大字として2ヶ所

に挙げられているが、いずれも「間人」の文字が宛てられている。

II. タイザ小字の近くには、貴人の居住地か寺社に関わる小字や寺社そのものがあり、貴人や寺社とタイザとの間に、何らかの関係があることが推測できる。

III. タイザ小字は、貴人の居住地や境内にはなく、ある程度の距離をおいている。中には、天竜峡のタイザのように、直線にして500m離れている所もある。

IV. タイザのタイは寝殿造りの対屋(たいのや)のタイで、「別棟の建物」を表していると思われる。すなわち、本所の寺社(宮座としてもいいかもしれない)や貴人の居住地とは別棟になっていることを表す。ザ(座)とは、「中世、商工業者の座と同様に田楽や猿楽のどの芸能の専門者が構成している集団のこと。本所と仰ぐ寺社の仏神事に参勤する義務を負い、その庇護のもとで、祭礼や勧進興行での上演権が保証されていた」(民俗小事典『神事と芸能』)という座のこと。

V. 以上から、タイザとは「本所とは別棟になっている、仏神事に関わって興行した田楽・猿楽などの芸能集団の上演場のあった所」であろうか。なお、一つの祭礼に複数の座が興行に当たることもあったようである。

【稲荷山】

イナリヤマ。

この小字は下平にあり、側稜の尾根の南東向き傾斜地になっている。

イナリヤマとは、「お稲荷様が祀られていた山」と思われるが、はっきりはしない。

稲荷神は、穀霊神から生業守護神・医薬の神・福神などへ変貌していった

というが、稲荷社を祭祀形態をもとに分類すると、神道的稲荷・仏教的稲荷・民族的稲荷の三つに分けることができるという。この地域に関わりが深そうなのは民俗的稲荷であるが、これには、山の神・野神・田の神・水神・竜神・祖霊神・御霊神・農耕神・福神・蚕神という側面があるという（民俗大辞典）。多様な神というべきか。

全国地図には、イナリヤマ地名は中・大字として21ヶ所に記載されている。

【沢】

サワ。

この下平にある小字は玉川右岸にあり、国道256号線が中を貫いている。

サワとは、文字通り「谷川」のことで、ここでは玉川を指している。

語源辞典によれば、サワは西日本では「湿地」の意味で使われ、東日本では「谷」の意となっている。また河川名につく語尾は東日本がサワ（沢）で西日本はタニ（谷）が多いらしい。

全国地図には、中・大字として、サワ地名が61ヶ所に記載がある。

【久保田】

クボタ。

この小字は、原平と中宮原の二ヶ所にある。

クボタとは、「周辺より低い田んぼまたは場所」をいう。タは「田」と「処」があり、現地をみてどちらかを判断するにしても、地名発生時がどうであったのか、わからない場合も多い。

【陽光】

ヨウコウ。

この小字は下平の国道256号線の北方にあり、側稜の尾根を含む南東側斜面にある。ヨウコウ小字の尾根の高さは668.5mで、その両側にある二つ

の尾根の頂点662.8mと665.2mよりは高くなっている。

ヨウコウ小字は、知久18ヶ寺の一つである陽光寺の跡地である。中心部のナカダイラ（中平）小字付近から見て、日の出の最初の光がこの陽光寺付近に当たるために、名付けられたのであろうか。

【橋場】

ハシバ。

この小字は、玉川がほぼ直角に屈曲する右岸にあり、現在、国道256号線が通っていて、小路橋が架けられている。

ハシバとは、「橋が架けられていた場所」であろう。不思議なことに、ハシバは広辞苑にも国語大辞典にも記載されていない。この地は上久堅の中心地で、古くから人や物資の移動に橋の欠かせない場所であったと思われる。

全国地図には、38ヶ所に、中・大字として記載されている。

【中平】

ナカダイラ。

この小字は玉川右岸にあり、支流と合流する点で、同時に県道の交差点でもある。上久堅の中心地であったと思われる。

ナカダイラとは、「この地方の中心となっている盆地」であろう。語源辞典には、タイラとは「長野県では、盆地をいう語」とある。伊那谷南部では、その地域の中心地となる土地の小字にナカダイラ（中平）地名が多い。

全国地図にも、ナカダイラ地名は、44ヶ所が記載されている。

【沼峠】

ヌマトウゲ。

この小字は中宮のコウフクジ小字

の東側にあり、側稜の尾根の末端部の一つの頂上にある。

ヌマトウゲとは、「沼地のある峠」か。一般には、尾根近くに沼地があるというのは考えにくい、この小字付近は自然の湧水が多いらしく、ヌマ(沼)やヌマダイラ(沼平)などの小字がある。

全国地図にはヌマトウゲ地名は、さすがに記載がない。峠路が沼地になっている所は稀だから。

【光福寺】

コウフクジ。

この小字は下平の側稜尾根を含めた南東側斜面にあり、ハシバ小字の北隣に当たる。

“知久18ヶ寺”の一つと思われるが、はっきりしたことは分からない。

コウフクジとは、「コウフクジのあった所」としておきたい。

全国地図には、コウフクジ地名は、中・大字として9ヶ所に挙げられているが、すべてに「寺」の字が宛てられている。

【桜ノ木】

サクラノキ。

この小字も下平の北の方にある側稜の尾根を含む南東向き傾斜地にあり、コウフクジ小字とヨウコウ小字に挟まれている。

サクラノキとは何か。「桜の木に決まっているのではないか」ということになりそうだが、二通りの解釈をしておきたい。

①サクラノキとは、「有名な桜があった場所」をいうのであろう。桜が地名になるのはよほどのことであるに違いない。東北のある地域では、コブシの花をサクラといい、その開花に合わせて作物の種を播いたので、サクラが

地名になっているという。下平のサクラは、花見のためのサクラだったのだろうか。

②サクは、動詞サクル(抉)の語幹で「崩壊地形」をいう。ラは「場所」を示す接尾語。ノキは伊那谷の方言で「家の裏手」のこと。以上から、サクラノキとは、「家の裏手で崩れ地のある所」となるが、うがちすぎか。

全国地図には、それでも3ヶ所にサクラノキ地名が載っている。

【蛇洞】

ジャボラ。

この小字は塩沢川左岸の北向きの傾斜地の2ヶ所にあるが、いずれも崩壊が沈静化していないためか、流水のある谷ではあるが、北向きということもあって、いまでも水田にはなっていない。

ジャは伊那谷南部では珍しくはない地名であり、「ザレ、ゾレに通じ、崖地を示すものが多い。動詞サクル(抉)の濁音化か」(語源辞典)とある。

ジャボラとは、「崩壊しやすい、小さな谷」をいう。

全国地図には、ジャボラ地名は1ヶ所にしかない。ホラが付いているためかもしれない。

【豊ヶ洞】

トヨガホラ。

この小字は下平北部の側稜の尾根を含めた北向きの傾斜地にある。塩沢川左岸になる。

トヨガホラとは、何を意味するのか。語源辞典に依りながら、2説を挙げたい。

①トヨ←トヒ(樋)の転じた語で、「水路。川」をいう。トヨガホラとは「塩沢川という水路に面している小さな

谷々のある所」ということになる。トヒは人工物には限られていない。“面している”というところが弱点か。

②トヨは動詞トヨム（響）の語幹で、「水のとどろく所」をいう。トヨガホラとは、「塩沢川の川音がとどろく、ちいさな谷々のある所」か。この解釈の方が明瞭か。

全国地図には、なぜか、トヨガホラ地名は載っていない。

【坂】

サカ。

この小字も塩沢川左岸の北向き急傾斜地にある。

サカ（坂）は「道路の傾斜した部分の名称で、さかい（境）に由来する。坂は上と下という相異なる空間を結ぶ通路であり、その途中は危険な場所とみなされ神仏がまつられた」（民俗大辞典）という。しかし、この小字内には道もないし、神仏の祀られた形跡は無い。

では、サカとは何か。これも語源辞典によりながら見ていきたい。解釈は二通り。

①サカ←サカヒ（境界）。下久堅との境にあるので、サカとは「村境にある場所」か。地名としては弱いようにも感じられるが。

②サカはサガ（嶮）の清音化した語で、「けわしい地形」をいう。

全国地図には、サカ地名は20ヶ所にある。

【日影洞】

ヒカゲボラ。

この小字も塩沢川左岸の北東向き急傾斜地にある。あちこちに崩壊地がある。

ヒカゲボラとは、文字通りで、「日の当たりにくい小さな谷」であろう。

この地域でホラといえ、底部にいくらかの土地のある谷のことをいうが、“小さな谷”と表現すると、V字型の谷を思い浮かべてしまう。

全国地図には、なぜかヒカゲボラ地名は載っていない。

【三洞】

ミホラ。

この小字も下久堅の村境にある側稜末端部の頂上のある急傾斜地となっている。塩沢川左岸である。もう一つ、小さな小字もあるが、こちらはジャボラ小字に囲まれている。かつては大きな方のミボラ小字の一部であったと思われる。

ミホラとは何か。ミをミ（廻）と解することも可能であるが、ホラそのものが、曲がっているわけではないので、ここでは採らない。

ミホラとは字面の通で、「三つの小さな谷が連続している場所」であろう。この大きな方の小字には、塩沢川に開口するホラが三つ並んでいる。

全国地図にミホラ地名は、1ヶ所も記載されていない。

【久保山】

クボヤマ。

この小字も塩沢川左岸の北東向き急傾斜地にある、小さな小字である。

クボヤマとは何か。全国地図には、クボヤマ地名が、中・大字として7ヶ所に記載されており、そのすべてに「久保山」の字が宛てられている。

このことから、「周囲より窪んだ所のある山」はそれほど珍しくはないはずである。しかし、この下平のクボヤマ小字はほぼ一様な傾斜地で、窪んだ場所は見当たらない。このクボヤマをどう解釈すればいいのか。

それには、現在のクボヤマ小字を少

し広げて、その周辺まで視野を広げる必要がありそうだ。地名発生時にはもっと広がったと考え、「窪地のある山」はいくつも目に入る。

こうした方法で解釈するより方法はないように思えるがどうであろうか。

【滝ノ坊】

タキノボウ。

この小字は塩沢川左岸にあり、北東向きの急傾斜地となっている。下久堅との村境になる。もう一ヶ所、ヌマダイラ小字を挟んで、小さなタキノボウ小字がある。

タキノボウとは何を意味するのか。タキ（滝）といえ、山岳信仰の荒行を連想するが、この付近には、落差のある滝が見えないので、ここでは採らない。以下、二通りの解釈を示したい。

①タキは「河の瀬の傾斜の急な所を勢いよく流れる水」をいい、ボウは「僧侶の住居」である（以上は広辞苑）。タキノボウは「(塩沢川の) 勢いよく川が流れている傾斜地で僧侶の住居のあったところ」か。

②ボウは動詞ウバウ（奪）の頭母音脱落形で、「崩壊地形」をいう（語源辞典）。タキノボウとは、「勢いよく川が流れている傾斜地で崩崖のある所」となるが、当然すぎるか。

全国地図には、タキノボウ地名が1ヶ所載っていて、「滝之坊」の字が宛てられている。

【高尾建】

タカオダテ。

この小字は、ナカダイラ小字の一角にある小さな小字である。

タカオダテとは何のことであろうか。二説を挙げる。

①タカ（高）はタカ（鷹）で、この地

域の方言で、トビ（鳶）のことをいう。オ（尾）はオ（尾）で、タテ（建）はタテ（立）と考えることはできないだろうか。タカオダテとは、「トビが尾を立てたような姿に似た地形のところ」をいう。トビの胴がこの小字の場所で、隣接するシャグチ小字とワカバヤシ小字の高い所を、頭と尾に見立てたのではないだろうか。

②タカオは固有名詞であることも考えられる。とすれば、ダテ←タテ（建）で「館」を表す（語源辞典）。タカオダテとは、「タカオ氏の館のあった所」となる。知久氏の家臣の館があったのかもしれない。

全国地図にはタカオダテ地名は一つも載っていない。

【若林】

ワカバヤシ。

この小字は、下平のコウフクジ小字とシャグチ小字に挟まれた尾根とその南東側傾斜地にある。

ワカバヤシとは何か。これも分かりにくい地名である。語源辞典によりつつ、二説を挙げたい。

①ワカは単なる瑞祥地名用語。ハヤシは「樹木の繁る神聖な地」か。ワカバヤシは「(山の神などがおわす) 神聖な樹木の多い場所」であろうか。

②ワカ←アガ（上）の転で「高所」をいう。ハヤシハはハヤ（逸）・シ（接尾語）で、「傾斜地」のこと。ワカバヤシとは、「高い場所にある傾斜地」か。地名に値するかどうか。

なお、以上の①と②の組み合わせを交換する解釈も成立する。

【イナバ・稲場】

イナバ。

これらの小字は、玉川右岸の南西向き傾斜地にあり、国道256号線に沿

っている。現在は大部分が棚田になっている。ナカダイラ小字の西隣に当たる。

イナバは伊那谷南部には多い地名であるが、いずれも「稲干場」を意味するものと思われる。

【社口】

シャグチ。

シャグチ（社口）小字は、中宮原に1ヶ所、下平に2ヶ所ある。

シャグチとは何を意味しているのであろうか。シャグチ（社口）←シャクジ（石神）と転訛したものであろう。シャグチとは、「シャクジの鎮座する場所」である。

おなじ「石神」の字を宛てるが、シャクジはイシガミとは異なり、道祖神の性格ももっている、ともいわれている。上久堅には三ヶ所にもあるので、この解釈はありうると思われるが、どうであらうか。

シャクジは呼称も多様で、サクジ・オシャモジ・シャクチ・サクチ・サグチ・サクジン・オサクジン・オシャグチ・ミシャグチ・オミシャグチ・サゴジンなどがある。下久堅ではシャクジ（社宮地）を宛てている。

シャクジ系の社祠・神座は今井野菊の集計によると、1,658ヶ所にあり、長野県はその47%を占めている。長野・愛知・静岡・山梨・三重・岐阜の三遠南信地方に分布しており、古代諏訪信仰にかかわりがありそうだ。（以上は主に民俗大辞典による）

なお、全国地図には、シャグチ地名は一つも無い。

【藤ノ木】

フジノキ。

中宮に二ヶ所、平栗に一ヶ所の三ヶ所にある。

フジノキとは何か。決めがたいので、主に語源辞典によりながら三通りの解釈を挙げておきたい。

①フジはフジ（富士）で、フジノキとは、「家の裏手に富士山型の山があり、富士講が行われた場所」か。フジノキ小字の三ヶ所は共に、小字内かすぐ近くに、独立峯がある。伊那谷南部では、近世になって富士講が盛んになり、フジの付く地名は各地にある。しかし、上久堅の場合には、村誌にそうした記載はない。

②フジノキとは、「近辺で有名な藤の木があった所」かもしれないが、地名になるほどのことなのかどうか、という疑問もあるが、下記の通り全国地図にもかなりの数が「採り上げられているので、候補の一つに挙げておきたい。

③フジはフチ（淵）の濁音化した語で、ノキは「家の裏手」のこと。フジノキとは、「家の裏手に川の淵がある所」を意味するか。三ヶ所のうち二ヶ所は玉川と平栗川に面しているが、中宮の一ヶ所は該当していないので、採り上げない方がいいかもしれない。

全国地図には、フジノキ地名が、中・大字として31ヶ所にもある。

【沼平】

ヌマダイラ。

この小字は、中宮原の側稜の尾根に沿った細長い小字になっている。現在は平坦地は水田になっているところが多い。

ヌマダイラとは何か。ヌマは「湿地」のこと。ダイラは「山中にある平らな場所」（語源辞典）をいう。以上から、ヌマダイラとは、「山中の平らな所で湿地のある場所」であらうか。沼地には「要害の地」という意味が含まれることが多いというが、この場合はどう

であろうか。

全国地図には、中・大字として、ヌマダイラ地名が1ヶ所、ヌマタイラ地名が3ヶ所にある。

沼

ヌマ。

この小字は、大きな小字が2ヶ所、小さな小字が1ヶ所ある。小さな一ヶ所を除けば、山中の湿地になっており、現在でも水田耕作がなされている。

ヌマとは、「湿地」をいう。

全国地図にも、ヌマ地名は中・大字として22ヶ所に採られている。

【梶谷】

カジヤ。

この小字は中宮原のフジノキ小字の北隣にある。

カジヤはカジヤ（鍛冶屋）のことか。鍛冶屋は「鉄を打ち鍛えて刀剣・刃物・農具・釘などを製作し、あるいは修理にあたる職人の総称」（民俗大辞典）であるという。

中宮原のカジヤは「鍛冶屋が仕事をしながら住んでいた場所」であろう。地名発生時が神之峯落城前であれば刀鍛冶であったろうし、その後であれば農具の製作と修理が主な仕事になっていたと思われる。

全国地図にもカジヤ地名は、82ヶ所に中・大字として記載されており、少なくない数になっている。

【観音・観音半場・観音裏】

カンノン・カンノンハンバ・カンノンウラ。

これらの小字は中宮原にあり、知久18ヶ寺の一つである普門院とその周辺に当たる。

普門院には、本尊の千手観音のほかに33体の観音像が安置されている。

ハンバは「山の平地、または山上」（語源辞典）で、静岡榛原郡で使われているという。カンノンハンバは「山の上で観音様を安置した御堂のある所」をいうか。

【塚穴】

ツカアナ。

この小字は中宮の玉川右岸にあり、主要地方道下条米川飯田線に沿ったところにある。

塚穴というのは、広辞苑によれば、「死人を葬るための穴。墓穴」である。ツカアナ小字のツカアナとも意味の重なる部分はあるが、このままでは生々しすぎる。そこで、ツカアナとは、「古墳のある所」としたい。ここには円墳が二基あるという。いずれも7世紀前半に築造されていたものという。地名発生時には、すでに横穴式石室が開口していたのであろう。

全国地図には、2ヶ所にツカアナ地名が記載されている。

【北田】

キタダ。

この小字は原平の主要地方道下条米川飯田線の北側にある。

有名な北田遺跡に人が住み始めたのは縄文時代早期中葉の8,000年前になるという。

キタダとは何を意味するのか。二通りの解釈を示したい。

①キタ←キダ（段）で、「キダハシ、キザハシ」のこと。キタダとは、「階段状になった田」すなわち棚田を意味しているものと思われる。

②キタダとは、字面通りで、「北の方にある田んぼ」をいうか。この場合は、何からみて“北の方”に当たるのか、考える必要がある。興禅寺か神之峯か、あるいは漠然と上久堅の中心部か。

全国地図にはキタダ地名は、29ヶ所に記載がある。

【六方畑】

ロツポウバタ。

この小字は、玉川と主要地方道下条米川飯田線との間にあり、側稜の尾根の末端部にあたる。

ロツポウバタとは何か。これは難しい。よくわからないが、次のように考えてみた。

ロツポウ（六方）とは、素直に、「四方すなわち東西南北と天地」（広辞苑）であろう。バタ（畑）は、南西向きの傾斜地になっているので、「焼畑」のことか。

以上から、ロツポウバタとは、「東西南北だけでなく、高い所も低い所も焼畑になっていた土地」であろうか。

むろん、全国地図に、ロツポウバタ地名などは載っていない。

【ミョウガ塚】

ミョウガヅカ。

この小字は、ロツポウバタ小字の東隣にある、小さな小字である。

ミョウガヅカとは、「ミョウガが生えている塚のあるところ」であろう。地名発生時には、古墳とみなされていたのであろうか。なお、ミョウガにつ

いては、ミヨ（峰）・ガ（処）で、「高所のある塚」という解釈も可能である。

明賀塚は明賀塚古墳といわれており、見たところは封土もある円墳のようであるが、今のところ確実に古墳であると断定するには至っていないという（村誌）。発掘が待たれる。

【濱井場・ハマイバ】

ハマイバ。

これらの小字は塩沢川左岸にあり、南側の玉川との間にある側稜の尾根の北向きの緩い傾斜地になっている。それぞれ2ヶ所ずつあり、重ねると、かなり大きな小字になる。

ハマイバ小字はどこにでもある。松尾のハマイバについては次のように二説について書いている。

①ハマはハマ（岨）で「崖」を表す。イバはイバ（井場）で「流水のあるところ」をいう。以上から、ハマイバとは、「崖のある急傾斜地であって水が流れている所」を意味する。

②ハマイバとは、「正月の年占である破魔打が行われるところ」をいう。破魔打とは、二組が対抗して勝負で運勢を占う。一方が藁や樹枝などで丸く作った破魔矢の的を投げ転ばすと、相手が木の枝を投げてさえぎり、境界線を越えると勝つというもの。村境などで行われたらしいが、この上久堅の中宮では喬木村との境界が直線にして300mほどになる。

①と②のどちらが正しいのかははっきりはしないが、意味するところが、②→①と変わってきた可能性もある。

【堀切】

ホリギリ。

この小字は塩沢川左岸にある細長い小字で、深い峡谷となっている。ホリギリ小字は、この上流にも二ヶ所に

あり、全部で3ヶ所に分布している。

ホリギリ←ホリキリと転じたもので、ホリキリとは、「地を掘って切り通した堀」（広辞苑）とあるが、この塩沢川峡谷にあるホリギリを掘ったのは人ではなくて、塩沢川である。したがって、ここのホリギリとは、「塩沢川が堀のように削り、切り取った溪谷」としたい。

この地名は全国各地にある。全国地図には、中・大字として、ホリギリ地名が8ヶ所、ホリキリ地名は50ヶ所に記載されている。

【二ヶ嶽】

ニガタケ。

この小字は、原平の塩沢川が大きく曲がる場所の左岸にある。隣のハマイバ小字内にある独立峰（標高693.1m）の北側急傾斜地にある。塩沢川には滝もある。

ニガタケとは何か。それぞれに曖昧な点もあるので、三説を挙げたい。

①ニガは動詞ニガム（苦）の語幹で、「しわがよったような地形」（語源辞典）をいう。現地には、細かなしわは無いが、塩沢川が大きく屈曲する。これを大きなしわとみることはできないだろうか。ニガタケとは、「麓の川が大きく曲がる山」としたいが、無理があるか。タケ（嶽）は信仰に関わりがありそうだが、山の神がやどる森でもあろうか。

②ニガ←ニ（丹）・カ（処）で、「赤土」を表す（語源辞典）。ニガタケとは、「赤土のある山」となるがどうであろうか。これもまた信仰の山であるかもしれない。

③ニガタケはニガタケ（苦竹）か。川岸でやぶをつくるという。ニガタケとは、「苦竹が自生しているところ」と

なる。

ニガタケ地名は、全国地図に1ヶ所しか載っていない。

【作上】

サクガミ。

これも原平にあり、ハマイバ小字にある独立峰の西側傾斜地にある。

サクガミ（作上）←サクガミ（作神）と転じたもので、作神とは「農耕を司る神の一つで、ことに稲の豊穰を祈念する神。普通名詞として使われる場合は田の神と同義語」（民俗大辞典）であるという。

作神とは初めて聞く神の名前であるが、上久堅では、他に日向平・森・平栗の三ヶ所で祀られているという。

このサクガミ小字のあるところは住宅地に近くで神々が籠もるには里に近すぎるのではないだろうか。思うに、作神は稲作の作業が始まる春に田んぼに降りてきて、その後も播種・田植え・稲刈りなどの重要な折り目にも来臨するといわれているので、春には奥の山地からやってきて、春から秋にかけては、この里に近いところから田んぼまで通うというように考えられていたのではないだろうか。

作神は地方により、農神・亥子神・荒神・えびすと呼称する神々が、この作神に該当するというが、新潟・長野・山梨の各県あたりでは、サクガミ様と呼ぶことが多いようだ。

サクガミとは、「作神がおわす場所」ということになろうか。

なお、全国地図にはサクガミ地名は載っていない。それほど普遍的な神様ではないということであろうか。

【十林・重林】

ジュウリン。

この二つの小字はこの小字は、中宮

のハマイバ小字にある独立峰（標高693.1m）の西～南西側斜面にあり、ロツポウバタ小字を挟んだ位置にある。

ジュウリンとは、「知久18ヶ寺の一つである重林寺のあった場所」といわれている（下伊那史第六巻）。

ジュウリンとは、「神聖な森のあるところ」を意味するか。

全国地図にはジュウリン地名は記載が無い。

【北沢】

キタザワ。

この小字は、原平と小野と下平の三ヶ所にある。いずれも流水のある谷の傾斜地や洞になっていて、棚田が発達している所もある。

原平のキタザワ小字の近くには、ミナミザワ小字があるが、東南東方向にあって、南⇄北の対比にはなっていない。

キタザワとは何か。簡単なようだが難しい。二説を挙げておきたい。

①キタ←キダ（段）と清音化した語で、「階段状の地形」をいう。キタザワとは、「階段状の傾斜地や棚田のあるところを流れている沢のある所」か。

②キタザワとは、「北の方にある沢」というのがもっともらしい解釈である。しかし、何に対して“北の方”になるのか、はっきりしない。ましてや三ヶ所に共通するような、“南の方にあるもの”は探し出すことはできなかった。

キタザワ地名が、中・大字として国土地理院の全国地図に記載されているのは48ヶ所になり、少ない数ではないと思われる。

【向垣外】

ムカイガイト。

この小字は、原平の下久堅村境にある。

ムコウガイト小字は間に窪地を間にして、南側にカミガイト（上垣外）・シモガイト（下垣外）・カイト（垣外）のカイト小字群がある。

ムコウガイトとは、「（こちらのカイト小字群から見て）窪地の向こう側にある居住地のある所」を表すものと思われる。

全国地図にも1ヶ所だけ、ムコウガイト地名が採られている。

【上垣外・垣外・下垣外】

カミガイト・カイト・シモガイト。

これらの小字は原平の塩沢川右岸にある。

カイトは「居住地のある所」で、カイト小字から分かれたのが、カミガイトとシモガイトで、カミガイトの方がやや高い所にあり、シモガイトは低い塩沢川氾濫原にある。

カイトには、下伊那郡の方言で「畑」の意味もあるという（語源辞典）。カキ（垣）・ト（処）で、「垣で区画された所」の意から派生したものと思われる。さらに語源辞典は、「カイ・トには“限定された区画”という意識とともに当初から“所有”の観念が付随したはずである」としている。

全国地図には、カイト地名が、中・大字として8ヶ所に記載がある。

【又木田】

マタギダ。

この小字は原平の塩沢川とその支流が合流するところであり、喬木へ抜ける主要地方道下条米川飯田線と塩沢川沿いに東に入る道路との交差点でもある。このマタギダ小字で、塩沢川の谷と喬木と行き来する街道のある谷が分かれている。

マタはマタ（股）で、「二つか、それ以上に分かれている所」。ギダはキダ（段）で、キダハシ（段梯）のこと。

マタギダとは、「谷が二つに分かれていて、棚田など階段状の地形の多い場所」を意味するか。

全国地図には、マタギダ地名は載っていない。マタギダ地名は、伊那谷南部特有の地名であろうか。

【井南】

イミナミ。

この小字は原平の主要地方道下条米川飯田線に沿っており、柏原公会堂の北側にある。

ミナミはミ（水）・ナ（助詞）・ミ（廻）とする解釈もあるが（語源辞典）、これに井（井）がつくと、“水”が重複してしまうので、ここでは採らない。

イミナミとは、「流水の南側にある土地」であろう。南東に傾いた緩斜面になっているので、流水の南側にある土地ではこの水を利用できることになる。この小字は、現在もほとんどが水田と居住地になっている。

イミナミ地名は全国地図には記載が無い。

【下林】

シモバヤシ。

この小字は、原平の塩沢川右岸、下久堅村境にあり、側稜の尾根の頂部を含む南向きの傾斜地にある。

シモバヤシとは何を意味しているのだろうか。二通りの解釈を示したい。

①シモは動詞シモル（沈）またはシモル（滲）の語幹で「湿地」を意味する（語源辞典）。この部分が強力でないのが気になるが、三穂の小字でもこの説を採用したことがある。この解釈が成立するとすれば、シモバヤシは「自然湧水のある傾斜地」か、「自然湧水

のある神聖な森」となる。山の神が籠もることのある山林とみることもできる。

②シモを「下の方」と解すると、シモバヤシとは、「（上の方にある稲荷社に対して）下の方にある神聖な森」であろうか。上の方にある稲荷社は尾根続きの東側の高みにあり、安政二年の勧請という（上久堅の民俗）。

全国地図には、シモバヤシ地名は9ヶ所に記載がある。

【チョウチン山】

チョウチンヤマ。

この小字は、喬木・下久堅との三ヶ村の村境にあり、小字内には新宮八幡社が祀られている。

チョウチンヤマとは何か。チョウチンヤマ小字には、側稜の尾根の頂上部があり、この独立峰を提灯に見立てて名付けられたものと思われる。

新宮八幡社の祭礼で、提灯が灯されて、それが遠くからも見えたことによって名付けられたとも考えられないわけではないが、ここでは採らない。

全国地図には、チョウチンヤマ地名は無い。

【北ノ原】

キタノハラ。

この小字は、喬木村との境界地にある。喬木側は谷になっているが、キタノハラ小字は台地になっていて、非常に緩やかな傾斜地であるが、現在は水田では無く畑地になっている。

キタノハラとは何か。解釈を二つ。

①キタノハラとは、文字通り、「北の方にある、広い平坦地」をいう。“北の方”というのは、上久堅か原平の中心から見ての方角であろう。

②キタは「谷に沿った高い台地」（国語大辞典）であるという。キタノハラ

は、「(喬木側の) 谷に沿った高くて広い台地」となるか。ただ、このキタは四国地方の方言であることが気になるが、現地にはよく合致している表現である。キザ、キダ、ケタに通ずる語と捉えているか。

全国地図には、5ヶ所にキタノハラ地名が記載されている。

【コイソダ】

この小字の地番である1278番地はBlueMapには無いので、その番地の前後から判断して、コソイダ小字の位置を、マメザワ小字と日向沢小字の間とした。従って本来の位置と少しずれている可能性はある。

コイソダ小字も喬木村境に近い。

コイソダとは何か。初めて聞く地名である。全国地図にもコイソダ地名の記載は無い。語源辞典によってみたい。

コイは動詞コユ(臥)の連用形の名詞化した語か。「崩壊地」をいう。ソダはサハ(沢)・タ(処)が転じたもので、「湿地」をいう。

以上から、コイソダとは、「崖のある湿地」か。

【上ノ久保】

ウエノクボ。

この小字も喬木村境にあり、キタノハラ台地より高い丘陵地にある。

ウエノクボとは、「高い所にある窪地」か。二つの緩い側稜に囲まれたやや広い谷になっていて、それを窪地としたようだ。

全国地図には、ウエノクボ地名は載っていない。“ウエ”と“クボ”が矛盾しているためかもしれない。

【日向山】

ヒナタヤマ。

この小字も、喬木村境に近く、側稜

の緩い頂上部にある。

ヒナタヤマとは、文字通り、「日当たりのいい山」であろう。

ヒナタヤマ地名は、国土地理院の全国地図には、14ヶ所に中・大字として記載がある。

【幸藤洞】

コウトウボラ。

この小字は塩沢川最上流部の支流が削った谷になっている。大きな堤が二つある洞でもある。

コウトウボラとは何か。わからない地名の一つ。それでも解釈を三つ挙げておきたい。

①コウはカ(欠)・ク(処)で「崩れた所」を示す。トウはタフが転じた語で「峠」のこと(以上は語源辞典)。すなわち、クトウボラとは、「峠が崩れたことがある谷」をいうか。

②トウは動詞タフスの語幹タフの転で、「傾斜地」のこと(語源辞典)。コウトウボラとは、「崩壊地のある傾斜地からなる谷」か。

③トウはトウ(塘)で、「堤」のこと。コウトウボラとは、「崩れたところのあった堤をかかえている谷」だろうか。

全国地図には、コウトウボラ地名はないが、コウトウ地名は2ヶ所にあり、「高頭」「香湯」の字が宛てられている。

【ウナキダ・ウナギ田・鰻田】

ウナギダ。

これらの小字は玉川右岸にあり、三ヶ所に分かれているが、いずれの小字どうしが接している。一つながりの小字とみていい。

ウナギダとは何か。二説を挙げる。

①ウナギダとは、文字通り、「ウナギが上ってくる所」か。ダはダ(処)としたい。もちろん、ウナギの上がりよ

うもない尾根の頂上部も含んで一体化した土地と考える。

②ウ（ヲで「小」を表す接頭語）・ナギ（薙）とみる（語源辞典）。ウナギダとは、「小さな崩れ地があちこちにある土地」となるか。

全国地図には1件のみ記載がある。

【南沢】

ミナミザワ。

この小字は原平の喬木村境の南側にあり、大きな洞で堤もいくつかある。塩沢川の最上流部にあり、北隣はコウトウボラ小字になっている。

ミナミザワだから「南の方にある谷」としたいところだが、起点となるような地がミナミザワ小字の北の方には見当たらない。村境の南の方というのもおかしいし、山之神社が北の方にあるが、あちこちにお宮の多い上久堅では起点にはなりにくいのではないだろうか。

では、ミナミサワとは何か。ミは「水」の下略で、ナミはナメ（滑）が転じた語（語源辞典）。ミナミザワとは、「水の多い緩傾斜地となっている沢」か。堤もあり、低地は水田となっている。

全国地図では、中・大字として、ミナミザワ地名が40ヶ所、ミナミサワ地名が28ヶ所と少なくはない。

【割作】

ワリサク。

この小字は、原平の中心部と思われるところにあり、辻に接している。

ワリサクとは何を意味するのか。これもよく分からない地名である。解釈を三つ挙げる。

①ワリは「他に比べてみたときの損得の具合」をいうか。貢租のことをいうのであろうか。割高であるか逆に割安であるか判断はつかないが。ワリサク

とは、「貢租負担が他と異なる耕作地」のことか。

②ワリは動詞ワル（割）の連用形で、「割れた地形」をいい、「谷」のことだという（語源辞典）。サクはサク（柵）で簡単な柵で出来ている関とみる。以上から、ワリサクとは、「谷に設けられた関のあった所」かもしれない。ここは何本かの道の分岐点になっており、関を設けるには条件の整っている場所であろう。

③ワリは「谷間」のこと。サクは動詞サクル（抉）の語幹で、「耕す」の意があるという（語源辞典）。すると、ワリソクとは、「谷間にある耕地」となるが、当然にすぎてあり得ない地名か。

全国地図にはワリサク地名は記載が無い。

【山サキ・山崎】

ヤマサキ。

この小字は、原平に一ヶ所、下平に二ヶ所の合計三ヶ所にある。原平のヤマサキ小字は、塩沢川最上流部の右岸にあり、やや大きな洞の底部の棚田になっている。下平のヤマサキ小字は、細田川右岸にあり、いずれも丘陵の末端部にある。

サキはサキ（先）で、「末端部分」をいう。ヤマサキとは、「側稜など丘陵の尾根の末端部のある場所」をいう。

どこにでもある地名なので、全国地図にも、77件もある。宛てられている字はすべて「山崎」となっている。

【寺ノ上】

テラノウエ。

この小字は、上平の玉川右岸とその上の側稜の尾根を含む傾斜地にある。玉川寺もこの小字内にある。

テラノウエとは、いうまでもなく、

「玉川寺とそれより高い傾斜地」のこと。

全国地図には、テラノウエ地名は5ヶ所にしかない。意外と付けにくい地名なのかもしれない。テラノシタとは対照的に。

【豆沢】

マメザワ。

この小字は、原平にあり、塩沢川上流部の右岸の広大な水田地帯になっている。

マメザワとは何か。語源辞典に依って二説を挙げる。

①マメ←マル（丸）・ミ（べ「辺」の転）で、「円形になっているところ」をいう。マメサワとは、「丸くなっている谷」であろう。水田地帯をみると、ほぼ円形になっており、一部に根が出ているような所もあるが、円に見立てることはできる。マメサワとは、「谷の底部がほぼ円形になっている盆地」ということになろうか。

②マメはママやマミと同じように「崩崖、斜面、土手」などの意味を表すという。となると、マメザワとは、「崩れ地があちこちにある谷」をいうか。

全国地図には、マメザワ地名は1ヶ所にある。

【東山】

ヒガシヤマ。

この小字は、上平にあり、玉川北方の尾根とその中腹部にある。

ヒガシヤマとは、「東の方にある山」をいう。起点となっているのは、恐らく玉川寺であろう。上平の中心部から見ても“東の方”になるが、玉川寺の方が重いとみる。東山とは、やはり日の出る山として意識していたのであろう。

国土地理院の全国地図には、ヒガシ

ヤマ地名は、中・大字として、128ヶ所にある。

【ナギジリ】

この小字は、原平のマメザワ盆地の北側傾斜地にある。

マメザワ北隣のウエノクボ小字は側稜の末端部が独立峰（標高 696.5m）になっていて、この峰の中腹から麓にかけて崩れ地が見える。

ナギジリ小字にも崩壊地があり、ナギジリとは、文字通り、「崩壊地の末端部」であろう。

しかし、なぜか、全国地図には、ナギジリ地名もナギシリ地名も記載が無い。

【長坂】

ナガサカ。

この小字は、上平にあり、ヒガシヤマ小字よりも更に東方の山地にある。玉川寺付近から東に向かう尾根道に沿っている。

ナガサカとは、「長く続く坂」としたいが、尾根道なので、それほど長く続くとも思われない。そこで、語源辞典にあるように「傾斜地になっているところ」としたい。ナガ、サカともに「傾斜」を意味しており、同意反復の地名ではないかという。

全国地図でも、ナガサカ地名は、中・大字として、50ヶ所に記載がある。

【井ノ口・井口】

イノクチ・イグチ。

イノクチ小字は中宮の一ヶ所、イグチ小字は上平に三ヶ所、大鹿に一ヶ所、蛇沼に一ヶ所の合計6ヶ所と多い。うち5ヶ所は玉川に、1ヶ所はイタチ川に面しており、確認はしていないが、井水を取り込んでいるものと思われる。

イグチには、「水路の合流点」や「川の源流部」の意もあるが、ここではいずれも該当しないので、灌漑用の井水の取り入れ口として間違いないと思われる。

【イナハジリ】

イナワジリ。

この小字は原平のナギジリ小字の東隣にあり、水田地帯である豆沢盆地の北端に当たる。

イナワジリとはイナバジリ（稲場尻）のことで、「稲干場の末端部」を意味する。豆沢盆地の水田で刈り取った稲を、この側稜で干したものと思われる。

イナワジリ地名は、もちろん全国地図には載っていない。

【カリヤスボラ】

この小字は原平の豆沢盆地南側の丘陵地にある。尾根の頂部も含むが、北側の塩沢川に開口する谷もある。

カリヤスボラとは何か。これもよく分からない地名である。二通りの解釈を示したい。

①カリはカル（刈）の連用形が名詞化した語で、「（草木を）刈り払った所」をいう（語源辞典）。苜敷にするために、草木が苜られた場所であろう。苜敷とは「山野の草・樹木の茎葉を緑のまま水田や畑に敷き込むこと。かつて地力維持の重要な手段の一」（広辞苑）である。ヤスはヤチ（菴）の転で「湿地」のこと（語源辞典）。以上から、カリヤスボラとは、「刈敷用の柴山で、湿地のる洞」をいうか。

②カリヤスとは、イネ科ススキ属の植物で、本州中部の山地に生え、古来、黄色の染料植物として栽培もされた植物であるという（牧野植物図鑑）。カリヤスボラとは、「カリヤスが自生していた洞」という可能性もないわけ

ではない。

全国地図にはカリヤスボラ地名は載っていないが、カリヤス地名は意外にも7ヶ所にある。

【小南平】

コナンダイラ。

この小字は上平にあり、ヒガシヤマ小字の更に東方の丘陵地にある。南端を玉川が流れている。

コナンダイラとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二説を考えてみたい。

①コナン←コナリ←カハ（川）・ナリ（鳴）の転じたもので、「川音」に因む語。コナンダイラ←コナリダイラと撥音便化している。ダイラ（平）は、「山頂または中腹の平らな場所」をいう岐阜県の方言。コナンダイラとは、「山頂や中腹の平らな場所があり、（玉川の）川音が響くところ」を意味するか。この小字は全体として、緩い傾斜地になっているので、下の方から川音が聞こえてくる所。

②コナは第二年目の焼畑のことをいう所があるという。コナンダイラ←コナダイラと撥音便化したもので、コナンダイラとは、「山頂や中腹に平らな場所があり、焼畑が行われていたところ」か。現在は畑地もないが、かつては焼畑が行われた山地でもあろう。

全国地図にはコナンダイラ地名は記載が無い。

【ナカホリ】

この小字は、玉川を挟んでコナンダイラ小字の南側の丘陵地にあり、中に小さなホカボリ小字を取り込んでいる。

ナカホリとは何か。二説を挙げる。

①ナカは「山などの間」（語源辞典）で、「谷」のこと。ナカホリとは、「川

に削られた山間の谷」か。

②フカホリ(深)に対するナカホリ(中)で、「それほど奥に入らない山地の谷」をいうか。

【門前】

モンゼン。

この小字は玉川右岸の玉川寺の南西側にある。

いうまでもなく、玉川寺のモンゼン(門前)になるので、このように名付けられた土地である。

さすがにモンゼン地名は全国地図にも多く、105ヶ所に採られている。

【田中】

タナカ。

この小字は中宮にあり、興禅寺対岸の玉川右岸にある。現在も水田地になっている。

タナカとは、「水田の中にある居住地」を意味するか。ありふれた状況で、全国的にもタナカ地名は多い。記載地点が全国地図には339ヶ所にものぼる。

【大山】

オオヤマ。

この小字は原平の玉川右岸の丘陵地で、コナンダイラ小字の奥にある。側稜の尾根筋を含む南側の傾斜地になっている。

オオヤマのオオは美称か。オオヤマとは、単なる山で、「丘陵地」をいうか。単純にすぎるといっても、修験道場として知られている神奈川県の大山との関係を暗示するものもない。

国土地理院の全国地図にはオオヤマ地名が109ヶ所と多く記載があるが、大山参りが盛んであったためだろうか。

【深堀】

フカホリ。

この小字は上平の玉川左岸の丘陵地で、ナカホリ小字に囲まれている。

フカホリとは何か。語源辞典によって二説を挙げておきたい。

①フカは「奥行きの深いこと」。ホリは急流が浸食してできた谷をいう。フカホリとは、「丘陵の奥地で、河川に削られてできた谷のあるところ」か。ここでは玉川の支流の浸食による。

②フカ←フケ(沮)と転訛した語で、「湿地」をいう。フカホリとは、「自然湧水のある川が浸食してできた谷」をいうか。

全国地図には、フカホリ地名が5ヶ所、フカボリ地名も5ヶ所が記載されている。

【井下】

イシタ。

この小字は中宮にあり、普門寺の南、玉川と主要地方道下条米川飯田線に挟まれた小さな小字である。

イシタとは、「井水の取り入れ口の下側の土地」をいう。上流側の小字がイグチ(井口)となっているので、つながる。

【樋ヶ沢】

トイガサワ。

この小字は上平にあり、玉川支流の越久保川の中流部に二ヶ所ある。

トイガサワとは何か。二説を挙げる。

①トイ←ドエ(崩)の転で「崩壊地形」をいう(語源辞典)。トイガサワとは、「崩壊地のある、川の流れている谷」をいうか。

②トイは「川」のこと。サワは「山間などの湿地」(語源辞典)。トイガサワとは、「山間の湿地を水が流れているところ」となる。同意反復を避けたので、かえって不自然か。

この越久保川の流域に二ヶ所もト

イガサワ小字があるということは、かつて、この川が「樋ヶ沢」と呼ばれていた可能性もある。

【ネギドノヤシキ】

この小字は上平の玉川の左岸で、越久保川との合流点のすぐ上流側にある。

ネギ（祢宜）は「神主の下、祝の上に位する神職」（広辞苑）とあるが、ここでは、神職一般をいう。

ネギドノヤシキは、「神職の居住地であった所」であろう。久堅神社の前身に当たるお宮の神官が居住していたものと思われる。

国土地理院の全国地図には、ネギドノヤシキ地名は載っていない。

【池下】

イケシタ。

この小字は上平にあり、玉川右岸のカワラ小字とテラノウエ小字の間にある。

イケシタとは、素直に解釈すれば、「池の下の方にある土地」ということになるが、現在、上の方には池は見当たらない。地名発生時には上の方に池があったのであろう。現在は、それが埋まってしまっていると理解したい。

イケシタ小字の下側に池はあるが、イケシタを「下方に池がある土地」と解するのは無理があるように思えるので、ここでは採らない。

全国地図には、イケシタ地名は8ヶ所にある。

【前田】

マエダ。

この小字は、上平の玉川寺の東隣にある小さな小字である。

マエダとは「玉川寺の前にある田んぼ」ということになるが、現在は玉川寺の正面に向かって右側になる。これ

を“前”としたのか、それとも、かつてはこの東側が正面であったのかどうかは、わからない。

【川原】

カワラ。

この小字は玉川寺前方の玉川に氾濫原にある。現在は住宅や池になっている。

カワラとは、「川沿いの平地」（広辞苑）という。現地はその通りの場所になっている。

【竹ノ花】

タケノハナ。

この小字は、原平の主要地方道下条米川飯田線の辻付近にある。ハマイバ小字にある独立峰の西側の末端部になる。

タケノハナは、タケ（高所）・ノ（格助詞）・ハナ（端）で（語源辞典）、「高い所の麓」を意味する。

全国地図には、タケノハナ地名が、中・大字として28ヶ所に記載がある。

【シマゼ】

この小字は中宮にあり、側稜の末端部が中心部に張り出している。

シマゼとは何を意味するのか。シマ地名は水と離れては存在しがたいようで、流水などのないシマゼ小字をどう解釈するか難しいが、あえて二説を挙げる。

①シマは動詞シマク（繞）の語幹で、「取り巻いているような地形」をいうか。ゼはセ（背）の濁音化で、「山の峰」（語源辞典）のこと。シマゼとは、「山の峰が取り囲まれているような地形のところ」を意味するか。

②シマは側稜などの頂部の山を海の中の島に見立てたものか。シマゼとは、「島のように見える山稜の末端部」をいうか。

国土地理院の全国地図には、シマゼ地名は1ヶ所にだけ記載されている。

【バコ坂】

バコザカ。

この小字は、中宮のシマゼ小字やリュウゲンジ（龍源寺）小字のある側稜の麓の部分にある。

バコザカとは何か。これも難しい。解釈を二つ。

①バはハ（端）の濁音化した語か。コはコ（処）で場所を表す接尾語（以上は語源辞典）。以上から、バコ坂とは「平地の端にある坂道」を意味するか。当時の村人たちの意識からすれば、丘陵の端ではなくて、ほぼ平坦地になっている水田地帯の端であろう。バコは「端っこ」と関連しているのであろう。

②バコ←ハコ←ハケと転じた語で「崖地」系の地名であるという（語源辞典）。バコザカとは、「崖地になっている坂道のあるところ」か。

全国地図には、1ヶ所、バコザカ地名があり、「箱坂」の字を宛てている。

【マツバリ】

この小字は中宮の興禅寺周辺の水田地帯の最も山寄りの地にある。

マツバリとはマツバリダのことと思われる。マツバリダとは「ひそかに開墾した田」つまり「隠田」である（語源辞典）。マツバリとかマツボリは各地に方言があり、へそくりのことを表しているという。

確かにこのマツバリ小字は南～西側にはりついているシマゼ小字の蔭になって、発見されにくい場所になっている。

なお、全国地図には、マツバリ地名は記載されていない。

【洞】

ホラ。

この小字はマツバリ小字と接しており、シマゼ小字の丘陵の蔭地にある。

ホラとは、水平方向に入り込んだ凹地になっている場所を指すものと思われる。

全国地図には、ホラ地名が26ヶ所もある。伊那谷に多い地名とみているので、そのわりには多いか。

【ヤシキ】

この小字は中宮の玉川左岸氾濫原にある。現在は水田になっていて微高地には住宅もある。対岸にはイグチ・イシタ・ツカアナなどの小字がある。

ヤシキとは、「家屋を構えた一区域の地。武家の住宅」（広辞苑）なので、ここ中宮のヤシキとは「知久家の家臣の住居跡」か。

国土地理院の全国地図には、ヤシキ地名が73ヶ所に記載されている。

【宮ノ原・上宮ノ原】

ミヤノハラ・カミミヤノハラ。

これらの小字は、玉川の左岸にあり、久堅神社を含めたその周辺の非常に緩やかな傾斜地にある。カミミヤノハラ小字は小さな飛び地が1ヶ所ある。

ミヤはいうまでもなく久堅神社、あるいはその前身の合祀前にあった宮々のことをいう。ハラは広い平坦地をいうが、神聖な場所であることも意味している。

ミヤノハラは、「神聖な神社のある広い平坦地」をいう。

カミミヤノハラはミヤノウエ（宮ノ上）小字を挟んで、ミヤノハラ小字の上流側にある。カミミヤノハラとは「川上側にあるミヤノハラ」で、「上流側にある神聖な広い緩傾斜地で神社のあるところ」か。

全国地図には、ミヤノハラ地名は、中・大字として12ヶ所が挙げられて

いる。

【ノキバ】

この小字は、中宮のミヤノハラ小字の東側にある。風張丘陵の傾斜地と緩やかな傾斜の平坦地からなる。

ノキバとは何か。解釈を二つ。

①ノキはノキバ（軒端）のことで、伊那や水窪の方言で「家の裏手の土地」をいう。この小字の東側にはネギヤ小字があるので、ノキバとは、「柵宜屋の裏手の土地」を意味するか。

②ノキはヌキ（抜）の転で、「崩壊地」のことをいう（語源辞典）。ノキバとは、「崩れ地のある場所」であろうか。

全国地図には、ノキバ地名は1件もない。

【林ノコシ】

ハヤシノコシ。

この小字は、龍源寺丘陵の南東側の麓にある。ノノジリ小字の南側になる。

ハヤシノコシとは何か。これも語源辞典によりながら二通りの解釈を示したい。

①ハヤシには「傾斜地」の意味もある。ハヤシノコシとは、「樹木の生えている傾斜地の麓の地域」をいうか。

②コシは動詞コス（漉）の連用形が名詞化した語で、「水がわき出る地」をいう。ハヤシノコシとは、「傾斜地の近くで自然湧水のある所」か。

全国地図には、ハヤシノコシ地名は載っていない。

【門下】

モンシタ。

この小字は興禅寺の下流側にある。

モンシタとは、字面の通りで、「興禅寺の門より低い方にある土地」であろう。

全国地図には、モンシタ地名は載っていない。

【寺前】

テラマエ。

この小字は、興禅寺の境内にあり、現在、本堂のすぐ前にある。

テラマエも字面の通りで、「興禅寺の前側の土地」をいうのであろう。

国土地理院の全国地図には、テラマエ地名は52ヶ所にもある。

【内田】

ウチダ。

この小字も興禅寺本堂のすぐ上流側にある。

ウチダとは「内にあるところ」すなわち、「興禅寺の境内にある土地」を表すものと思われる。

全国地図には、中・大字として、ウチダ地名は50ヶ所に挙げられている。

【全徳】

ゼントク。

この小字は風張丘陵の尾根から北側半分の傾斜地にある。

ゼントクとは何か。音読地名は分かりにくい。これも語源辞典に依りながら、迷いつつ二説を挙げる。

①ゼントク←セリトコと撥音便化しつつ転じた語か。セリは動詞セル（迫）の連用形で「谷の最奥の登り上がっている所」をいう。トコ（床）は「高くなった所」のこと。以上から、ゼントクとは、「谷を登り上がって高くなっているところ」を意味するか。

②トク←トキ（解）と転じたもので、「ばらばらにほどける」意から、「崩壊地形」をいう。ゼントクとは、「谷を登りあがって崩れ地になっている場所」を意味するか。

全国地図にはゼントク地名が4ヶ所にある。当てられている字は「全徳」が1ヶ所、「善徳」が3ヶ所。

【小沢】

コザワ。

この小字は風張丘陵の北西側傾斜地にある。上平集落センターがあり、南西側の上の台地には小学校がある。

コザワは文字通り、「小さな谷川」を意味するか。

全国地図には中・大字としてのコザワ地名が34ヶ所もある。

【日影】

ヒカゲ。

この小字の中に上久堅小学校がある。風張丘陵の尾根を含む北東側傾斜地になる。

ヒカゲは日当たりの良くないところではあるまい。確かに傾斜地の下方は北向きの場所もあり、日当たりはよくないが、小学校の校地は尾根の広い平坦地になっていて、日当たりはいい。

ヒカゲとは、「日当たりのいい場所」であろう。カゲ（影）はヒカリ（光）を意味する。

【杵前】

モクゼン。

この小字は、玉川左岸にあり玉川寺の対岸になる。周辺をカミウエノハラ小字に囲まれている。

モク（杵）は「こたくみ」をいい、コダクミとは「木材で家屋・建具などをつくる工人。大工。番匠」をいう（広辞苑）。コダクミは番匠とどう違うのかよく分からないが、大きな建物を手がけない傾向があったのかもしれない。ゼン（前）は、「手前」のことであろうか。

以上から、モクゼンとは、「こたくみの作業場兼住宅があった場所」であろうか。

全国地図には、意外なことに、モクゼン地名の記載が無い。

【妻ノ神・妻神】

サイノカミ・サイカミ。

この小字は風張丘陵の北東側の麓にある。サイカミ小字が1ヶ所、サイノカミ小字が2ヶ所にあり、ほぼかたまっている。

サイノカミは村境などに置かれ、邪霊の侵入を防ぎ行路の安全を守る神であるといわれている。

伊那谷にはどこにでもある小字であり神様であるが、この上平の場合、境がどうなっているのか、はっきりしない。風張との境になるのか、それとも越久保か。

全国地図には、中・大字として、サイノカミ地名は29ヶ所にある。

【山ギハ】

ヤマギワ。

この小字は、小学校の校地の北東側傾斜地の麓にある。ヒカゲ小字の北東隣にあたる。

ヤマギワとは、「丘陵地の麓」をいうか。現在は水田や墓地になっている。

全国地図には21ヶ所で記載されている。当てられている字はすべてが「山際」となっている。

【永福寺】

エイフクジ。

この小字は上平の玉川左岸となる。玉川氾濫原の微高地にあり玉川寺の対岸になっている。小さな小字である。

知久18ヶ寺の一つといわれている。玉川に接していることが気になるが、微高地にあつて土石流でなければ増水時にも流されることはなかったのであろうか。

『下伊那史第六巻』には、「中宮原の重林丘陵の南側上に」とあるが、その位置とは異なる所にある。

【ゼイシン】

この小字は玉川左岸にあり、越久保川が合流するところとなっている。

ゼイシンとは知久18ヶ寺の一つである「是心寺」のあった所。

因みに、国土地理院の全国地図には、ゼイシン地名は無いが、セイシン名は2ヶ所にあつて、「清心」「誠心」の字が宛てられている。

【ヨソガイト・外垣外】

ヨソガイト・ソトガイト。

これらの小字は、風張丘陵の北東側傾斜地の麓の平坦地にあり、大部分が、現在は水田になっている。

ヨソガイトもソトガイトも同じ意味と思われる。はっきりしないが、「余所の人が住み着いていた居住地跡」か。

全国地図には、ヨソガイト地名もソトガイト地名も載っていない。

【風張】

カザハリ。

この小字は、風張丘陵地の尾根から南北側の傾斜地のほとんどを占める。上久堅地域振興センターや公民館も含まれている。もう一ヶ所、南東方向の尾根続きにもカザハリ小字の飛び地がある。頂部と南西側斜面を含む。

カザハリとは、「風の強く吹き当たる所」をいう（語源辞典）。

下久堅の柿野沢や阿智村にもカザハリ小字はある。全国地図には6ヶ所にカザハリ地名があり、いずれも「風張」の字が宛てられている。

【古寺】

フルデラ。

この小字は、風張丘陵の北東側山麓に広がる棚田状の水田地帯になっている。

『下伊那史第六巻』には、フルデラは、寺名は不明であるが、知久18ヶ寺の一つに数えている。

全国地図には、フルデラ地名が6ヶ所、フルテラ地名が2ヶ所にあり、いずれも「古寺」の字が宛てられている。

【八王子】

ハチオウジ。

この小字は風張丘陵の尾根を東方にたどった頂上部の平坦地にある。国道256号線がすぐ近くを通る。

ハチオウジは「八王子を祀る社のあった場所」か。八王子は近江の日吉山王、祇園牛頭天王、稲荷神の系統があり、この中で牛頭天王系統の八王子社が全国に散在しているという。

御師などを通して勧請されたものであろうか。詳しいことは不明である。

全国地図には、13ヶ所にハチオウジ地名がある。当てられている字は「八王子」9ヶ所、「八王寺」3ヶ所、ひらがな1ヶ所となっている。

【上垣外】

カミガイト。

この小字は越久保の越久保川右岸にあつて、ホソノサワ小字の上流側にある。現在も住宅地になっている。

カミガイトとは「上流側にある居住地のある所」であろうか。下流側の越久保川左岸には、サクラガイト小字やもっと下流にはババガイト小字があるので、それに対して“上の方にある”居住地を表しているのであろう。

【丸山】

マルヤマ。

この小字は、越久保に三ヶ所と大鹿に一ヶ所の合計四ヶ所にある。

いずれも、それらの小字内か隣の小字に独立峰に近い山があり、山の神もそれらの峰々におわすことが多かったのではないかと思われる。

【コセダ】

この小字は風張丘陵の一つ越久保

川の谷を越えた東側の側稜にある。この側稜の南西側傾斜地を道が通っている。

コセダとは何か。

コセは長野県の一部では「一方が山側になった道」をいう（語源辞典）。ダはダ（田）かダ（処）のこと。

以上から、コセダとは「一方が山側になった道のある土地（あるいは田んぼのあるところ）」であろうか。

全国地図には、コセダ地名が2ヶ所にあり、いずれも「小瀬田」の字を宛てている。

【ネギヤ・子ギヤ】

ネギヤ。

これらの小字は、越久保の越久保川右岸にある。対岸の西隣にはババガイトがあり、国道256号線が通っている。

ネギヤは一般の辞書類や語源辞典などにも出ていないが、「祢宜屋」で、「神官の居住地があったところ」を意味するものと思われる。近くには富士神社もあり、上久堅は寺社の多いところなので、この解釈でいいのではないだろうか。

【フンマタギ】

この小字は、越久保の日向平集会所のあるところで、国道256号線の北東側にある側稜の頂上部から南西側傾斜地になっているところである。越久保川が、この小字の南西端を流れている。

フンマタギとは何か。フンマタギとはフミマタギ（「踏み跨ぐ」）から転じたもので、修験道の行儀の一つである足踏みのことであろう、と原董さんは書いておられる（上久堅の民俗）。

ここで、あえてもう一つ、別の解釈を示しておきたい。フンマ←フミマで、

フミ（「麓」の意）・マ（「場所」のこと）をいう（以上は語源辞典）。フンマタギとは、「丘陵の麓を急流が通っているところ」か。

なお、全国地図には、フンマタギ地名もフミマタギ地名も記載は無い。

【桐山】

キリヤマ。

この小字は、越久保のネギヤ小字とコセダ小字の間にある小さな小字で現在は殆どが水田になっている。

キリヤマとは何を意味するのか。桐が植えられていた所ではないであろう。解釈を二つ。

①キリはキリ（切）で、「切り開いた開墾地」をいう。キリヤマとは、「開墾されたところ」をいうか。

②キリヤマはキリヤマ（霧山）か。緩傾斜地の麓に近いところで、湧水が多く、小盆地で気温の逆転もありそうなので霧の発生も考えられる。

全国地図には、キリヤマ地名は32ヶ所に中・大字として載せられている。当てられている字は「桐山」12,「切山」14,「霧山」5ヶ所となっている。

【細ノ沢】

ホソノサワ。

この小字は越久保にあり、越久保川に東側から流れ込む支流が開析した細長い谷になっている。現在でも一部に畑はあるが、水田のない山地である。

ホソノサワとは、「長さに対して幅の狭い、細長い谷」を意味しているものと思われる。

全国地図には、なぜか、ホソノサワ地名は一つも挙げられていない。

【紳堂】

ジンドウ。

この小字は越久保フンマタギ

小

字の側稜頂部を挟んで、その北東側と南西側の2ヶ所の傾斜地にある。この二ヶ所の小字も、地名発生時には繋がっていて尾根の頂上部も含まれていたと思われる。

ジンドウとは何か。ジンドウ（神堂）

とは「天子などの墓で、地下にある祭霊所」のこらしい（漢和大事典）が、ここには当てはまらない。解釈は二つ。

①ジン（神）もドウ（堂）も、寺社に関わる語である。ジンドウとは、「寺社があった所」としたいが、今のところ、その痕跡を見出せないでいるが、可能性は高い。

②ジンは「小盆地とか山腹の小平地など」をいい、ドウは「川音による音響地名」であるという（以上は語源辞典）。以上から、ジンドウとは、「小平坦地で、越久保川の川音が聞こえる場所」をいうか。語順が少し気にはなるが。

国土地理院の全国地図には、ジン

ドウ地名は2ヶ所、シンドウ地名は64ヶ所にも挙げられているが、

「神堂」の字を当てられている所は無い。

【イリノタ・入ノタ】

イリノタ。

これらの小字は、越久保の越久保

川の左右両岸にある。

イリは「山と山との間の沢」で、ノタはノタ（野田）で、下伊那郡では「山間の湿地」をいう（以上

語源辞典）。

以上から、イリノタとは「山間の沢が流れている湿地」をうか。沢とは越久保川のこと。ここでは、ノタはノ（格助詞）・タ（処）という解釈は採らない。

全国地図には、イリノタ地名は無い。

【ヨキトギ】

この小字は越久保川右岸の南西向き傾斜地に、二ヶ所ある。かつては、谷の続く一つながりの小字であったと思われる。イリノタ小字とハシバ小字に挟まれている。

ヨキトギとは何を意味するのか。解釈を二つ。

①ヨキは動詞ヨキル（過）の語幹で、

「避ける」の意（国語大辞典）。トギはツキ（築）かトコ（床）の転で、「高くなった所」をいう（語源辞典）。ヨキトギとは、「（土石流か崩壊土砂が）避けられる高所のあるところ」か。東側のヨキトギ小字の下流部には、わずかではあるが高所がある。

②トギは、動詞トク（解）の連用形が名詞化した語で、「バラバラにほどける」意から「崩壊地形」をいう（語源辞典）。ヨキトギとは、「崩壊土石を避ける所がある土地」か。意味は①とそれほど異なっていない。

全国地図には1ヶ所に、ヨキト

ギ
地名が記載されており、「斧磨」の字が宛てられている。

【ヒンマワシ】

この小字は、越久保にあり、越久保川の狭窄部に上流部にあたる。ここで、越久保川から井水を引き、サクラガイト小字から富士神社のあるミヤノマエ小字を通して

ヒンマワシとは動詞ヒキマワス

(引回)の連用形が名詞化した語で、「引き回すこと」を意味するが、何を引き回すかが問題になる。はっきりしないが、二説を挙げる。

- ①「井水を引き回している所」か。
- ②洪水時の溢れる水を「引き回している氾濫原」をうか。

【市ノ沢】

イチノサワ。

この小字は、越久保川の上流部あり、小字内には越久保上平集会所があり、国道256号線が通っている。

イチノサワとは何か。ここでも説を挙げたい。

- ①イチノサワとは、「市が開かれていた谷」か。戦国時代、街道筋には市場集落が形成されており、下平にもイチバ小字があった。
- ②イチはイツ(巖)の転じたもので、「けわしい地形」をいう(語源辞典)。

イチノサワとは、「けわしい地形になっている谷」か。

全国地図には、中・大字としてイチノサワ地名は44ヶ所にもあ

る。全国地図には1ヶ所に、ヨキト地名が記載されており、「斧磨」の字が宛てられている。

【コイダ】

この小字は、越久保川の上流域にあり、越久保上平集会所の下流側になる。

コイダとは何を意味するのか。源辞典に依りながら、解釈を二つ挙げたい。

①コイ←コシと転じた語で、コシは動詞コス(漉)の連用形で、「水が湧き出る地」を意味する。ダはダ(処)で「場所」を示す接尾語。コイダとは、「自然湧水の多いところ」か。

②コ(接頭語)・イ(キ。「水のある所」)・ダ(接尾語「処」)で、コイダとは、「井水など水の多い所」であろうか。この小字内には、越久保川とその大きな支流が流れており、自然の湧水も多い。

全国地図には、中・大字としてコイダ地名が2ヶ所にあり、「小井田」の字が宛てられている。

【櫻垣外】

サクラガイト。

この小字は、越久保川の狭窄部を抜け出たところにある。西側には富士神社がある。

サクラガイトとは何か。これも語源辞典に依りながら、二通りの解釈を示したい。

- ①サクラガイトとは、「桜のある住居跡」か。サクラは瑞祥地名として使われたか。
- ②サクは動詞サクルの語幹で「決壊すること」をいう。ラは「場所」を示す接尾語。サクラガイトと

は、「川の決壊場所のある住居跡」か。

全国地図には、サクラガイト地名は一つも記載されていない。

【フジ】

『下伊那地名調査』には、「富」となっているが、村誌に従って「フジ」と訂正した。

この小字は富士神社の拝殿周辺にあたる。

【ヨコダイド・横大戸】

ヨコダイド。

この小字は越久保にあり、細田川と越久保川の間、側稜の尾根付近に細長く横たわる小字である。富士神社がその北東側にある丘陵でもある。

ヨコダイド←ヨコダイドウ（横大道）と転じたもので、森にある「横大道」小字と同じであろう。

ヨコダイドウとは、「横、つまり等高線に沿うように、尾根付近を通る、幅のある道」か。古くは尾根道が多かった。道路維持上の選択であろう。

全国地図には、ヨコダイド地名は無いが、ヨコダイロウ地名は1ヶ所にあり、「横大道」の字が宛てられている。

【宮ノ前】

ミヤノマエ。

富士神社周辺の小字である。山神として祀られており、境内には、浅間社・池野社・秋葉社・稲荷社・若宮社があるという（村誌）。

ミヤノマエとは、「富士神社の前方を含めた周辺の地域」をいう。

【天堤・雨堤・雨つつみ】

アマズツミ・アマツツミ。

上久堅には3ヶ所にアマツツミ系

の小字がある。一つは越久保のヨコダイド小字の北側にあり、小字内には、越久保高齢者若者センターがある。小字内の西よりのところには小さな堤もある。二つ目は蛇沼にある。千代の田力との境界に接して、二ヶ所に分かれているが、いずれも現在は堤がなくなっている。埋まってしまったのだろうか。三つ目は堂平にあり、平栗川左岸の落倉川が合流する地点にある。ここにも堤がある。

アマズツミとは何か。一般の辞典類や語源辞典などにも記載はない。それでも、全国地図には、アマツツミ地名は2ヶ所に中・大字として挙げられており、「天堤」「雨堤」の字が宛てられている。

アマズツミは伊那谷南部に特徴的な地名かもしれない。

アマズツミとは、「雨水と自然の湧水を溜めて灌漑用水にしていた堤のある所、あるいはあった所」を意味する。

【中ノ沢】

ナカノサワ。

この小字は、越久保にあり、越久保川と西の方にある細田川との間の側稜の頂上部を含む南西側傾斜地にある大きな小字である。

ナカノサワとは、「越久保川と細田川の間、沢になっている所」であろうか。この小字の北西側には越久保川があり、南西側には細田川が流れている。あるいは、北東側にある越久保の富士神社と南西側にある森のお宮の間ということもあり得るが、根拠が弱い。

全国地図には、ナカノサワ地名は、中・大字として86ヶ所に挙げられている。

【ナギ洞】

ナギボラ。

この小字は大きな小字が一つと、その下流側末端部に、いずれも小さな小字で、「ナギホラ」二ヶ所、「ナギ洞」一ヶ所、「崩洞」二ヶ所、「なきほら」小字が一ヶ所ある。大きな小字は、細田川の支流が開析した洞で、中ノ沢丘陵の南西側の谷となっている。この洞の最も低い所は棚田になっており、西部の細い尾根は緩い傾斜地になっていて畑が多い。

あちこちにナギ(薙)の崩壊地があって、ナギボラという小字名になっていると思われる。

【大洞】

オオボラ。

この小字の南側には、ボンダ小字とアマツツミ小字がある。

オオボラとは、文字通り、「大きな洞」であろう。しかし、念のため、別の解釈も示しておきたい。

オオ←アフ(アブ)と転じたもので、アブ=アバで、アバは動詞アバル(荒)の語幹から「崖地」をいう(語源辞典)。以上から、オオボラとは、「崖地の多い谷」をいうこともあるか。

全国地図には、オオボラ地名が20ヶ所、オオホラ地名が15ヶ所ある。

【盆田・ボンダ】

ボンダ。

側稜の頂部(標高752.5m)とその南側の谷の一角が大きなボンダ小字になっていて、あと二ヶ所に小さな小字がある。

ボンダとは何か。解釈を二つ。

①ボンダとは、「谷が小盆地のような地形になっている所」であろうか。三ヶ所のボンダ小字の内、一つが、傾斜地だけで盆地状になっていないが、三つが繋がっていたとすれば、問題は無

い。

②ボン←ボウと転じた語で、「堂宇」をいう(語源辞典)。ボンダとは、「寺院か神社のあった所」と考えることはできないだろうか。

全国地図には、ボウダ地名もボウタ地名も記載が無い。

【キミサキ】

この小字は、オオボラ小字の谷を南側から見下ろす位置にある。アマツツミ小字の北側になる。

キミサキとは何か。二説を挙げたい。

①キミ←キビの転訛した語で、形容詞キビシ(巖)の語幹から、「けわしい」ことをいう(語源辞典)。サキはサキ(先)で、「突き出た部分」(広辞苑)のこと。すなわち、キミサキとは、「峻しい傾斜地が突き出ている部分のある場所」をいうか。

②キはキ(牙)で「鋭く尖った場所」(語源辞典)をいう。ミサキはミサキ(岬)で海や湖に突き出たところをいうが、その岬に見立てた地形にその名を付けたものと思われる。キミサキとは、「尖ったように突き出ている岬のような所」をいうか。

全国地図には、キミサキ地名は記載が無い。

【アタコ】

この小字は越久保にあり、富士神社の北方に当たる。越久保川が流れ国道256号線が通っている。

この小字には、今でも愛宕様が祀られているという(上久堅の民俗)。中世、仏教と習合して修験者によって全国に広まったといわれている。

全国地図にはアタコ地名は一つもないが、アタゴ地名は31ヶ所に記載がある。

【ボンゾウ】

この小字は、アタコ小字の北側にあって、ババガイト小字との間に挟まれている。

ボンゾウとは何のことか、このままでは全くわからない。そこで、ボンゾウ←ハウゾウの転訛した語ではないだろうか、と考えた。ハウゾウはハウゾウ（宝蔵）で、「寺院で、経典を収めておく建物。経堂。経蔵」（国語大辞典）である。ボンゾウとは、「宝蔵のある場所」ということになる。どうであろうか。

ただ、寺院が越久保川下流の、フルデラかハチオウジということになるが、あるいは共同管理していたのかもしれない。これらの寺院がボウゾウ小字からやや離れているのが気になる。ただボンダ小字に寺院があったとすれば、この解釈は生きてくる。

これに対抗できるような解釈は現在のところ、見つけられないでいる。

全国地図には、ボンゾウ地名の記載は無いが、ハウゾウ地名は1ヶ所にあり「宝蔵」の字が宛てられている。

【馬場垣外】

ババガイト。

この小字は越久保川左岸にある細長い小字で、国道256号線が通っている。現在も居住地の多い緩い坂道になっている。

ババ（馬場）あるいは撥音便化したバンバといえ、乗馬の練習や競馬をする平地」（広辞苑）であるが、地形や位置からみて、この地には当てはまらないであろう。神社への参道の出発点という解釈もあるが、この小川路峠を越えて遠山郷に抜ける道を参道と重ねるのは難しい。

ババは、「ハマ、ハバ、ママ、マブに同じく、崩壊地形・浸食地形を示す」

（語源辞典）のものであろう。

ババガイトとは、「崩れ地のある居住地跡」としておきたい。

全国地図にはババガイト地名が、中・大字として、1ヶ所に記載がある。やはり「馬場垣外」の字が宛てられている。

【吉田洞】

ヨシダボラ。

この小字は、ババガイト小字の西側下流側の山地にある。主に北向きの傾斜地と棚田の多い洞になっている。

ヨシはヨシ（葦）で、「葦が生えているような湿地」を意味するか。ヨシダボラとは、「自然湧水のある棚田のある小さな谷」であろうか。

ヨシを崩崖系のアズ、アシの転訛した語とする解釈（語源辞典）もあるが、ここでは採らない。

全国地図にはヨシダボラ地名もヨシダボラ地名も記載は無い。

【ハウゲン】

この小字は越久保川と国道256号線の間であり、ウンケン小字を挟んで2ヶ所にある。ウンケン小字は尾根の標高757.6mの頂上部をもつ。

ハウゲンとは何を意味するのか。三つの解釈を挙げる。

①地元では、「方限つまり地区の境界で、広く辺りを見晴らせる所である」と解いている（上久堅の民俗）。

②ハウゲンは、「法眼」あるいは「法験」で、原董さんは「白山権現の修験活動によって発生し伝えられた地名と思える」としている（上久堅の民俗）。

③別の解釈も挙げておきたい。ハウゲン←ハウケと転訛した語で、ハウケはハケのことで、「山の斜面の崩れた所」（語源辞典）をいう。ハウゲンは、「崩れた傾斜地のあるところ」か。や

や無理気味の解釈ではある。

全国地図には、ハウゲン地名もハウケン地名も載ってはいない。

【コグルミ】

この小字も越久保に、二ヶ所ある。ババガイト小字の西隣と、さらにその西方になる。二つのコグルミ小字の間に、ミチヤシキ小字が挟まれている。

東のコグルミ小字は水田が多く、棚田が中心になっており、西のコグルミ小字は、荒れ地と傾斜地で水田はわずかしかない。

コグルミのコはほとんど意味を持たない接頭語。グルミ←クルミと転じてクルミは、動詞クルム(包)の連用形で、「小盆地」を意味する(以上は語源辞典)。

以上から、コグルミとは、「小さな盆地」をいうか。

国土地理院の全国地図には、コグルミ地名が、中・大字として、2ヶ所に挙げられている。いずれも「小胡桃」の字が宛てられている。

【ウンケン】

この小字は、二つのハウゲン小字に挟まれている。側稜の最頂部がある。

ウンケンとは何か。二説を挙げる。
①密教で胎蔵界大日如来の真言に、「アビラ ウンケン」という呪文がある。この真言を唱えると一切のことが成就するという(広辞苑)。このウンケンが地名になったのではないか、という原董さんの説には説得力がある(上久堅の民俗)。三峰川谷のソマは木を倒すとき、ナムアビラオン、ケンソワカと三度唱えるという(松山義雄『山国の神と人』)。

②敢えて、もう一つの解釈を挙げておきたい。ウンケン←ウンケが転じたもので、ウンケはウミケが撥音便化した

語。ウミは動詞ウム(熟)の連用形で「崖や土手が緩む」(方言大辞典)を意味する。群馬・佐久の方言とか。ケ(気)は「気配。様子」(広辞苑)のこと。ウンケンとは、「雨などで崩れそうな場所のある土地」か。この解釈もやや無理があるか。

国土地理院の全国地図にはウンケン地名は記載が無い。

【ミチヤシキ】

この小字は、二つのコグルミ小字の間にあり、標高 740.9m を含むその南向き傾斜地にある。

ヤシキは「屋敷跡」であろうが、ミチヤシキとは何か。二説を挙げたい。
①ミチヤシキとは、「道路に面した屋敷のあった所」か。果たして、これが地名になるのか、という疑問は残る。現在はこの小字内に住居はないが、頂上部か中腹の小平地か谷底の平坦地に屋敷があったと思われる。

②ミチ(道)には、「神仏、聖賢などの示した道。特に仏道をいう場合が多い」(国語大辞典)の意がある。ミチヤシキは、「仏道の修行が行われていた屋敷のあったところ」と解することもできる。しかし、「堂」といわずに「屋敷」としていることにこの解釈への不安が残る。

全国地図には、ミチヤシキ地名が中・大字として1ヶ所にあり、「道屋敷」の字が宛てられている。

【狐山】

キツネヤマ。

この小字も越久保にある。南北にミオオボラ小字とチヤシキ小字があり、東西にヨシダボラ小字とコグルミ小字がある。オオボラ小字の尾根の北向き傾斜地に当たる。

キツネヤマとは、稲荷神社の痕跡も

無いので、「イヌ科の動物である狐が棲息していた山」であろうか。

全国地図には、キツネヤマ地名は3ヶ所にある。

【牧ヶ洞】

マキガホラ。

この小字は、ミチヤシキ小字の北隣にある。細田川支流の最上流部になるが、東端は馬場垣外に接している。

マキガホラとは何か。解釈を二つ。
①マキとは「山でとり巻かれた地」の意（語源辞典）という。マキガホラとは「山で取り囲まれた平坦地のあるところ」となる。現在、半分以上が比較的広い水田になっている。

②マキは「牧場」と考えることも可能か。マキガホラとは、「牧場のあった谷」ということになる。知久氏軍団の馬を育てていたのであろうか。柵は細田川支流と尾根筋に設けられたか。

全国地図にはマキガホラ地名は、1ヶ所に記載がある。

【ミホラ】

この小字の東西は、ババカイト小字とマキガホラ小字に挟まれ、南北はコグルミ小字とカミゲンダ小字に接しており、東側を国道256号線が通っている。

ミホラとは何を意味しているのか。二説を挙げたい。

①ミホラ←ミズホラ（水洞）と転じた語（語源辞典）で、ミホラとは、「湧水の多い谷」か。

②ミ（接頭語）・ホ（穂）・ラ（ウラの略形）とする（語源辞典）。接頭語ミはミ（美）で美称、ホ（穂）は「先端が突き出たところ」、ウラ（末）は「末端部」をいう。ミホラとは、「上流部が突き出たところ」を意味する。やや無理があるか。

国土地理院の全国地図には、ミホラ地名は1件の記載も無い。

【上ゲンダ】

カミゲンダ。

この小字は、越久保と風張の境界付近に、2ヶ所ある。西側のカミゲンダ小字は細田川支流に沿った広大な長い小字で、西側のは比較的小さい小字となっているが、細田川のもう一つの支流の最上流部にある。西側のカミゲンダ小字は北端を国道256号線が通っている。二つのカミゲンダ小字の間に小さなカザハリ小字が挟まれている。

カミゲンダとは何を意味しているのか。ここでも解釈を二つ挙げておきたい。

①カミ（上）は、「川の上流」のこと。ゲンダ←ケミタ（毛見田）と撥音便化して濁音化した語で、ケミは「中近世に行われた徴税法の一つ。稲の刈入れ前に、政府または領主が役人を派遣して作柄を検査させ、その年の年貢高を定めたこと」（国語大辞典）をいう。カミゲンダとは、「川の上流にあり、毛見によって年貢高を決めた田んぼ」であろう。この小字では、あちこちに崩壊地があり、災害が多く、年貢高を定率でさだめておくことができなかった土地であったと思われる。

②ゲンダ←ケ（毛）・ムタ（沼田）と転訛した。ケは動詞クユ（崩。潰）の連用形クエの転で「崩壊地形、浸食地形」をいう（語源辞典）。カミゲンダとは、「川の上流部にある崩壊地があちこちにあり、沼田の多い所」と解することも可能か。

全国地図にも、カミゲンダ地名が1ヶ所あり、ゲンダ地名は9ヶ所に及ぶ。

【三田沢】

サンダサワ。

この小字は、カミゲンダ小字の東側と北側の二ヶ所にある。カザハリ小字の飛び地とカミゲンダ小字の側稜の南北の傾斜地がサンダサワ小字になっている。現在、南側のサンダサワ小字の谷は、半分ほどが棚田になっているが、北側の谷は水田は一部にしかない。

サンダサワとは何を意味するのか。語源辞典に依って、二説を挙げる。

①ミタの地名に「三田」と当て、一部音読した語で、ミタはミ(水)・タ(田。処)。以上から、サンダサワとは、「自然湧水の多い所を流れる谷川」を意味する。

②サンダはサダの強意形。サダとは「崎」のこと。二つのサンダサワ小字の間にある側稜の尾根の先端をいう。サンダサワとは、「尾根の先端を包むような谷川のあるところ」か。

【久保】

クボ。

この小字は馬場垣外集会所のあるマルヤマ小字の南西側の谷にある。

どこにでもある地名で、クボとは、「窪地」をいう。谷や小盆地であることが多い。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、252ヶ所に挙げられている。

【細田】

ホソダ。

この小字は細田川に沿った長い小字になっており、上久堅福祉企業センターから上久堅保育園までを含む広い面積を占めている。さらに南西側の側稜尾根とその北西側の洞までを含んでいる。

ホソダとは、ホソ(細)・タ(田ま

たは処)で、「細長い水田地帯あるいは土地」を意味する。

全国地図には、35ヶ所にもホソダ地名があり、全てに「細田」の字が宛てられている。

【馬場】

ババ。

この小字は風張にあり、国道256号線と主要地方道下条米川飯田線が平行しているところにある。側稜の尾根が平坦部になっていて、現在、その半分ほどが水田である。

馬場とは何か。語源辞典に依りながら、二通りの解釈を示したい。

①ババとは文字通り「馬の調練場」であろう。知久氏の家臣団が乗馬等の訓練をしていたのであろうか。側稜頂部の広い平坦地は、この山間地には珍しい調練適地であったのだろうか。

②ババは「崩壊地形、浸食地形を示す地名用語である」という。ハバとは、「崩壊地があちこちにある土地」ということも考えられる。頂上部の平坦地も周りには崖が多い。

全国地図には、ババ地名は252ヶ所にもあり、そのうちで「馬場」の字が宛てられているのは248ヶ所にもものぼる。

【水本・水元】

ミズモト。

これらの小字は、細田川周辺の4ヶ所に分布する。

ミズモトとは、その4ヶ所に共通するのは、「自然の湧水の多いところ」であろうか。字面通りの解釈になる。

全国地図には、3ヶ所にミズモト地名がある。

【龍源寺】

リュウゲンジ。

「竜玄寺」という小字もあるが、

BlueMap からその地番を拾い出すことができなかった。

「知久18ヶ寺」の一つ。「立玄寺」とも書いたらしい(下伊那史第6巻)。馬場・龍源寺丘陵の先端部にあり、標高687.5mの最頂部をもつ。

ババ・ヤマサキ・シマノマイ・シマゼ・アマツツミ等の小字に囲まれている。現在、寺院の痕跡は無い。

【シマノマイ】

この小字は中宮にあり、馬場・龍源寺丘陵の北端部の急傾斜地にある。その地番からは拾えなかったが、「嶋ノ前」「鳶ノ前」小字もあるので、マイはマエ(前)であろう。

シマノマイとは、「(観音小字群のある普門院付近から見て)海上に浮かぶ島に見立てた馬場・龍源寺丘陵の前、つまり先端部」の事を表しているものと思われる。

【山崎・山サキ】

ヤマサキ。

これらの小字は、馬場・龍源寺丘陵の北西側の先端部分に1ヶ所、更に北東の方の塩沢川右岸の南沢丘陵の西方に1ヶ所ある。

ヤマサキとは、「山稜の先端部あるいは、さらにその先の麓」を指すものと思われる。

全国地図にも多く、ヤマサキ地名は77ヶ所、ヤマザキ地名は125ヶ所が、中・大字として記載されている。

【日向】

ヒナタ。

この小字は、ババ小字の南東側にあり、風張の主要地方道下条米川飯田線に沿った傾斜地になっている。

ヒナタとは、「日当たりのいいところ」であろう。ヒナタ小字は南西向きの斜面になっている。

【トヤバ】

この小字は、馬場・龍源寺丘陵の西側に少し出っ張った側稜の先端にある。上久堅郵便局の北側に当たる。

トヤバはトヤバ(鳥屋場)で、「網を張って小鳥をとる所」(国語大辞典)である。栃木県や下伊那郡の方言であるという。伊那谷南部の山地には、トヤバ小字が各地にある。

網を霞網といった。太平洋戦争前は、中部地方の山岳地帯で霞網猟が盛んに行われた。渡り鳥が南下する秋から冬にかけて山越えをする尾根などに霞網を張り、ホオジロ・メジロ・スズメなどの小鳥を捕獲した。もちろん現在は禁止されているが、密猟も多いという。

全国地図には、トヤバ地名は2ヶ所にしかないが、伊那谷南部の特徴的な小字の一つかもしれない。

【ボクギ】

他に、ホクキ・ボクキの小字もあるが、場所を特定できないでいる。

この小字は風張にあり、細田川氾濫原に開口する細くて長い谷となっている。

ボクギとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ホグは動詞ホグの連体形で「くずれる」の意(国語大辞典)、キはキ(割)で「割れ目」をいう(語源辞典)。すなわち、ボクギ=ホグキで、「崩壊して割れ目になっている所」か。

②ホクキはホ・クキ(岫)か。ホは動詞ホホム(包)の語幹ホホの略で「包まれたような地形」(語源辞典)をいう。クキ(岫)は「山間のくぼんで入り込んだ所」(語源辞典)のこと。以上から、ホクキとは、「山間のくぼんで入り込んでおり、稜線に包まれたよ

うな所」を意味するか。

全国地図には、ボクギ地名もホクキ地名・ボクキ地名も記載されていない。

【瀧場・タキバ】

タキバ。

これらの小字は風張の細田川両岸にある。さらに、平栗・堂平・森にもある。

タキバ（滝場）とは、「修行や暑さしのぎのために滝にうたれる場所」（国語大辞典）という。

この風張のタキバも、滝が神聖な場として崇められ、滝の周辺に神をまつり汚れを清める滝行や水行などの荒行がおこなわれたのであろう。

この小字のなかのどこで、荒行がおこなわれていたのかは、未確認である。

全国地図に挙げられている中・大字の中で、タキバ地名は1ヶ所しかない。

【ツクイ山】

ツクイヤマ。

この小字は森のタキバの南東側にある。標高 750.5m の独立峰をもつ台地になっている。

ツクは、ツキの古名で、月でも槻でも古くはツクと呼んでいたらしい（広辞苑）。

ツクイ山とは何を意味するのか。語源辞典によりながら解釈を二つ。

①ツク＝ツキで、ツキ（築）は「突出した所」をいう。イは「高くそびえた所」をいうか。以上から、ツクイヤマとは、「突出した所のある台地」を意味するものか。

②イはイ（斎）で、「神聖な」の意か。ツクイヤマとは、「高く突き出た山のある神聖な場所」となるが、証となるような痕跡があるのかどうか、確認はしていない。

全国地図には、ツクイ地名は1ヶ所

にあるがツクイヤマ地名は無い。

【堂上】

ドウジョウ。

森のこの小字は2ヶ所にある。一つはタキバ小字のすぐ東側に、もう一つは森集会所の北東側にある。

ドウジョウとは何か。これが意外と難しい。語源辞典によって二通りの解釈を挙げておきたい。

①ドウ（堂）は、「仏堂のあったところ」をいう。森の観音様が安置されていた御堂があって、ドウジョウとは、「その御堂より高い所」をいうのであろう。しかし、西の方にあるドウジョウについては、この解釈では難しい。

②ドウジョウはドウジョウ（道場）で、「山岳信仰の修行の場」であろうか。西の方のドウジョウ小字はタキバ小字に接しており、説得力はある。

全国地図には、ドウジョウ地名は31ヶ所にも挙げられているが、「堂上」の字を宛てられているのは1ヶ所だけである。

【堂ウラ】

ドウウラ。

この小字は東のドウジョウ小字のすぐ西隣にある。

ドウウラについても、二説を挙げておきたい。

①ドウは「仏堂のあったところ」で、ウラは堂の裏側のこと。ドウウラとは、「仏堂の裏側の土地」か。

②ドウは「川音の響くところ」をいう。ウラはウラ（末）で、「川の上流」（語源辞典）のこと。ドウウラとは、「川の上流部で川音の響くところ」をいう。ここでは細田川とその支流が合流している。

全国地図にはドウウラ地名は1ヶ所に記載がある。

【家上大畑・家下大畑・半治屋敷】

イエウエオオハタ・イエシタオオハタ・ハンジヤシキ。

オオハタの二つの小字は、森のドウウラ小字の南北両側にある。

イエウエオオハタとは、「家より高い所にある大きな畑」であり、イエシタオオハタとは、「家より低い所にある大きな畑」であろう。

問題は、このイエ（家）である。小字図を見て、イエらしい小字はハンジヤシキ（半治屋敷）であろうか。ハンジ（半治）は固有名詞とみてもいいのではないだろうか。すると、ハンジヤシキとは、「半治さんが住んでいた屋敷」となる。従って、イエウエとイエシタのイエ（家）は「半治さんの屋敷」としておきたい。

【ナギボラ・崩洞・ナキボラ・ナギ洞】

ナギボラ。

これらの小字は、ほぼ一ヶ所に固まっている。細田川とその支流の最上流部に広がっている。

ナギボラとは、文字通り、「崩壊地があちこちにある谷」であろうか。

全国地図には、なぜか、ナギボラ地名もナキボラ地名・ナギボラ地名も載ってはいない。伊那谷南部の特徴的な小字名ということなのだろうか。

【沢尻】

サワジリ。

この小字は、細田川の右岸にあり、イエシタオオハタ小字と支流との間にある。

サワジリとは何か。当たり前のようにあるが、意外と難しい。二説。

①サワジリとは、「谷の末端部」であるが、この谷は細田川の谷ではない。というのは、細田川はもっと奥から出ているので、とても“末端部”とはい

えない。ここでいう“谷”とは細田川に開口している浅い北側の谷を指す。

②サワジリとは、「沢の近くで湿地帯があるところ」をいう。意味が重複するので、問題はあるか。

全国地図には、19ヶ所にサワジリ地名があがっていて、18ヶ所が「沢尻」の字が宛てられている。

【北ノ入】

キタノイリ。

この小字は細田川と支流の合流点にあり、支流に挟まれた土地になっている。

キタノイリとは何を意味しているのか。ここでも解釈は二通り。

①この小字の南東方向に、森集落センターやミヤノダイラ小字があるので、「（森の中心からみて）北の方にある細田川の上流部」を意味するか。

②キタはキダ（階）で、棚田をいうか。キタノイリとは、「川の上流部にある棚田」をいうか。

全国地図には、2ヶ所にキタノイリ地名が載っている。

【久保畑】

クボハタ。

この小字は、細田川右岸にあつて、森集落センターのあるミヤノダイラ小字との間に2ヶ所ある。二つのクボハタ小字の間には、タキバ小字が挟まれている。

クボハタは字面の通りで、「窪地にある畑」であろう。片側の窪地で平坦になっている。

全国地図にはクボハタ地名は、中・大字として3ヶ所に記載がある。

【宮平】

ミヤノダイラ。

この小字には森集落センターがあり、稜線尾根の先端部分で緩い傾斜地

になっている。祀られているのは山の神・天神・豊川稻荷の三体だという（上久堅の民俗）。

ミヤノダイラとは、「お宮を祀っている側稜中腹の平坦地」をいうのであろう。

全国地図にはミヤノダイラ地名は、4ヶ所に記載されている。

【居垣外】

イガイト。

この小字は森の奥、細田川上流部にある。

イは井（井）で泉や流水をいう。イガイトとは、「自然湧水が利用できる居住地のある所」を意味するか。

全国地図には、イガイト地名もイカイト地名も記載は無い。

【こうそ田・コウソ田】

コウソダ。

この小字は、ミヤノダイラ小字の緩傾斜地につながる側稜の尾根から細田川に至る傾斜地にある。

コウソダとは何か。考えられる解釈を二つ。

①コウソダとは、コウゾ（楮）・ダ（処）で、「和紙の原料である楮を栽植されていた場所」であろう。村誌によれば、村内産だけでは原料の楮が不足していて、上村方面から小川路峠を越えて買い入れていたという。楮は本州以西の山野にも自生している。

②コウ←カミ（上）と転訛した語で、「高い所」をいう。ソダはソウタ（サハ・タ）から転じた語で「湿地」を意味する（以上は語源辞典）。コウソダとは、「高い所にある湿地」のことか。

全国地図の中・大字には、コウソダ地名は載っていない。

【家上】

イエウエ。

この小字も森地区の奥、イガイト小字の北側になる。

イエ（家）はイガイト小字にある家であろう。イエウエとは、「イガイト小字にある家の上の方」を意味する。

全国地図には、イエウエ地名は一つも無い。

【三角畑】

サンカクバタ。

この小字は、森地区にあって、イエウエ・イガイト・モリハラ・ナギボラ等の小字に囲まれている。

この小字の形が三角形であることから、サンカクバタと名付けられたものと思われる。

全国地には、中・大字であるためか、サンカクバタ地名は載っていない。

【森原】

モリハラ。

この小字はイガイト小字の上流側と下流側の二ヶ所にある。

モリは「土地の小高い所」をいい、ハラには「山腹」の意味がある（以上語源辞典）。低地の細田川からみれば、小高い所になっているが、その場所は山腹の平坦地である、ということだろうか。

また、モリにもハラにも神聖な場所で人の立ち入らない未墾地といった意味もあるようだ。

以上から、モリハラとは、「山腹の平坦地で、神聖な地というイメージのあるところ」か。

かつて山の神がおわす地と考えられていたのかもしれない。

全国地図には、中・大字としてモリハラ地名が2ヶ所に挙げられていて、「森原」の字が宛てられている。

【なしの木】

ナシノキ。

この小字は細田川最上流部の急傾斜地にあって、一部は平坦な緩傾斜地となっている。東西には、モリシタ小字とアリヅカ小字があり、南北にはカワラ小字とナカジマ小字に接している。

ナシノキとは何を意味するのか。解釈を二つ挙げておきたい。

- ①ナシはナラシ（平）の転で、「平坦地。緩傾斜地」をいい、ノキはヌキ（抜）の転で「崩壊地形」を表す（以上は語源辞典）。ナシノキとは、「崩壊地が周りにあるが中心に平坦地のある所」か。
- ②ナシノキとは、「山梨が自生している所」であろうか。自生地は西日本とされているが。

【森下】

モリシタ。

この小字は、二つあるモリハラ小字の東の方の西隣にある。イガイト小字の南隣でもある。

モリシタとは、「モリハラ小字の下側にある土地」をいう。この小字があることからみても、モリハラ小字には、何か神聖な場所という見方があったものと思われる。

全国地図には、モリシタ地名は、中・大字として、35ヶ所に挙げられている。

【馬トメ・まとめ・マドメ】

マドメ。

これらの小字は、細田川流部に並んでおり、モリハラ小字の南隣になる。

マドメとは、「伐採した木を一時集めておく山間のわずかな平地」（国語大辞典）をいう。

これ以上、馬が入れない所という意味でマドメと呼ばれるようになったと思われる。仕事場や休み場などにも利用され、マバ（馬場）とも、コバ（木

場）ともいわれていたらしい。

全国地図には、マトメ地名もマドメ地名も、なぜか記載がない。

【中島】

ナカジマ。

この小字は細田川最上流部にある大きな小字である。

ナカジマ小字は各地にあるが、分りにくい地名の一つである。海の中の島に見立てる場合が多いと思われる。この森地区のナカジマは細田川とその支流が合流するところで、川幅も広がっている。二本の川に挟まれた側稜の先端部分を島に見立てているのではないだろうか。

つまり、ナカジマとは、「二つの川の間で島のようになっている所」か。

【川原】

カワラ。

この小字は、細田川上流部で川幅が広がる場所にある。

カワラとは、「細田川の氾濫原がやや広がる所」か。

【垣外】

カイト。

この小字は、上久堅にも何か所がある。細田川の上流と中流の1ヶ所ずつあり、いずれも、現在も住宅地になっている所である。

カイトとは、「住宅地になっていた所または、なっている所」の意であろう。

【前畑】

マエハタ。

この小字は細田川上流のモリハラ小字付近にある。周辺には、モリハラ・カワラ・カイトなどの小字がある。

マエハタとは、「カイト小字の居住地の前にある畑」であろうか。

【沢田】

サワダ。

この小字は森地区の中心部で細田川右岸にある。

サワダとは何か。サワタが濁音化したものであろう。語源辞典によって、解釈を二つ挙げたい。

①サワタはサハ（沢）・タ（処。田）で、「谷川が流れている所（にある田んぼ）」か。現在は一部水田になっているが、タはタ（処）の可能性が高い。

②サワタとはサハ（沢）・ハタ（端）の約で、「谷川のそばの土地」であろうか。

全国地図には、サワダ地名は81ヶ所もある。

【家前】

イエマエ。

この小字は、森地区の一つの中心部にあり細田川右岸のサワダ小字の下流側にある。

イエマエとは何か。二説を挙げる。

①普通に解釈すれば、イエマエとは「住居の前の方の土地」ということになる。ただ、イエが問題になる。自分の家の前の方であっても地名として成立するのであろうか。

②イエ←キ（井）・エ（江）と転じたもので、イエマエとは、「流水の手前の方にある土地」となる。流水とは細田川のこと。

全国地図には、イエマエ地名は1ヶ所が挙げられている。

【惣三坂】

ソウザザカ。

この小字も森地区の一つの中心にあり、集落センターのあるミヤノダイラ小字に接している。

ソウザザカとは何を意味するのか。ここでも解釈を二つ。

①ソウザ←ソウジャ（惣社）の転訛し

た語か（語源辞典）。ソウジャとは、「参拝の便宜のため、数社の祭神を一カ所に総合して勧請した神社の称」（広辞苑）とある。つまり、ソウザザカとは「複数の祭神を合祀した神社への坂道のある所」をいうのであろう。このミヤノダイラにある森の上地区のお宮については、山の神（若宮様）・道真公・豊川稲荷の三体が合祀されているようだ（上久堅の民俗）。

②こちらの解釈は可能性がうすいが、ソウザザカとは、「惣三さんが関わった坂道のある所」というのもありうるか。

全国地図には、ソウザザカ地名もソウザサカ地名も記載は無い。

【日かけ・日カゲ林】

ヒカゲ・ヒカゲバヤシ。

ヒカゲ小字は、細田川左岸の氾濫原にあり、ヒカゲバヤシ小字は森沢丘陵の北東向きの広い傾斜地にある。

北東向きなので、昼前には日蔭に入ると思われるので、ヒカゲは「日当たりのよくない所」であり、ヒカゲバヤシは、「日当たりのよくない林地」であろうか。

【三ツ田】

ミツダ。

この小字は、森地区にあり、細田川左岸の氾濫原になる。下流の北側には、キタノイリ小字とマエダ小字がある。

ミツダとは何を意味するのか。語源辞典によりながら仮説を二つ。

①ミツは動詞ミツル（満）の連用形で「ぎりぎりのところまで迫る」の意。ダはダ（処）か。ミツダとは、「大雨などで浸水しやすい所」を意味するか。

②ミツ←ミズ（水）の転じた語で、ミツダとは、「自然湧水のあるところ」をいうか。

全国地図にはミツダ地名は1ヶ所に挙げられている。

【前田】

マエダ。

この小字は細田川左岸の水田の多い台地であって、南側にはカイト小字やカイトダ小字がある。

マエダとは、どこにでもある小字で、当然ながら、「前の方にある田んぼ」ということになるが、何のマエなのか。川向こうの僧堂ではあるまい。すぐ南側にあるカイト小字にあった住宅のマエということになるだろうと思われる。

【藪下】

ヤブシタ。

この小字は細田川左岸の氾濫原にある。マエダ小字の急傾斜地が細田川の川原に降りきったところになっている。

ヤブシタとは何か。これも語源辞典に沿いながらみていきたい。

①ヤブは「低木、竹などが生い茂っている所」で、ヤブシタとは、「樹木や竹が茂っている所の下方にある平坦地」か。

②ヤブは動詞ヤブル（破）の語幹で、「崩壊しやすい傾斜面」をいう。ヤブシタとは、「崩れやすい傾斜地の麓の土地」か。

なお、ヤブには、由緒がわからなくなった屋敷神などの藪神にかかわることもある（語源辞典）という。全国地図には、なぜかヤブシタ地名は1件の記載も無い。

【垣外田】

カイトダ。

この小字は、湧水の多い棚田様になっている。周りには、カゾハタ・マエダ・ムカイなどの小字がある。

カイトダとは何か。解釈を二つ。

①カイトダとは、「住居跡が水田になっている所」か。

②カイトはカイ（峡）・ト（処）で「山間の小平地」をいう（語源辞典）。カイトダとは、「山間の小平地にある水田」を意味するか。

全国地図には、カイトダ地名の記載は無い。

【又洞】

マタボラ。

この小字は細田川左岸の急傾斜地にある。周りには、サワジリ・ヨコオオミチ・カゾハタ・マエダ等の小字がある。

マタボラとは何か。二股に分かれた谷を意味すると思われる。一つは北側の細田川に、もう一つは西側に開く谷があるが、いずれも浅い谷である。しかし、他の解釈は浮かばないので、このままにしておく。

全国地図にも、マタボラ地名は無い。

【楮畑】

カゾハタ。

この小字は、カイトダ小字とマタボラ小字に挟まれている。平坦地である。

カゾ＝コウゾで、カゾハタとは、「コウゾ（楮）を栽培していた畑」であろう。細田川上流にはコウソダ小字があり、それも楮を栽植していた所であると解釈してある。

全国地図には、カゾハタ地名は載っていない。

【向】

ムカイ。

この小字は森の上地区であろうか。森沢丘陵の北端の台地上にある。東隣がカイト小字になっている。

ムカイは「向こう側」の意であろうが、“何の向こう側”になるのか、悩

まされることになる。

恐らく、ムコウ小字の東側にある台地、ミヤノダイラ小字のある所から見て、“向こう側”であることを意味しているのではないだろうか。

ミヤノダイラ小字に鎮座するお宮が、「山の神（若宮様）と道真公と豊川稻荷の三体を祀ってある」（上久堅の民俗）お宮であろうか。

細田川の向こう側にある僧堂の“向こう”ではあるまい。

国土地理院の全国地図には、ムカイ地名が94ヶ所にも記載されている。

【森沢】

モリサワ。

この小字は西側の細田川の谷と、東西の細田川の間側の頂上部を含む広大な面積をもっている。

モリ（森）とは、樹木のむらがり生える場所であろう。人の影響が少なく、自然植生の構成種が比較的に残っているところを森と呼ぶことが多いようだ（民俗大辞典）。西の細田川最上流部にあたり、この谷には容易に人が近づけなかったのかもしれない。またそのことが、「神聖な場所」という観念にも通じるのであろう。

モリサワとは、「神聖な雰囲気もある、樹木のむらがり生える谷川」であろうか。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、モリサワ地名が6ヶ所に挙げられている。

【蟻塚】

アリヅカ。

この小字は、森沢丘陵の尾根続きになるが、少し奥の方にある峰付近であり、広い面積を持つ小字である。峰の高さは848.2mでモリサワ小字にある峰よりも30m以上も高くなっている。

アリヅカとは何か。上久堅村誌をみても、この付近に古墳があったとは思えないので、ツカは古墳ではないだろう。では、何か。

アリはアリ（有）で、「目立つ。突出する」の意（語源辞典）。ツカは「土が盛り上がって小高くなった所」（国語大辞典）をいう。

合わせて、アリヅカとは、「高く目立つ峰のある付近」を意味するか。

全国地図には、アリヅカ地名は、1件しか挙げられていない。

【田ノ入】

タノイリ。

この小字は、小野の中沢川と卯月川の間緩傾斜地にあり、大部分が、現在は水田になっている。中沢・卯月両河川に沿うようにして、奥地まで伸びている細長い小字である。

タノイリとは、「上流部にある水田地帯」をいうか。

全国地図には、タノイリ地名は9ヶ所に記載がある。

【上原】

カミハラ。

この小字は小野地区にある。北側には森地区のアリヅカ小字があり、南側にはミヤバヤシ小字がある。緩傾斜地になっており、ほとんどが、現在は畑となっている。

このカミハラ小字の西側にはハラ（原）小字があり、さらに西の下流側にはナカハラ（中原）小字やシモハラ（下原）小字がある。

ハラ（原）は、広い平坦地であろう。

以上から、カミハラとは、「川の上流部にある広い平坦地（緩傾斜地）」であろうか。

全国地図でも、カミハラ地名は、中・大字として、33件採り上げられ

ている。

【深田】

フカダ。

この小字は、中沢川右岸にあって、ミヤバヤシ小字の南東側にあたる。丘陵の麓部分になっており、自然湧水の多いところと思われる。

フカダ(深田)とは、「泥の深い田。沼田」をいう(広辞苑)。山付けの田んぼで早い時期から水田化していた所ではないだろうか。

全国地図には15ヶ所に記載がある。

【宮林】

ミヤバヤシ。

この小字は、中沢川右岸にあり、すぐ西隣には諏訪神社のあるミヤノタイラ小字がある。ミヤバヤシ小字の半分は棚田で、後の半分は勾配のやや強い植林したと思われる針葉樹林地になっている。

ハヤシには植林地の意味があり水窪の方言にもなっている。

ミヤバヤシとは、「諏訪神社も近くにあり、主に植林地となっているところ」か。

【大久保】

オオクボ。

この小字は小野地区も最も山地にあり、中沢川の最上流部に当たる。殆どが畑地と林地になっていて、複数の住居がある。

オオクボとは、文字通り、「大きな窪地になっているところ」であろう。

現在も水田はないので、焼畑が行われていたところかもしれない。

【ツルネ・中ツルネ】

ツルネ・ナカツルネ。

これらの小字は、卯月川左岸にあり、ナカガイト小字を挟んで、上流側と下流側にある。

ナカツルネ・ナカガイトのナカ(中)は何を意味するのか、はっきりしない。ここでは、「辺境と中央の間」(語源辞典)ぐらいにしておきたい。

ツルネは、ツルネ(蔓畝)で、「蔓のように長く伸びて連なった峰」をいう。しかし、長野県や静岡県磐田郡などの方言では「山の峰」を意味するという(以上は国語大辞典)。

この小野地区のツルネとは、「山の峰」を意味する。標高811.4mの独立峰になっている。

ナカツルネは、「小野の中心地と山地との中程にある尾根」か。ナカは卯月川の中流部とみてもいいのではないかとも思われる。

【村崎】

ムラサキ。

この小字は小野地区の丘陵の先端とその麓にある。現在、畑はないが、もっとも山寄りの居住地でもある。

ムラサキとは何を意味するのか。これも語源辞典によりながら考えてみたい。解釈は二通り。

①ムラ←ムレ(山)の転で、サキはサキ(先)で「先端部」のこと。ムラサキとは、「山の先端部のある所」か。

②ムラはムラ(斑)で「凹凸の多い土地」をいう。サキ←動詞サク(裂)の連用形の名詞化した語で「崩壊地形」をいう。すなわち、ムラサキとは「崩壊地や山・谷のある凹凸の多い土地」をいうか。

全国地図には、ムラサキ地名は3カ所にある。

【卯月】

ウヅキ。

この小字は、中沢川支流の最上流部にあり、タノイリ小字の上流側にある。支流が流れる谷は幅の狭い急傾斜地

になっている。

ウヅキとは何か。二説を挙げたい。

①ウヅは動詞ウズム（埋）の語幹で、「土砂に埋もれた所」をいう。キは「場所」を示す接尾語（以上は語源辞典）。ウヅキとは、「谷の奥で崩れた土砂が堆積している所」か。

②ウ（卯）は「東の方角」をいう（広辞苑）。ツキはツク（尽）の連用形が名詞化した語。ウヅキとは、「東側で行き詰まりになっている谷」か。

【笹原】

ササハラ。

この小字は、小野地区の西部山麓にあり、ムラサキ・フカダ・ミヤバヤシ・タノイリなどの小字に囲まれている。中沢川の最上流部に当たる。緩傾斜地で、ほとんど平坦地になっている。

ササハラとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら三説を挙げておきたい。

①ササハラとは、「ササの生えていた平坦地」か。ササ（笹）とは北海道から本州の各地に群生している、イネ科の常緑多年生植物。タケの類で形の小さく、皮の落ちないものの便宜的な総称で種類はきわめて多いという（広辞苑）。竹細工の原料にもなっていたのであろう。

②ササはササ（細）で「砂地」のこと。ササハラとは「砂地で平坦なところ」であろうか。

③ササは擬音語。ササハラとは、「水が勢いよくサラサラと流れている平坦地」との解釈も可能か。

国土地理院の全国地図には、ササハラ地名は26カ所に記載がある。

【中垣外・垣外】

ナカガイト・カイト。

ナカガイト小字は、卯月川左岸の緩

傾斜地にあり、カイト地名は右岸に二カ所ある。

カイトは「居住地または居住地であったところ」をいう。ナカガイトは「中心地と山地との中程にある居住地」か。あるいは、「卯月川中流にある居住地」と思われる。

全国地図には、ナカガイト地名が、中・大字として、12カ所に記載されている。

【町屋】

マチヤ。

この小字は卯月川右岸の平坦地にある。現在は、住宅地や墓地になっている。

マチヤは「商人・職人などの町人の住居の多い地」（広辞苑）とあるが、ピンとこない。

マチヤとは、「市の開かれた場所」ではなかったか。卯月川の川岸にあり、道路は変形四叉路になっている。さらにすぐ北側には知久18ヶ寺があり、小野子の諏訪神社もある。山中とはいえ、市場の条件は整っているとみただうであろうか。

全国地図には、マチヤ地名は、中・大字として、44カ所に挙げられている。

【一ツ田】

ヒトツダ。

この小字は、マチヤ小字のすぐ北側にある小さな小字で、現在は住宅とちよつとした畑になっている。

ヒトツダとは何か。解釈を二つ。

①ヒトツダとは、「この地域の田んぼ一枚分ぐらいの小さな土地」をいうか。

②ヒトは形容詞ヒトシ（均）の語幹で、「凹凸がないさま。台地の上」をいう（以上は語源辞典）。ヒトツダとは、「平坦な台地の上」であろうか。

全国地図には、ヒトツダ地名は1カ所にあるが、宛てられている字は「一ツ坦」である。

【石原田】

イシハラダ。

この小字は卯月川右岸にあり、主要地方道下条米川飯田線にも接している。

どこにでもある小字で、「小石の多い平坦地の水田」であろう。

【寺平・寺前】

テラダイラ・テラマエ。

これらの小字は、卯月川と中沢川の間にある。ほぼ平坦地で現在は居住地と水田になっている。

テラダイラとは、「お寺のある平坦地」であり、テラマエとは「お寺の前のところ」であろう。

このお寺は、知久18ヶ寺の一つである小野寺(しょうやじ)と思われる。小野寺は越久保の小野子神社の西方丘陵上にあり、「小野寺」小字にあるというが(下伊那史第6巻)、そういう小字は見当たらない。

【宮下・宮ノ平】

ミヤシタ・ミヤノタイラ。

これらの小字は、小野子の中沢川右岸になる。ミヤノタイラ小字は2カ所にあるが、かつては二つの小字が繋がった広い面積をもっていたと思われる。

ミヤシタは、「お宮の下の方」をいい、ミヤノタイラは「お宮のある平坦地」を意味する。

お宮とは、小野子にある諏訪神社のことであることは、はっきりしている。

【神田】

ジンデン。

この小字は、中沢川右岸で、ミヤシタ小字の対岸にある。現在も棚田にな

っている。

ジンデンとは「神社に付属して、その収穫を祭祀・造営などの諸費にあてる田」(広辞苑)をいう。この神社というのは、もちろん近くにある小野子の諏訪神社をいう。

国土地理院の全国地図にはジンデン地名が、中・大字として15カ所に記載されている。

【北澤】

キタザワ。

この小字は小野子の諏訪神社の北側にある。現在は二カ所になっているが、これも地名発生時には、一つながりになっていたものと思われる。現在でも、水田や湿地の多いところとなっている。

キタザワとは、「(諏訪神社)の北の方にある自然湧水の多い所」であろう。

国土地理院の全国地図には、中・大字として、キタザワ地名は48カ所に記載がある。

【さいの神・サイノ神】

サイノカミ。

これらの小字は、小野子下にあり、主要地方道下条米川飯田線の両側にある。キタザワ小字やジョウヤマ小字の北側になる。

サイノカミとは、「邪霊の侵入を防ぐ神。行路の安全を守る神。村境などに置かれた」(広辞苑)とある。この村境といえ、小野子中との間の村境としか考えられないが、この境はそれほど意識された境界だったのであろうか。

【原】

ハラ。

この小字も、小野子にあり、ウエハラ小字の下側に3カ所ある。これもこの地名発生時には繋がっていたので

あろう。現在は、一部が居住地や畑地や水田になっている緩傾斜地である。

ハラとは、地名発生当時は「未墾の入会草刈地」（語源辞典）であった可能性が高いか。水田が家の近くにあるので、水田と一緒にここまで上ってきた人たちか。

全国地図には、450カ所にも、ハラ地名はある。

【中原・下原】

ナカハラ・シモハラ。

これらの小字は、細田川と中沢川の間にある、緩い傾斜地にあって広い面積を占めている。

ナカハラは、「(上原)より低い方にある原で、下原よりは高い所にある」であり、シモハラは「ずっと低い方にある原」ということになる。ハラ(原)とは、「未墾の入会草刈地」（語源辞典）で、田畑に踏み込む刈敷の材料になっていたものと思われる。

【城山】

ジョウヤマ。

この小字は小野子下にあり、卯月川とその支流に挟まれた丘陵となっている。

このジョウヤマ小字には、神ノ峰城を中心とした支城の一つとしてあげられている小野郷城があった所という(村誌)。村誌には「室町時代のもものと推定され、残存状況は不良で、耕地、山林化し遺構らしきものは認められなくなってきている」と記している。

中・大字として全国地図に挙げられているジョウヤマ地名は、97カ所になる。

【大ホッタ・大堀田】

オオホッタ・オオホリタ。

これらの小字は、卯月川の氾濫原にある。中沢川との合流点の下流側にあ

る。

ホリタ=ホッタで、「新たに開墾された水田のあるところ」を意味すると思われる。

新たに開墾された場所が氾濫原の湿地帯ということは、どういうことか。中世の関東平野でも低湿地が広がっていて水田にするのは後回しにされていたらしいが、低湿地を田んぼにするのは、それほど大変なことだったという。畦や畝を盛り上げて水田にするという労力が負担になったらしい。低湿地が水田になったには開拓が進んだ近世になってからだという(以上は原田信男『中世の村のかたちと暮らし』)。

この小野のオオホッタ・オオホリタ小字も、こうした状況下で水田化されていった土地であったのだろう。

オオホリタ(ホッタ)とは、「広い面積の新開田地のあるところ」であろうか。

全国地図には、オオホッタ地名は載っていない。

【平信】

ヘイシン。

この小字は卯月川左岸の氾濫原にある。対岸はジョウヤマ(城山)小字で支流との合流点の上流側になる。

ヘイシンとは何か。分からない小字名の一つ。迷いがあるので、主に語源辞典に依りながら、三説を挙げておきたい。

①ヘイは「平坦地」のことか。シンも音読みでシン(新)から「新開墾地」をいう。ヘイシンとは、「新しい開墾地で平坦な所」であろうか。湿地は水田の新開地であることが多い。

②シン←シル(汁)と転じた語で、シルは形容詞シルシの語幹であるとい

う。ヘイシンとは、「自然湧水のある平坦地」か。

③ヘイ←ヒエ（稗）と転訛した語で、ヘイシンとは、「新しく開墾した稗田」なのか。稗は水温が低い田でも生育するので、稗田は肥過田の調整田として有効であったという（民俗大辞典）。

全国地図にヘイシン地名は無い。

【柳坪】

ヤナギツボ。

この小字は、中沢川が通っており、北端には支流が流れている。現在は堤防もできて、水田地帯になっている。堤防ができる前は河川の氾濫等で、耕作も容易ではなかったに違いない。

ヤナギツボとは何か。二説を挙げる。

①ツボはツボ（壺）で、「深くくぼんだところ」（国語大辞典）。ヤナギツボとは、「柳が生えていた川原で、大水でえぐられて大きな窪地ができていた所」であろうか。地名発生時には、そうした状況があったものと思われる。

②ヤナギはヤナ（斜面）・ギ（接尾語）とする（語源辞典）。ギはキと同じ「場所」を表す接尾語。ヤナギツボとは、「緩い斜面になっていて、大きな窪地があった所」であろうか。

全国地図には、ヤナギツボ小字は無い。

【馬場坂】

バンバザカ。

この小字は、小野地区のツルネ小字の丘陵の北東側傾斜地にある。

バンバはババの撥音便化した語。ババザカとは何を意味するのか。解釈を二つ。

①ババとは、前にも触れたように、ハマ・ハバ・ママ・マブと同じく「崩壊地形や浸食地形」をいう（語源辞典）。

バンバザカとは、「付近に崩れ地のある坂道」を意味する。

②ババには、「馬の調練所」（語源辞典）という意味もある。バンバザカとは、「馬の調練所へ上る坂道のあるところ」か。

全国地図にはバンバザカ地名は記載が無い。

【榎ヶ洞】

マキガホラ。

この小字も小野地区にあり、卯月川左岸で、オオホリタ・フナクボ・バンバザカなどの小字に接している。

マキガホラとは何か。

マキはマキ（牧）で「牧場」を意味する。マキガホラとは、「牧場があった幅のある谷」をいうか。近くにバンバザカ小字があるので、この小字との関連があるのだろうか。

全国地図には、1カ所にマキガホラ地名が記載されているだけであるが、伊那谷南部のマキガホラ小字は少なくない。その中には、「榎が自生している場所」と解するのが適当というのものもあるかもしれない。マキ（薪）もあるので。

【ヒヤケ田】

ヒヤケダ。

この小字は小野地区にあり、シモハラ小字の南西側にある、痩せた尾根で緩い傾斜地にある。現在は水田がなく、住宅と畑地になっている。

ヒヤケダとはヒヤケダ（日焼田）で、「水の便が悪く、自然湧水も殆どない水田であった所」であろうか。

国土地理院の全国地図には、1カ所にだけヒヤケダ地名が載っている。

【盆ノ窪・盆久保】

ボンノクボ・ボンクボ。

これらの小字は、森地区にあり、卯

月川北側の側稜の間の谷にある。二つの小字は繋がっている。

ボンクボ＝ボンクボで、「ボン(盆)のような地形になっている谷」を意味しているものと思われる。

ボンクボ地名もボンクボちめいも全国地図には載っていない。

【堂後】

ドウゴ。

この小字は、卯月川の谷の一つ北側にある谷の中にある。下流側にはボンクボ小字がある。また上流側には城山丘陵がある。

ドウゴとは何か。寺院でもあれば「僧堂の裏手」ということになるが、そうした僧堂の痕跡は今のところ見当たらない。

ドウ(堂)は考薩地形をいう。堂に見立てたもの。ゴはコ(処)で濁音化した接尾語(以上は語源辞典)。

ドウゴとは「考寝形をした独立峰のある所」であろうか。この小字の南端には、標高749.0mの峰がある。

全国地図にはドウゴ地名は記載が無い。

【原尻・原下】

バラジリ・ハラシタ。

バラジリ小字はシモバラ(下原)小字の下流側にあり、ハラシタ小字はバラジリ(原尻)小字のさらに下流側にある。いずれも卯月川右岸の丘陵地である。

西に向かって流れる河川に沿うようにして、上原→中原(原)→下原と続いてきたが、ここでは、さらに、下原→原尻→原下と小字が下流側に繋がっている。

バラジリ小字もバラシタ小字

も、現在は水田が多いが、地名発生時にはどうであったろうか。

バラジリとバラシタは、いずれも「原小字群の下流側にある平坦地」を意味するか。

国土地理院の全国地図には、バラジリ地名が4カ所、バラシタ地名が6カ所に挙げられている。

【元庚申・庚申】

モトコウシン・コウシン。

これらの小字は小野地区の主要地方道下条米川飯田線と地方道が交差する辻にある。

コウシンは「庚申塔があり、庚申待が行われた所」であり、モトコウシンは「以前に庚申塔などがあり庚申待が行われた所」であろう。

庚申得は「庚申(かのえさる)の夜、仏家では帝釈天および青面金剛を、神道では猿田彦を祀って一晩中起きている習俗」(広辞苑)をいう。伊那谷南部でも、辻などにある庚申塔が目につく。文字塔や盆怒相で多臂の青面金剛、あるいは月日を配したものが目立つ。

全国地図には、モトコウシン地名は無いが、コウシン地名は7カ所に記載がある。

【外原】

ソトハラ。

この小字は庚申小字群の西側に連なっている。ハラ(原)小字群の最も外側にある小字である。現在は、水田と畑地がほとんどである。

ソトハラとは、「原小字群の最外殻に相当する地域」か。

全国地図には、1カ所にだけ、

ソトハラ地名がある。

【北原】

キタハラ。

この小字は、東西をソトハラ小字とハラ小字に挟まれた小さな小字であり、南北にはハラジリ小字とスズメイワ小字がある。キタハラとは、「原小字群のもっとも北側にある平坦地」であろう。キタバラ小字の北側にあるスズメイワ小字は急傾斜地になっている。

【大水田】

オオミズダ。

この小字は、小野地区の卯月川右岸にあり、その支流も二本ここを流れている。

ミズタとは「水の多い土地の多」（国語大辞典）であるという。だから、オオミズダとは、文字通りで、「水の多い土地の大きな水田のあるところ」であろう。

全国地図ではミズタ地名は、中・大字として5カ所にあるが、オオミズダ地名は無い。

【クラカリ洞】

クラカリホラ。

この小字は、小野地区の、卯月川と落倉川の間丘陵地帯にある。北向きの急傾斜地にあって谷も深い。

クラカリホラとは何をいうのか。語源辞典に依りながら、二説を挙げる。

①クラカリホラ←クラガリホラと清音化したもので、クラガリホラとは、「光が差さず暗い谷」をいう。北向きの深い谷なので、小字名通りの洞になっている。

②クラ（到）・カリ（刈）で、「崩壊地形」をいう語を重ねた地名であるという。クラカリホラとは、「崩壊地になっている谷」であろう。この急傾斜地となっている谷は、地名発生当時には、崩壊を繰り返していたと思われる。

全国地図には、クラガリホラ地名もクラカリホラ地名も記載は無いが、クラガリ地名は1カ所にある。

【枇杷田・びハ田・ひハ田】

ビワダ・ヒワダ。

これらの小字は、平乗用が卯月川に合流する付近に固まっているビワダ＝ヒワダであろうが、これもわかりにくい地名の一つである。ここでも解釈を三つ挙げておきたい。

①ヒワダとは、ヒ（日）・ワダ（和田）で、「日当たりのよい山の谷間」（語源辞典）であろうか。

②ヒワダとは、ヒ（日）・ワ（曲）・タ（処）で、「日当たりのよい、川や山麓が曲がっている所」か。

③ヒワダとは「ヒワダ（桧皮）を採集するところ」であった可能性もある。桧が自生していたか、植林をしたのか。

①②はともに、「日当たりがいい」としたが、大部分はこの通りだが、これらの小字の一部は北向きの急傾斜地になってはいる。

全国地図には、ヒワダ地名は14ヶ所にあって、「日和田」の字は10ヶ所、「桧皮」の字は3ヶ所で宛てられている。

【中田・仲田】

ナカタ。

この小字は、落倉地区と平栗地区の境界付近にある。落倉川が中を流れており、両側の尾根に達する広大な面積をもっている。谷の底部はほとんどが水田地帯になっている。

「仲田」小字は「中田」小字にすっぽりと包まれた小さな小字であるが、ほとんどが棚田になっている。

ナカタとは何を意味しているのか。単純に見えるが、意外と難しい地名である。二通りの解釈を挙げる。

①ナカは「二つの尾根の間」をいうか。ナカタとは、「二つの尾根の間に水田地帯が広がっている地域」のことであろうか。

②ナカは小字のナカで、ナカタとは、「小字の中心部を通して水田地帯のあるところ」であろうか。

全国地図にはこの地名は35ヶ所。

【梨木田・梨田】

ナシノキダ・ナシダ。

ナシダ小字は落倉川左岸にあり、ナシノキダ小字はそのナシダ小字を包むように、落倉川兩岸の尾根とその間の谷を含む広い小字になっており、南西側は平栗川に接している。いずれも落倉地区の小字である。

小字図から見れば、ナシノキダ＝ナシダと考えてもいいと思われるが、容易に一致しないので、別々に考えることにした。

ナシダのナシはナラシ（平）の転で「緩傾斜地」をいう（語源辞典）。ダは「場所」を示す接尾語。ナシダとは

「緩い傾斜地になっているところ」をいうか。落倉川氾濫原で、水田と荒地になっている。

ナシノキダのナシは動詞ナシル（擦）の語幹で「崩壊地」のこと（語源辞典）。キダはキダハシ（階）で、ナシノキダとは、「崩壊地もあり、階段状になっている棚田のある土地」をいうか。

全国地図には、ナシノキダ地名もナシダ地名も記載されていない。

【横山】

ヨコヤマ。

この小字は、落倉地区の落倉川と卯月川の間にある丘陵にある。

ヨコヤマとは、「尾根の稜線の方向とほぼ直角方向に連なる峰のある所」を意味する。この側稜の稜線の方向は北東－南西になっているが、北東－南西に連なる峰があり、これをヨコヤマと表現しているものと思われる。すなわち、ヨコヤマ（横山）とは、主稜線を横切る連峰をいう。

国土地理院の全国地図には、ヨコヤマ地名が、中・大字として96カ所にも記載されている。

【沢尻】

サワジリ。

この小字は、落倉地区にあり、落倉川中流部の右岸と左岸の二カ所にある。氾濫原と丘陵地になっているが、氾濫原には現在は水田が多い。

サワジリとは、一般には「川の上流先端部」をいうのが、ここでは当てはまらない。では、サワジリとは何か。語源辞典に添いながら、二説を挙げたい。

①シリとはスリ（磨）の転で「崖」のこと。ズル、ズリなどと同じか。サワシリとは、「谷川の近くに崩壊地のある所」か。

②シリはジリと同じく「湿地」をいう。サワジリとは、「自然湧水の多い谷川」をいうか。

全国地図にはサワジリ地名は、19カ所に記載されている。

【トヤネ】

この小字は、落倉地区にある小さな小字で、二カ所ある。東側にあるのは、側稜の中腹の平坦地になっているところで南西方向に突き出ている。西側のトヤネ小字は北向きの傾斜地になっていて上部は緩い傾斜で頂上につながっている。

トヤは「鳥などを捕らえるためにその時機を待って、人がこもっている小屋」とか、飯田地方では「山中で狩をする時に猟師が隠れて待つ小屋」とか、飛騨では「かすみ網」そのものを意味しているという（国語大辞典）。ネは「尾根」とか「高い所」を意味するか。

以上から、トヤネは「小鳥を捕獲するための霞網などを仕掛けた尾根などの高い所」を意味するのではないか。

全国地図にはトヤネ地名は無い。

【船窪・船久保】

フナクボ。

この小字は、卯月川支流に沿って、大きくは二カ所にあるが、小さな方の「舟久保」小字は、「船窪」小字に抱えられている。卯月川と落窪川の間丘陵地帯にある。

フナクボとは、「舟形の窪地になっている所のある谷」をいう。

全国地図には、5カ所にフナクボ地名が、中・大字として挙げられている。

【越前・古シ前】

コシマエ。

この小字は、落倉川右岸で、東端は主要地方道下条米川飯田線に接している。側稜先端部の南側斜面になる。

コシマエとは何を意味するのか。ここでも二説を挙げておきたい。

①側稜の先端部頂上は標高 780.4m で、ここを人体に腰に見立てているのではないだろうか。頭の部分は、側稜の東方に見えている標高 811.4m の峰になる。コシマエとは、「側稜先端部の頂上部分の手前に当たる斜面」を意味するのではないだろうか。

②コシはコス（越）の連用形の名詞化した語。コシマエとは、「(尾根を) 越える前の所」をいうか。

全国地図には、コシマエ地名は3カ所にあり、いずれも「越前」の字が宛てられている。

【菖蒲田】

ショウイブダ。

この小字は落合川とその支流が流れる低地とその南側の側稜の尾根を含んでいる。

ショウブ＝ショウズで「自然湧水。清水」をいう（語源辞典）。ダは「水田」か、ダ（処）で「場所」を示す接尾語。ショウブダとは「自然湧水のある水田であったところ」としたい。水で苦労した稲作の時代には、こうした湧水のあるところに水田があったという。

全国地図には、中・大字として、6ヶ所に記載がある。

【さら田】

サラダ。

この小字はショウブダの上流側にあり、落倉川と主要地方道下条米川飯田線に挟まれている。

サラダとは何か。二説を挙げる。

①サラはサラ（皿）で、落倉川左岸の皿状になっている地形をいうのだろうか。皿といっても半分だけであるが。サラダとは「皿状になった土地で水田

のあるところ」か。

②サラはサル、ザレなどの転で「崖地」をいう（語源辞典）。サラダとは「崖地にある水田」のことか。

全国地図には2ヶ所にサラダ地名がある。

【早稲田】

ワセダ。

この小字は、カワラダの上流側にある。中を主要地方道下条米川飯田線が通っている。

ワセダとは何か。ここでも二説を挙げたい。

①一般に、ワセダとは「早稲種も播く田」ということになるが、どうして早稲種を必要としたのだろうか。やはり自家用ということなのかどうか。

②ワセ←ワ（曲）・サ（「場所」を示す接尾語）と転訛したか。ワセダとは「輪状に入り込んだ土地」（語源辞典）を意味する。現地をみると、確かに輪状に食い込んでいる。

全国地図には9ヶ所にある。

【川原田】

カワラダ。

天竜川氾濫原に多い小字であるが、これは山間地で、サラダ小字の対岸の落倉川右岸にある。

カワラダとは「落倉川の川原にある水田地帯」である。

【垣外・可いと・下垣外】

カイト・シモガイト。

これらの小字は、ワセダ小字の上流側にある。カイト小字よりシモガイト小字が下流側になる。

カイトは「居住地となっている所」、シモガイトとは「カイト小字の下流側にある居住地かその跡」ということになる。「可いと」小字はカイト小字を分筆するときなどに成立したのであ

らうか。

【竹の古し】

タケノコシ。

この小字の北側にはツルネ小字があり、そこには標高811.4mの峰がある。卯月川と落倉川の間になる。

タケは「高くなった所」で、コシは人体の腰に対応して「山の中腹」をいう。タケノコシとは、「高くなった所の腰の部分」を意味する。高所とは北側の独立峰で、山の神などが鎮座すると考えられている可能性もある。

全国地図には、2ヶ所にタケノコシ地名が、中・大字として記載されている。

【松林】

マツバヤシ。

この小字は落倉のツルネ丘陵と集会所の丘陵の間の谷となっている。

①マツバヤシとは「アカマツが自生している林で神聖な場所でもあるところ」か。

②あるいは、動詞マツハル（纏）から「巻いたような地形」（語源辞典）で、「谷で周辺が巻いたような丘陵になっているところ」であろうか。

全国地図には13ヶ所にマツバヤシ地名があり、すべて「松林」の字が宛てられている。

【観音】

カンノン。

落倉の集会所のあるところで、そこには縁覚庵があり、聖観音が安置されている。この小字がカンノンと名付けられた所以である。

全国地図には9ヶ所に中・大字として記載がある。

【横道】

ヨコミチ。

この小字は、タイザ小字の落倉川の

上流側にある。

ヨコミチとは「山腹を迂回する道」(語源辞典)であるが、その道とは落倉川に沿う大きな道路ではなく、丘陵を北側に越えて山腹を通る山道と思われる。

全国地図には、ヨコミチ地名は42ヶ所と多い。

【五良垣外】

ゴロウガイト。

この小字は落合の奥、落合川の最上流部にある。ヨコミチ小字の奥である東側になる。

ゴロウガイトは何を意味するのか。ここでも二つの解釈を挙げる。

①ゴロウを固有名詞と考える。ゴロウガイトとは、「ゴロウさんの住んでいた所」となる。

②ゴロウとは「大きな石がごろごろしているところ」(語源辞典)をいう。ゴロウガイトとは、「大きな石がある居住地」であろうか。

【本洞】

ホンボラ。

この小字はゴロウガイト小字の南側にあつて、これも落倉の最も奥まった地域になる。

ホンは動詞ホホム(含)の転じた語で「含まれたような地形」をいう(語源辞典)。ホンボラとは「南北の側稜に包み込まれたような谷」ということだろうか。「中心になる洞」ではないであろう。

全国地図にはホンボラ地名は2ヶ所に挙げられている。

【日影・日蔭】

ヒカゲ。

これらの小字は、落倉川左岸の北向き傾斜地にある。

ヒカゲとは「日当たりのよくない土

地」を意味するのであろう。

【花カケ・花掛】

ハナカケ。

この小字は、落倉川支流に沿って長く伸びている谷にある。

ハナはハナ(端)で「先端」のこと、カケはカケ(欠)で「崖」をいう。ハナカケとは「先端部が急傾斜地になっていて崩壊したことのある谷」をいうのであろう。

全国地図には2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【堀立】

ホッタテ。

落倉川の二本の支流とその間の側稜からなる。

ホリは「えぐり取られたような地形」をいう(語源辞典)。タテは動詞タツ(立)の連用形で「高くなったところ」を意味する。ホッタテとは「崩壊地にある丘陵」をいうか。

全国地図にはホッタテ地名は記載が無い。

【小石沢】

コイシザワ。

この小字は落倉川支流の最上流部にある。

コイシザワとは「小石の多い谷川」であろうか。

全国地図にもコイシザワ地名は2ヶ所に載っている。

【岩沢】

イワサワ。

この小字もコイシザワ小字の下流側にある。

イワサワとは、「大きな石がごろごろしている谷川」であろうか。上流側にある小字がコイシザワで、下流側がイワサワというのは、面白い。流れが強くなるにつれて、氾濫原に残る石が

大きくなっていくことをしめしているのであろうか。

全国地図には、イワサワ地名が、中・大字として15ヶ所と多く挙げられている。

【中田・仲田】

ナカタ。

この小字は平栗の落倉境にある。中流部の落倉川とその両側の側稜の尾根までを含む。「仲田」小字は小さい小字で「中田」小字に包まれている。これも分筆を経過しているためか。

ナカタとは何か。二説を挙げる。

- ①ナカタ←ナガ（長）・タ（処）で、「細長く延びた地形の土地」をいう。
- ②ナカ←ナガで動詞ナガル（流）の語幹で、「流れる」から「傾斜地」をいう（語源辞典）。ナカタとは「傾斜地にある水田」であろうか。

全国地図には35ヶ所もナカタ地名は挙げられている。

【菽ムキ】

マメムキ。

この小字も落倉川に沿った長い小字になっている。

マメはママ、マミと同じように崩崖・斜面系の地名用語であるという（語源辞典）。ムキは動詞ムク（剥）の連用形で名詞化した語。マメムキとは「崩れて地肌が露出していた傾斜地」を意味すると思われる。

全国地図にはマメムキ地名は記載がない。この地域独自の小字であろうか。

【林外】

ハヤシソト。

この小字は、マメムキ小字の上流側にある。側稜の北向き斜面になっている、細長い小字である。

ハヤシソトとは何か。分かりにくい

地名である。

ハヤシはこの場合、ハヤ（急）・シ（接尾語）で「急傾斜地」をいうか（語源辞典）。ソ（背）ト＝セ（背）・ト（処）で「背面」をいうのだろうか。ハヤシソトは「急傾斜地になっている側稜の背面」を意味するのではないだろうか。

全国地図にはハヤシソト地名は記載が無い。

【横根場】

ヨコネバ。

平栗の最奥部にある小字で、東部の山間地にある。

ヨコ（横）は「南北の方向に対して東西の方向をいう」（語源辞典）であろう。ネ（嶺）・バ（場）は「尾根」のこと。ヨコネバとは、「東西にのびている尾根」をいうのであろうか。

全国地図にはヨコネバ地名も載っていない。

【馬止】

マドメ。

この小字は平栗の最奥地の東部山間地で平栗川の上流部にある。

マドメとはコバ（木場）ともいい、「山で伐った木を集めて置く山間の狭小な平地」（広辞苑）をいう。仕事場や休み場として利用したという。また、焼畑のことをマドメと呼んでいる地域もあるようだ。

全国地図には、なぜかマドメ地名は1件も採られていない。

【平畑】

ヒラバタ。

この小字は平栗川上流のマドメ小字の下流側にある。

ヒラは「山の一部分が平らになっている所」をいう（語源辞典）。ヒラハタとは「山の一部分が平らになっている所にある畑」であろう。

全国地図には、4ヶ所にヒラバタ地名があり、いずれも「平畑」の字が宛てられている。

【荒木】

アラキ。

この小字は平栗川上流にあり、マツナギ小字とカイト小字の間にある。

アラキとは何を意味するのか。語源辞典に添って、三通りの解釈を挙げておきたい。

①アラクは動詞アラク（墾）の連用形が名詞化した語で、「新墾地」をいう。

②アラ・ク（処）で、アラは動詞アラク（粗）から「崩壊地形」をいう。アラクとは「崩壊地のあるところ」のことか。やや安易すぎるであろうか。

③アラキとは水窪などで焼畑の一年目をいう。アラキとは「焼畑の行われた土地」か。

全国地図には33件の記載がある。

【午津なぎ・馬津なぎ・馬繫】

マツナギ。

これらの小字はお互いに繋がっており、平栗川上流の二本の側稜の尾根と間の谷を含む細長く大きな小字になっている。

マツナギとは何か。馬の中継所ではあるまい。語源辞典によりながら解釈を二つ。

①マツ・ナギで、マツは動詞マツハル（纏）との関連で「巻いたような地形」をいい、ナギは「崩れたところ」のkと。マツナギとは「側稜の先端部分が巻いたようになっており、崖もある土地」を意味するか。

②マ（接頭語）・ツナ・キ（接尾語）で、ツナは動詞ツナグ（繫）の語幹で「山などの繋がった地形」をいう。マツナギとは、「側稜の尾根が繋がって

いる土地」であろうか。マは単なる接頭語で、ギは「場所」を示す接尾語であるという。

全国地図には1ヶ所にしか、マツナギ地名は無い。

【百田】

ヒャクダ。

側稜の尾根から南西側半分がヒャクダ小字になっている。麓の谷部には棚田が並んでいる。

ヒャクダとは何か。二説を挙げておきたい。

①ヒャクダとは「何枚もの水田があるところ」であろうか。ヒャク（百）は数が多いことをいう。谷に並んだ棚田を表しているのであろう。

②ヒャク←ビャクの転訛したもので、ビャクとは「がけくずれ」のことをいう（国語大辞典）。関東地方各地と山梨の方言になっている。ダ（処）は「場所」を示す接尾語。ヒャクダとは「崩壊地のあるところ」。崩壊地をいろいろと表現をかえて名付けているのであろうか。

全国地図には、2ヶ所に中・大字として挙げられている。

【藤平】

フジダイラ。

二本の側稜とその間の谷を含む広い小字になっていて、間を平栗川が流れている。

フジダイラとは何をいうのか。二説を挙げておきたい。

①近所では評判の植物の藤の樹があったのか。フジダイラとは「有名な藤のある平坦地」か。

②ジとヂを峻別する研究者もいるが、小字発生時にそれが生きていたかどうかという疑問はある。フジダイラとは「富士講が行われていた平坦地」で

はなかったか。富士山に見立てるような独立峰もある。

全国地図には、フジダイラ地名は載っていない。

【竹ノ腰】

タケノコシ。

この小字は平栗の落合川流域にあり、ジンデン小字やカイト小字に接している。

タケはタケ（嶽。岳）で、「高くて大きい山」（広辞苑）をいうが、信仰の対象となっている山に関わることが多い。この場合にも、西隣にあるジンデン小字には、標高 774m ほどの長い独立峰がある。この山を意識した命名ではなかったか。

コシは人体の腰に見立てており、「山の中腹部分」をいうのであろう。

タケノコシとは「神聖な山の中腹部分」をいうか。

【神田】

ジンデン。

この小字は平栗川流域にあり、この小字には平栗集会所や平栗神社がある。

平栗神社は平栗の八幡社といわれており、祭神は大靫和氣皇命で応神天皇のこと。八幡社たる所以であろう。しかしもともとは山の神であったのだろうと推測される。境内三社の中に山社があるからである。

ジンデン＝シンデンで「神社に付属してその収穫を祭祀・造営などの諸費にあてる田」をいう（広辞苑）。谷部はほとんどが棚田になっている。

全国地図にはジンデン地名が、中・大字として 15ヶ所に記載されている。

【宮ノ洞】

ミヤノホラ。

この小字は、ジンデン小字の北側の

谷になる。

ミヤノホラとは、文字通りで、「神社の近くにある谷」をいうのであろう。

なぜか全国地図にはミヤノホラ地名は記載がない。ホラが付いているからであろうか。

【野中】

ノナカ。

この小字は平栗川流域で千代田力との村境にある。

ノナカは「野原のなか」（広辞苑）というが、これでは地名として名付けにくいのではないだろうか。特徴が見えないからである。

では、ノナカとは何をいうのか。語源辞典によって二説を挙げる。

①ノはヌの転で「湿地」をいうか。ナカは「辺境と中央の間」を意味するか。ノナカとは「平栗の中心地と山地の間にある湿地」であろうか。

②ノは「緩傾斜地」、ナ←ノ（助詞）で、カは動詞カク（欠）の語幹で「崩壊地形」をいう。ノナカとは「緩傾斜地であるが崩崖のある土地」だろうか。

ノナカ地名は、全国地図に、中・大字として 115ヶ所に挙げられている。

【土亀洞】

ドンガメボラ。

この小字も、千代田力との村境にあり、平栗川にも接している。

ドンガメボラとは何を意味しているのか。ドンガメボラ←トリガメボラと撥音便化したものであろうか。以下語源辞典によりながら、解釈を二通り。

①トリはトリ（取）の連用形の名詞化した語で「切り取られたような地形」をいう。ガメ←カメと濁音化した語でカメとはカ（川）・メ（「べ」の転）で「川辺」をいう。ドンガメボラとは「平

栗川の川辺で崩壊地のある谷のあるところ」をいうか。

②トリ←トロで「緩傾斜地」を表す。ガメ←カメでカム（嚙）の転で「浸食地形」をいう。以上から、ドンガメボラとは「緩傾斜地であるが、削り取られたようになっている谷のあるところ」をいうか。

全国地図にはドンカメボラ地名は記載が無い。

【藤の木】

フジノキ。

この小字も平栗川に接しており、ドンガメボラ小字の東側にある。

フジノキは「植物の藤の木の自生が多いところ」か。藤の名所なのかどうかは、はっきりしない。他の解釈もありそうだが、よくわからない。

全国地図には31ヶ所にある。

【大さら田】

オオサラダ。

平栗川流域にあり、フジノキ小字やホソクボ小字に接している。

オオサラダとは何か。一部、大きな皿を伏せたような地形になっているが、ここでは採らない。他の解釈を二つ。

①サラダ←サラタと濁音化した語で「水をほすことのできる田。乾田」（国語大辞典）をいい、下伊那郡・岐阜・愛知の方言になっているというオオサラダとは、「大きな乾田」ということになる。現在、水田がないのが気になるが、居住地がその乾田の跡地なのかもしれない。

②サラはサル、ザレなどの転じた語で「崖」などをいう（語源辞典）。ダはダ（処）で「場所」を示す接尾語。オオサラダとは「大きな土地で崖などの崩壊地のあるところ」であろうか。

【細久保】

ホソクボ。

この小字は平栗川に沿って二ヶ所にある。いずれもジンデン小字に接している。

ホソクボとは、文字通り「細長い谷になっている所」か。

全国地図には、中・大字として5ヶ所に記載があり、いずれも「細久保」の字を宛てている。

【五十目】

ゴジュウメ。

この小字は、ジンデン小字の南側にある小さな小字で平栗川に接している。

「〇〇目」という小字は知久領であった所には多い。面積をいう場合と粃の収穫量で表す場合がある（以上は龍江村誌）。「五十目」というと面積は165㎡ほどしかないのに、この平栗のゴジュウメは10倍も広いから、面積で表しているわけではないだろう。となると、ゴジュウメは粃の収穫量を表していることになる。「五十目」は2.5斗となるが、この小字でそれだけの収穫をあげていたということであろう。

当然のことであるが、その面積から中・大字とはなりえないので、全国地図には記載されていない。

【日影田】

ヒカゲダ。

この小字も平栗川に沿っており、ゴジュウメ小字の東隣にある。

南側には側稜があるので、ヒカゲダとは「日当たりのよくない水田」を意味するものと思われる。

【瀧場】

タキバ。

この小字は平栗川南側の側稜の北向き傾斜地にある。

タキバといえば、「神社に奉仕する人々がみそぎをした禊ぎ場」（日下部さん）か、「修行のために滝に打たれる場所」（国語大辞典）であることが多い。しかし、この平栗のタキバは神社からは離れすぎているし、打たれるような流水もない。タキバという語そのものが広辞苑には記載がないし、語源辞典にもないことから、この地域で使われることが多い地名といえるかもしれない。

そこで、タキバとは、使用例もあるようだが、この平栗のタキバは、単なる「傾斜地」であろうと思われるがどうであろうか。

全国地図には、タキバ地名は、中・大字として1ヶ所に挙げられており、「滝馬」の字が宛てられている。

ヨネクラ。

この小字は平栗東部の山間地で側稜の尾根部分にある。側稜の尾根をたどる山道が通っていて、西側の斜面を通る林道に繋がっている。古道といえそうな道である。

ヨネクラといえば、米を貯蔵しておく倉のあるところであろうが、この平栗の山中では考えられない。そこで、語源辞典によりつつ、次の二説を挙げたい。

①ヨネ←ヲネ（尾根）と転じたもので、クラはクラ（座）とみる。ヨネクラとは「豊作祈願の祭場」であろうという。山神がおわす場が、この尾根か峰にあったのではないだろうか。尾根伝いの山道だけが使われていた時代に発生した地名と思われる。

②自然地名とみる。ヨネは「砂。砂丘」のことで、クラは動詞クル（剝）の語幹から、「崩れ地」をいう。ヨネクラとは「砂地で崩壊地のある場所」か。

全国地図には、中・大字として、6ヶ所に記載されている。

【道好】

ドウコウ。

この小字は平栗川支流の最上流部にあり、南北の二つの側稜の間の谷になっている。

ドウコウとは何か。三説を挙げる。

①ドウコウは道幸＝洞庫で、「茶室内の道具。畳のところで居ながらに使用できるようにした押入れ式の棚」（広辞苑）であるという。ドウコウとは「棚状になっている傾斜地」を意味するか。戦国武将たちの間に広まっていたという茶道に関わる道具に見立てたと考えることもできるが、やや無理気味か。

②ドウコウ←ドウゴで、ドウは川音による音響地名で、ゴはコ（処）の濁音化した語で、「川音の聞こえるところ」か。

③ドウコウ←ドウゴで、ドウはドウ（堂）で南側の側稜の独立峰を堂宇に見立てたものであろうか。ゴはコ（処）。ドウゴとは、「御堂のような山のあるところ」であろうか。

全国地図には1ヶ所、中・大字として記載があり、「道向」の字が宛てられている。

【日向】

ヒナタ。二つのドウコウ小字に挟まれている。

ヒナタといえば、「日当たりのいい所」を意味する。この小字は、半分ほどは北向きの日当たりのよくないところにあるが、残りの半分は日当たりのいいところで、ここから小字名は生まれたものと思われる。

【倉ノ入】

クラノイリ。

この小字は、主要地方道下条米川飯田線に近く、南部コミュニティーセンターや集落も近い。

クラノイリとは何か。クラの解釈によって、二通りの仮説が立てられる。

①クラは動詞クル（刳）の連用形クリの転じた語で、全国的に「崖」を意味するという（語源辞典）。クラノイリとは「崖地の奥に入ったところ」をいうか。

②クラは「倉庫」のこと。とすると、クラノイリとは、「集落の収穫物を保管していた公の倉庫のあった所より奥まった場所」という解釈もありうる。

全国地図にはクラノイリ地名は載っていない。

【土林・土林日影】

ツチバヤシ・ツチバヤシヒカゲ。

これらの小字も主要地方道下条米川飯田線に沿っている。

ツチバヤシ小字は、谷間の湿地帯にあり、現在は棚田になっている。

ツチは「泥」から転じて「湿地」を意味する（語源辞典）。ツチバヤシとは何を意味するのか。二説を挙げたい。

①ハヤシを「樹木の生えているところ」とすると、ツチバヤシとは「樹木の生えている湿地」となる。地名発生時には田んぼではなくて、林になっていた可能性はある。

②ハヤシは単に「原野」のことか（語源辞典）。であれば、ツチバヤシとは「湿地であるが原野になっているところ」をいうか。

ツチバヤシヒカゲとは、「ツチバヤシ小字の近くにある、日蔭地の多いところ」であろうか。

全国地図には、ツチバヤシ地名は1ヶ所に記載があり、同じ「土林」の字が宛てられている。

【中村】

ナカムラ。

この小字内を主要地方道下条米川飯田線が通っている。道路が変形六叉路になっているところでもある。

ナカムラとは何を意味しているのか、以外と難しい。一般的には「中心集落。または、多くの村のなかで、中心機能を持った村」（語源辞典）であるが、ここでは当てはまりそうにもない。地名発生時には集落があったと考えられないわけではないが、別の解釈を挙げたい。

ナカは「側稜と側稜に挟まれた土地」をいうか。ムラは、やや無理気味だが、「道がたくさん集まっている交差点」つまり道が群れているところ、とすることはできないだろうか。

ナカムラとは「側稜の間にある谷で、道が集まった辻」としたいが、どうであろうか。

全国地図には、ナカムラ地名は中・大字として635ヶ所に記載されている。

【田中】

タナカ。

この小字も、主要地方道下条米川飯田線に接している。緩傾斜地で、一部は現在水田になっている。

これも難しい地名。普通は「田に囲まれた中だから、水田地帯の集落」（語源辞典）ということになるが、ここでは該当しそうにもない。

タナカはタナ（棚）・カ（処）ではないだろうか。タナ（棚）とは「割合狭く、やや凹凸のある山腹のゆるやかな所」（語源辞典）と思われる。タナカとは「比較的狭いところで、山腹の緩やかな傾斜地」としたい。

【一ツ田】

ヒトツダ。

この小字は、平栗川の小さな支流が流れている谷にある。ドウコウ小字の一つ南側の洞になる。トギヤ小字の大きな谷に開口している。

ヒトツダとは、「一枚の田んぼがあったところ」か。ヒトツダ小字に囲まれるようにして、小さなカイト小字がある。このカイト小字にどのような人が住んでいたのかわからないが、そのカイト小字の居住者が耕作していたと思われる。現在は、田んぼは一枚もないが、地名発生時には存在していた可能性は高い。

全国地図はヒトツダ地名は1ヶ所。

【研屋】

トギヤ。

この字は、平栗川支流の最上流部にあって、側稜の間の長い谷になっていて、二つの谷が途中で合流している。

トギヤとは何か。二説を挙げたい。
①トギヤとは「刃物や鏡などを研ぐことを業とする人が住んでいた所」となりそうだ。山中ではあるが、隣には「細工屋」小字があるので、可能性があるともみた。知久氏関係の需要があったのかもしれない。

②トグは動詞トグ（利。鋭）の連用形で「鋭く尖った土地」をいう（語源辞典）。ヤはヤチ（菴）のこと。“尖った”ところを立体的にとらえるのか、平面で見るのかで解釈は異なる。トギヤとは「尾根の先端が突き出している湿地」か、「鋭く突き出た独立峰がある湿地」か。

全国地図には、トギヤ地名が5ヶ所に載っている。

【川原沢】

カワラサワ。

この小字も主要地方道下条米川飯

田線が通っている。側稜の末端部と平栗川支流からなる土地。北向きの傾斜地と平地は現在水田になっている。

カワラサワとは「ほぼ平坦な土地のある谷」か。

全国地図にも、カワラワ地名は1ヶ所、カワラザワ地名は3ヶ所に、中・大字として記載されている。

【うなり田・ウナリ田】

ウナリダ。

「うなり田」小字が4ヶ所、「ウナリ田」小字も4ヶ所にあり、それらが主要地方道下条米川飯田線に沿ってほぼ南北に並んでいる。

三穂には「うなり岩」小字があり、川の音響地名であろうとした。

この上久堅蛇沼のウナリダはどうであろうか。

地元で聞いてみないと分からないが、とりあえず二説を挙げておきたい。

①川音による音響地名か。北側の平栗川やその支流は少し離れているので、川音が響くとすれば、南側の蛇沢川とその支流によるものと思われる。蛇沢川とその大きな支流が、最南にある「ウナリ田」小字のすぐ近くで合流している。この合流点で、水量の多くなった時に、唸るような音を発しているのかもしれない。なお、ウナリダ小字の南西側には、明らかに音響地名であるトドメキ地名がある。ウナリダとは「川音が大水の時などに響く唸るような音が聞こえるところ」であろうか。ダはタ（田）かダ（処）を意味するものと思われる。

②ウナリダ小字の南側にトドメキ小字があるが、ここには標高750.2mの独立峰がある。南よりの風がこの独立峰で分かれて、その風下で収束する。その時に、風のうなりが聞こえること

も考えられる。ウナリダとは「風が唸るような音を出すところ」となる。

全国地図の中・大字には、ウナリダ地名もウナリタ地名も記載は無い。

【ヒカゲ】

この小字はウナリダ小字の間にあり、東側は緩い傾斜地で北側が急傾斜地になっている。

ヒカゲ（日影）とは「日の光。ひざし。ひなた」（国語大辞典）のこと。ここでいうヒカゲとは「日当たりのいいところ」を意味するものと思われる。日葡辞書にも「太陽の輝き、または、光線」とある。

【細工屋】

サイクヤ。

この小字は、蛇沼のトギヤ小字の西隣にある。西側にはウナリダ小字がある。

サイクヤとは何か。解釈を二通り。

①サイクヤを素直に解釈すれば、「木工などで小道具や調度をつくる作業場があった所」となる。東隣にトギヤ小字があり、このことが、この解釈の傍証となる。

②サイには「谷間」の意味がある。長崎の方言であることが気になるが、サキ（裂。割）の転で「谷間」をいうこともあるらしい。クヤは動詞クヤス（崩）の語幹で「崩壊地形」をいう（以上は全て語源辞典による）。

全国地図には、サイクヤ地名は1ヶ所にしかない。

【中島】

ナカジマ。

この小字は、蛇沼のサイクヤ小字の南側に2ヶ所ある。いずれも側稜の先端部にあり、ほぼ独立峰になっている。

ナカは谷に挟まれた、その間にあることを意味しているのであろうか。シ

マは高い所を島に見立てたものであろう。ナカジマとは、「谷に挟まれて島のようにになっている高いところ」か。

全国地図には、ナカジマ地名は262ヶ所にも、中・大字として挙げられている。

【二反田】

ニタンダ。

この小字は蛇沼のトギヤ小字とサイクヤ小字の南隣にあり、西側にはナカジマ小字がある。東西に長い小字になっており、谷や傾斜地にあり、現在は水田にはなっていない。

ニタンダとは何か。解釈を二つ挙げておきたい。

①現在は田んぼはなくても、地名発生時には、この小字内に、面積が2反歩ぐらいの田んぼはあったかもしれない。ニタンダとは、「2反歩の水田のあった所」というのもありうる。

②ニタンダ←ニタノタの可能性も強い。撥音便化した語である。ニタはヌタと同義でイノシシが体に泥を塗りつける湿地を意味する。タはタ（処）であろう。ニタンダとは「ヌタのような湿地になっているところが多い場所」であろうか。

全国地図に記載された中・大字の中で、ニタンダ地名は16ヶ所に及ぶ。

【マセバ】

この小字は、蛇沢川の最上流部の深い谷にある。

マセバとは何を意味するのか。語源辞典に依りながら、二通りの考えを示しておきたい。

①マセはマ（間）・セ（狭）で、「狭い谷」を意味する。マセバとは、「谷が狭くなっている場所」をいうか。

②マセはマ（真）・セ（瀬）をいう。マは強意の接頭語。マセバとは「急流

になっているところ」をいうか。この蛇沢川は谷が深いので急流になっているものと思われる。

全国地図には、なぜか、マセバ地名は1件の記載も無い。

【洞】

ホラ。

この小字は、蛇沢川や主要地方道下条米川飯田線に沿う側稜に南側から入り込んでいる、一軒の家が入るほどの小さい谷となっている。

ホラとは「山稜に囲まれた小さな谷」である。

【山住】

ヤマズミ。

この小字の北端を蛇沢川が流れている。この小字内には山住社がある。祭神は伊邪那岐命で、境内社には富士浅間神社・鍬大社・地神社・居森社・稲荷社・山神の六社があり、蛇沢の産土様として祀られているという（村誌）。

スミ（隅）は「谷の奥まった所」をいう（語源辞典）。ヤマズミとは「山地の谷が奥まったところ」であろうか。

なお、ヤマズミ小字には蛇沢山妙寿庵があつて子安観世音菩薩が祀られている。

全国地図には、ヤマズミ地名は3ヶ所に挙げられている。

【北ノ入】

キタノイリ。

この小字は、蛇沢川に沿っており、ヤマズミ小字の一つ北側の谷にある。谷の底部はほとんどが棚田になっている。

キタノイリとは何を意味するのか。仮説を二つ。

①山住社や妙寿庵のあるヤマズミ小字から見て、ひとつ北側の谷になるの

で、「北にある奥まった谷」を意味するか。

②キタ←キダと清音化した語で、「階段」をいう。キタノイリとは「谷の奥まった所で階段状の地形になっているところ」か。

全国地図には、2ヶ所に中・大字として載っている。

【小垣外・垣外】

コガイト・カイト。

コガイトは蛇沢にあり、カイトはヌマシオにある。いずれも主要地方道下条米川飯田線に沿っている。

カイト小字には、沼塩集会所や子之神神社があり、「居住地のあつた所」であろう。

コガイトとは何か。二説を挙げたい。

①コはコ（小）で、コガイトとは「カイトにあつた家からの分家のあつた所」だろうか。

②コ←コウ（川）で、コガイトとは「川の傍で住居地であつた所」か。小字内を蛇沢川が流れている。

全国地図には、コガイト地名は3ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【久保・久保田】

クボ・クボタ。

いずれもヤマズミ小字に囲まれている。クボ小字は東隣にカマクボ小字がある。

クボ小字は独立峰の西側傾斜地にあり、その独立峰に連なる側稜に向かって食い込んでいる小さな谷がある。その小さな谷をクボと呼んでいたと思われる。

クボタ小字は、谷の底部にあり、現在は棚田になっている。クボタとは「窪地にある田んぼ」であろうか。

【釜窪】

カマクボ。

この小字は、ヤマズミ小字の上流側にあり、側稜の間の小さな谷になっている。

カマクボとは「えぐられたようになっている窪地のあるところ」であろうか。

このカマは地形を釜に見立てたものか、あるいはカミ（囓）・マ（間）で、水が岩・砂・土を激しくえぐることに由来するのか、はっきりしないが、ここでは、前者と考えたい。

カマクボは全国地図には2ヶ所。

【下久保・細久保】

シモクボ・ホソクボ。

シモクボ小字はヤマズミ小字の下流側に接しており、クボ小字の下流の方にもなっている。側稜の側面をえぐられたようになっている、ちいさな洞（谷）がある。

シモクボとは「クボの下流側にある窪地」であろう。

ホソクボは平栗川に沿った細長い小字で、字面の通り「細長い窪地」を意味していると思われる。

【上神田・下神田】

カミジンデン・シモジンデン。

これらの小字はヤマズミ小字の東側である上流側の側稜にあり、細長い谷を挟んで、上流側がカミジンデンで下流側がシモジンデンになっている。広大な小字である。

ジンデンとは何か。解釈は二つ。

①ジンデンといえば、「神社の諸経費をまかなう田地」である。しかし、ここには山住社があるが、現在、水田は見つからない。地名発生時には、わずかな田んぼがあっても不思議ではないが。

②ジンデン←ジンデでシミ（浸）・デ（出）が転じた語とする。ジンデンと

は「湿地に多く、山腹や谷壁にも見られるが、その下にはたいてい低湿地がある」（語源辞典）という解釈があてはまりそうだ。ジンデンとは「自然湧水の多い山地」であろう。

全国地図には、カミジンデン地名は無いが、カミシンデン地名は46ヶ所もあって、いずれも「上新田」の字が宛てられている。湿地帯や河川の氾濫原などで新たに開拓された水田地帯で用いられた地名であろう。

【南沢】

ミナミサワ。

この小字は、蛇沼の最南端になる千代との村境にある。

ミナミサワとは、文字通り「村の南の方にある沢」を意味するものと思われる。イタチ川の支流を南沢と呼んでいるのかもしれない。

【廣見】

ヒロミ。

この小字は、イタチ川の上流部にあり、二本の側稜とその間にある谷を含むが、比較的小さな小字である。

ヒロミとは広場のことであるが、ここには地名にするほどの広場はない。ヒロ←ヒラ（平）の転訛した語で、黄泉平坂のヒラで「緩傾斜地」をいい、ミは漠然とした場所を表す接尾語（以上は語源辞典）である。

ヒロミとは「緩い傾斜地」を意味しているものと思われる。

全国地図には、13ヶ所にヒロミ地名が中・大字として記載されている。

【梅窪・梅久保】

ウメクボ。

これらの小字は、隣り合っている。千代との村境にある側稜とその北東側の谷にまたがっている。これらの小字の中を流れているのは蛇沢川の支

流であろうか。谷の底部は大半が棚田になっている。

ウメクボは梅が植えられている窪地ではない。

ウメはウメ（埋）で動詞ウム（埋）の連用形が名詞化した語。ウメクボとは「土砂が崩落して埋まった場所がある窪地」をいう。その後、瑞祥地名として「梅」の字が用いられたものと思われる。

全国地図にウメクボ地名は3ヶ所。

【川原田】

カワラダ。

この小字は蛇沢川の支流沿いにある。沼塩の子之神神社側稜の北東側の麓になる。

カワラダとは字面の通りで、「川原にある水田」を意味するか。

【大皿田】

オオサラダ。

この小字は蛇沢川と主要地方道下条米川飯田線に接している。

サラダはサラタから転じた語で、「水を干すことのできる田。乾田」を意味する下伊那郡の方言であるという（国語大辞典）。この小字は、砂地で乾きやすくなっているのであろうか。オオは単なる語調を和らげる接頭語か（語源辞典）。

オオサラダとは「乾田」を意味する。

全国地図には、オオサラダ地名は無いが、サラダ地名は2ヶ所にある。

【橋場】

ハシバ。

この小字は主要地方道下条米川飯田線が蛇沢川と交差するところにある。

ハシバは字面通りで「橋が架けられていた場所」である。今でも蛇沢橋がある。

【イナバ】

この小字は、イタチ沢と蛇沢川の合流点に近く、側稜の先端部分にある。そこは、ほぼ南向きの傾斜地になっている。

イナバとは「稲干し場」のこと。稲架（はさ）で干すようになる以前には、草地でそのまま乾燥させ、そこをイナバと呼んだ。この地域にもイナバ小字は多い。

【ぐみの木】

グミノキ。

イタチ川に蛇沢川が合流する付近からみて、北の方の山地がグミノキ小字であり、かなり広い面積をもっている。

グミノキとは何を意味しているのか。三説を挙げる。

①「ぐみの木」となれば、「葉黄が自生している所」となりそうだが、それが地名になるだろうか、という疑問は残る。

②グミ←クミで、動詞クム（朽）の連用形が名詞化した語。この地方でも崩れることをクムと知っている。ノキ←ヌキ（抜）と転じたもので、動詞ヌク（抜）の連用形。グミノキとは「崩れて土砂が押し出してきた所のある土地」であろうか。

③クミは動詞クミル（朽）の語幹で「腐る」から「湿地」を意味する（語源辞典）。ノキは崩壊地をいう。グミノキとは「湿地で崩壊地のある土地」であろうか。

全国地図には2ヶ所にグミノキ地名が載っている。

【宮ノ前・宮前】

ミヤノマエ・ミヤマエ。

「宮ノ前」小字が2ヶ所、「宮前」小字が1ヶ所ある。

いずれも、「神社の前になる所」であるが、どこの神社なのか、はっきりしないことがある。

沼塩の子之神神社に近い小字が一ヶ所あるが、神社の後ろの方向になっている。ここでいうお宮とは、少し離れているが、蛇沢のホラ小字にあるといわれている熊野社（村誌）と見た方がよいのかもしれない。しかし断定するのは難しい。

【そば岩】

ソバイワ。

この小字は、蛇沼から尾科に向かう道の脇の急傾斜地にある。

ソバ←ソハ（岨）で「嶮しいところ」をいう（語源辞典）。近世以降はソバと発音することが多いらしい。

ソバイワとは「嶮しい崖に岩が出ている所」であろうか。行き来する人は危険を感じていたために地名になったのであろう。

全国地図にはソバイワ地名はひとつも載っていない。

【神田】

ジンデン。

蛇沼のジンデンは、千代の田力との村境にあり、側稜の尾根に達する山中となっている。

ここのジンデンも神社の諸費用に充てる水田ではない。水田は無いし、神社も少し離れている。

ジンデン←ジンデと転訛したもので、シミ（浸）・デ（出）から「湧水のあるところ」を意味するか。とすれば、ジンデンとは「自然湧水のある所」としたいが、どうであろうか。

全国地図にはジンデン地名が、中・大字として15ヶ所に挙げられており、そのすべてに「神田」の字が宛てられている。

【雨つつみ】

アマツツミ。

この小字は千代の田力との村境の尾根筋にあり、ヒカゲダ小字を挟んで二ヶ所にあり、いずれもやや凹地になっている。

アマツツミとは、「雨や自然湧水を集めた堤」をいうか。尾根の鞍部にあり、かつては水を蓄えていたのではないだろうか。それは灌漑用水であった可能性がある。

全国地図には、5ヶ所にアマツツミ地名があり、すべてに「天堤」の文字が宛てられている。

【日影田・日かけ田・ヒカゲ田】

ヒカゲダ。

千代の田力との村境の尾根部にある。

いずれも日当たりはいいと思われるので、ヒカゲダとは「日当たりのよい場所」としておきたい。

【チンシュウ林】

チンシュウバヤシ。

この小字は蛇沼の側稜末端部の独立峰にあり、千代の田力に接する。

チンシュウとは何か。

チンシュウ←チンジュ（鎮守）であろう。他には思いつかない。鎮守とは「寺院・村落など一定の地域で、地霊をなごめ、その地を守護する神。また、その神社」（国語大辞典）であるという。

本来は国家守護の神として祀られていたが、平安時代以降、村落にも鎮守信仰が次第に普及し始め、近世には鎮守とか鎮守の森が地域の氏神の社を指すようになったらしい。しかし鎮守には地縁的な神格の意味が強く、その点で氏神や産土神の血縁的な神格との間に微妙な違いが残っていると

もいわれている。(以上は民俗大辞典)

ハヤシは「樹木の生えているところ」であろうが、神聖な地であるモリとの関連を思わせる。

チンシュウハヤシとは、「この地の地霊をなごめ、この地を守護する鎮守の神が祀られていた林」であろうか。

現在、この地にその痕跡があるのだろうか、気になっている。

【うばこせ】

この小字は千代の田力との村境にあって、側稜の間の谷底にある。現在はほとんどが田んぼになっている。

ウバコセとは何を意味しているのであろうか。解釈を二通り示したい。

①ウバは山姥伝説でもあるのかどうか。その老婆であろうか。コセはコ（小）・セ（瀬）でイタチ川のこと。ウバコセとは「山姥に関わるといわれている谷沢」を意味するか。

②コセ←コシの転で動詞コス（越）の連用形。ウバはウバ（乳母）で、「乳飲み子を抱えてイタチ川を越えたところ」をいうのであろうか。

何らかの伝説が絡んでいるように思われるが、現在のところ、何もわかってはいない。

全国地図にはウバコセ地名は記載が無い。

【はんのう田】

ハンノウダ。

この小字は沼塩のイタチ川氾濫原にあり、現在は水田と住宅地になっている。

ハンノウダはハンノウダ（半納田）で、「災害により年貢が半減され、これが恒久化した水田」（語源辞典）か。大水の度にイタチ沢が溢れ、あるいは南側の傾斜地が崩れるなどの災害の常襲地だったのでであろうか。

下伊那各地にある小字名であるが、全国地図には、なぜかハンノウダ地名は一件の記載も無い。

【井ノロ】

イノクチ。

この小字は沼塩の側稜の間を流れるイタチ川に沿った谷の底部にあり、現在は棚田の水田地帯になっている。

イノクチとは何か。

イは井（井）で、ここでは「川」のこと。クチはクチ（口）で「川の合流点」をいう（語源辞典）。

イノクチとは「川の合流点のある所」であろうか。この小字の北西端で、蛇沢川がイタチ川に合流している。

全国地図には、イノクチ地名が35ヶ所に中・大字として記載されている。

【カワ上】

カワウエ。

この小字は沼塩集会所や子之神神社の近くにあり、三方をカイト小字に、一方をイノクチ小字に囲まれている、小さな小字である。

カワウエとは、「川の標高よりも少し高い場所」をいうか。ここで川とはイタチ川のことをいう。

全国地図には、カワウエ地名が二ヶ所にある。

【博田沢・伝田沢】

デンダサワ。

この小字は四ヶ所にある。いずれも下久堅の柿野沢の村境が、それに近いところにあるが、谷が一続きであるとか、沢が繋がっているということはない。

下久堅にも同名の小字がある。その時の考えた由来を挙げておく。

①デンダとはゼンマイのことで、水窪の方言であるという。デンダ

サワとは「ゼンマイが自生している谷」を意味する。

②デンダはデ(出)・ミ(水)・ダ(処)の撥音便化した語で、「自然湧水の多いところ」をいう。デンダサワとは「自然湧水の多い谷」の可能性もないわけではない。

デンダサワ地名は、全国地図には、一ヶ所も記載がない。

【堂平】

ドウダイラ。

中字にもなっている小字である。堂平農家生活改善施設が、小字内にある。三方が囲まれて盆地様になっている。

ドウダイラとはタヲ・タヒラの転で「緩傾斜地」という語を重ねた地名ではないかという。タヲは動詞タヲム(撓)の語幹で「傾く。ゆるむ」の意である。(以上は語源辞典)

ドウダイラとは「緩傾斜地となっている小盆地」か。

全国地図には13ヶ所にドウダイラ地名がある。

【瀧場・タキバ】

タキバ。

タキバ小字は二ヶ所とも、堂平の細田川の中流部にある。西端を主要地方道下条米川飯田線が通っている。

タキバといえは、山岳信仰で神を祀り、「滝行を行う場」であると思われる。

しかし、この堂平のタキバは周辺に人家もあり、修行するに適した場所とはいえないようにも思えるがどうであろうか。地名発生時には、静寂な場所で急流

がはじける音だけが響いていたのであろうか。

全国地図には、タキバ地名は1ヶ所だけあり、「滝馬」の字が宛てられている。

【細田】

ホソダ。

この小字は上久堅の中心部にある。谷の底部で西端を細田川が流れ、JA上久堅支所・上久堅郵便局・上久堅保育園などがある。

ホソダとは、字面の通りで「細長い田んぼのある、細長い地形になっている所」であろうか。

一ヶ所、小さなホソダ小字があつて、側稜の西側で急傾斜地になっているが、かつては大きなホソダ小字の一部になっていたと思われる。

全国地図にはホソダ地名は35ヶ所に中・大字として挙げられている。

【カニ田】

カニダ。

細田川が狭窄部から広い氾濫原に出たところに、この小字はある。この小字の中には、上久堅福祉企業センターがある。

カニダとは何か。語源辞典に依って三説を挙げたい。

①カニ←カネ(矩。曲)と転訛した語。ダは場所を示す。カニダとは、「(細田川に沿って)曲がった地形になっている所」か。

②カニ←カヒ(峽)と転じたもので、カニダとは「狭窄部への入り口になっている所」をいうか。

③カニダは「沢蟹の多くいる所」の可能性もあるか。

全国地図にカナダ地名は無いが、カナダ地名は6ヶ所に記載されている。

【宮ノ脇】

ミヤノワキ。

この小字は風張の細田川左岸にあり、丘陵地の緩傾斜地となっている。ミヤノワキとは、「近くにお宮のあるところ」であろうが、このお宮がどこにあったのかはわからない。

【久七洞】

キュウシチボラ。

この小字は風張のホソダ小字を挟んで二ヶ所にあり、二つの洞はいずれも、細田川に開口している。

キュウシチボラとは「久七さんが関わった洞」であろうか。

【タルイシ】

この小字は風張の細田川左岸の急傾斜地にあり、ホソダ・キュウシチボラ・ミヤノワキ小字に囲まれている。

タルイシとは何を意味するのか。これも語源辞典を参考にしながら考えていきたい。

タルは下伊那では「谷川の滝となっている所」をいうとあるが、滝があるようにはみえない。

タルは動詞タル(垂)と関係し「崖」をいう。イシはイソの転訛した語で「断崖絶壁の岩山」を表すという。

以上から、タルイシとは、「断崖の岩山になっている所」としたい。

全国地図には、タルイシ地名が2ヶ所にある。

【五十目】

ゴジュウメ。

この小字は二ヶ所、下平にある。

「五十目」は下条氏が与えた知行の面積であったという(龍江村誌)。上久堅の場合はどうであったのか、はっきりはしないが、龍江村誌にならうとすれば、「五十目」というのは「50坪の土地」ということになるが、図面でみると、もっと面積は30倍ほど大きい。

米の収穫量を表しているともいうが、上久堅のここでは二ヶ所とも焼畑でないで収穫することはできない。米以外の焼畑生産物であればどうか。50目といえは188gである。ヒエでもアズキでもこの量で何ができるのであろうか。

ゴジュウメとは何か。あえて二説を挙げておきたい。

①焼畑が行われていたとすれば、ヒエの播種量と考えることができるかもしれない。ゴジュウメとは「50匁の種子を播くことができる土地」であろうか。

②ゴジュウメ←イソメと転じたもので、イソメとはイソ(石の多い)・メ(べの転で「あたり」の意か)ではないか。これらが成立すると、ゴジュウメとは、「あたりに石の多い土地」ということになる。やや無理気味か。

【水元・水本】

ミズモト。

下平の細田川周辺に、それぞれ二ヶ所ずつ分布している。それぞれに細長い大きな小字と小さな小字になっていて、細長い小字は主要地方道下条米川飯田線に沿っている。

ミズモトとは、文字通り「自然湧水の多いところ」ではないだろうか。

全国地図にも3ヶ所にミズモト地名が挙げられている。

【十二間】

ジュウニケン。

この小字は細田川の南側にある側稜を横断している、面積の大きな小字である。

ジュウニケンとは何を意味しているのか。「十二間」は、21.8mの長さであるが、地名とどう関わるのか、わからない。そこで、迷いながらも二説を挙げておきたい。

①ケン
②ケン←テン(天)と転訛したもので、ジュウニケンとは、「十二天」のこと。この小字で十二天様が祀られていたのかもしれない。十二天様というのは山の神のこと。

【馬道】
ウマミチ。
この小字もジュウニケン小字と同じように神ノ峰から細田川へと側稜を横断している。

ウマミチとは、字面の通りで「馬の通る道」(国語大辞典)である。現在は道の痕跡はあるようには見えないが、地名発生時にははっきりしていたのではないだろうか。

憶測であるが、細田川を越えた所にババ(馬場)小字があり、神之峯城とこの馬場をつなぐ通路になっていたのかもしれない。

全国地図にはウマミチ地名は、中・大字として1ヶ所で挙げられている。

【ヒカゲ】

ヒカゲ。

下平のヒカゲは細田川左岸にある。北東向きの傾斜地になっており、日当りはあまりよくなかったのかもしれない。

れない。

ヒカゲとは、「日当たりのよくない所」としておきたい。

【ヲカマ】

オカマ。

細田川と玉川が合流するところに、この小字はある。下平の中心地で、下平第一集会所もある。

オカマとはオ(小)・カマ(嚙・間)で、「えぐられたような崖地になっている所」であろうか。玉川が直接に突き当たってくる所に、この小字は位置している。

全国地図にはオカマ地名は2ヶ所にある。

【新慶】

シンケイ。

この小字はウマミチ小字の西隣にあり、側稜をほぼ横断している。

シンケイとは、知久18ヶ寺の一つ「新慶寺があったところ」をいう。シンケイそのものの意味は不明であるが、瑞祥地名ではあろう。

【坂尾】

サカオ。

下平の南から突き出ている側稜の末端部に近いところにある。

ここも知久18ヶ寺の一つである坂尾寺のあったところ。

サカオとは、「側稜の尾の部分、末端部に近い峠のある所」をいうか。サカは「峠」の古語だという(語源辞典)。

全国地図にもサカオ地名は1ヶ所にだけある。

【地王堂】

ジオウドウ。

この小字は下平の中心部に向かって南から着きだしている、側稜の最先端部にある。標高675.8mの独立峰になっている。

ジオウドウ（地王堂）←ジュウオウドウ（十王堂）と転訛したと思われる。ジオウドウとは、「十王堂があった所」であろうか。

全国地図には、ジオウドウ地名は見えないが、ジュウオウドウ地名は6ヶ所にある。

【小路】

コウジ。

下平の中心部で、側稜丘陵地と玉川の間にある平坦地に、この小字はある。

コウジはコミチ（小路）のウ音便化した語で、大路にたいして「幅の狭い道が通っているところ」を意味する。この小字内を国道256号線に沿うように、やや幅の狭い道路が通っている。

前項地図には23ヶ所にある。

【薬師前】

ヤクシマエ。

この小字は下平の玉川と側稜麓の間にある。

この小字内には「水の上の薬師堂」がある。村誌によれば、かつては郡下三大薬師の一つであったという。池の上の御堂があるので、この名称になっている。堂内には薬師如来と十二神将が安置されている。

ヤクシマエは文字通り「薬師堂の前の土地」であろうか。

全国地図にはヤクシマエ地名は8ヶ所に及ぶ。

【西小ヤ・北小屋・南小ヤ】

ニシコヤ・キタゴヤ・ミナミゴヤ。

これらの小字は神之峯城址の中（北小屋）や北西側（西小ヤ）と南西側（南小ヤ）にある。

コヤ（小屋）とは、「昔、主な建物に付属して建てられた従者の住居。江戸時代では、藩主の藩邸または城中に

あった軽輩の住宅」（国語大辞典）であるという。

コヤは「知久氏の家臣の住居のあった所」であろうか。

全国地図には、ニシコヤ地名の場合は9件もある。

【平岩】

ヒライワ。

この小字は玉川にまたがっており、神之峯城址の西側にある。

ヒライワとは「表面が平らで、板のような岩」（国語大辞典）であるという。

ここでいうヒライワとは「表面が平らな岩のある所」を意味するものと思われる。

全国地図にはヒライワ地名が、中・大字として22ヶ所にも挙げられている。平岩というのは目立つ岩ということだろうか。

【荒田】

アラダ。

この小字は下平の側稜の南東向きの斜面にある。岩がごろごろ出ているような、この傾斜地では水田は作れない。耕作があったとすれば焼畑しか考えられない。

アラダとは「焼畑が行われたこともあったが、久しく耕作がされていない土地」をいうのであろう。

全国地図にも、3ヶ所のアラダ地名が、中・大字として挙げられている。

【大シバラ・大芝羅】

オオシバラ。

この小字は側稜の南～東向きの傾斜地にあり、麓を玉川が流れている。

オオシバラとは何を意味しているのか。語源辞典に依りながら二通りの解釈を挙げておきたい。

①オオは接頭語で美称であらう。シバ

はシバ(柴)で、「雑木の林」をいう。ラは「場所」を示す接尾語。以上から、オオシバラとは「雑木林になっているところ」を意味するか。

②シバは「焼畑」と考えたい。あとの語は①と同様に解釈すると、オオシバラとは「焼畑が行われていた所」となる。

全国地図にオオシバラ地名はないが、シバラ地名は2ヶ所にある。

【日ヤケダ・日ヤケタ】

ヒヤケダ。

これらの小字は下平の玉川右岸にある小さな小字である。

ヒヤケダとは「水の便のよくない田」であろうか。玉川がそばを流れているが、低すぎてそれを利用できない。

【小畑】

オバタ。

この小字は玉川の両岸にある。

オバタとは何か。これも語源辞典によりながら二説を挙げたい。

①オバタ←コバタと転じたもので、「山中にわずかな平坦地のあるところ」をいう。

②やはりオバタ←コハタと転じたとみる。カハ(川)・ハタ(端)→コウ・ハタ→コ・ハタで、オバタとは「川べりの地」と解するか。

全国地図には、オバタ地名は39ヶ所に挙げられている。

【牛コロビ】

ウシコロビ。

この小字は神之峯城址の西側にあり、玉川左岸の傾斜地に2ヶ所ある。

牛は山道に強いといわれている。その牛でも転びそうな傾斜地をウシコロビというのであろうか。ウシコロビとは「急な坂道のあるところ」を意味するものと思われる。

全国地図にはウシコロビ地名は載っていないし、地名関係の辞書類にも記載がない。

【城山】

ジョウヤマ。

この小字は神之峯城址の西側急傾斜地に2ヶ所ほどある。

ジョウヤマとは「城があった丘陵」であろう。

全国地図には97ヶ所にも、中・大字として挙げられている。

【カフモリ岩】

コウモリイワ。

この小字は神之峯城址西側傾斜地の中腹部あたりにある。

コウモリイワとは「蝙蝠がその蔭に住んでいた岩」であろう。

全国地図にもコウモリイワ地名は3ヶ所に記載がある。

【栗林】

クリバヤシ。

この小字は、下平のジョウサカ小字を挟んで2ヶ所にある。一つは丘陵の中腹部分に、もう一つはより高い谷にある。

クリバヤシとは何か。二説を挙げる。①クリはクリ(涅)で「水の底によどむ黒い土」から「湿地」を意味する(語源辞典)。クリバヤシは「湿地で樹木の生えている所」であろうか。中腹部のクリバヤシ小字には今でも池が多い。

②クリバヤシは字面の通りで、「栗の木のあるところ」である可能性も残る。日葡辞書にもあるので、中世にも栗林は存在していたのであろう。

全国地図には29ヶ所にクリバヤシ地名が載っている。

【法新院】

ハウシンイン。

この小字は下平のクリバヤシ小字の南隣にあり、側稜の尾根に近い中腹部の傾斜地にある。

知久18ヶ寺の一つである法心院のあった所といわれている（下伊那史）。

【城坂】

ジョウサカ。

この小字は神之峯城址の東側にあつて、コウジ（小路）から城址へ、裏側から登るルートにある。

ジョウサカとは、文字通り「城へ登る坂道」を意味する。

城のあるところであれば、どこにでもありそうな地名であるが、全国地図にはジョウサカ地名は載っていない。

【城】

ジョウ。

この小字は、神之峯城址の主郭と二の郭跡をつなぐ尾根の東側斜面にある。

ジョウは「城のあった所」を意味するが、なぜここだけにジョウ小字があるかはわからない。

全国地図には、当然のことながらジョウ地名は46ヶ所で、比較的が多い。

【神和】

シンワ。

この小字は、神之峯城址の台地の端で、2ヶ所にある。

シンワとは何を意味しているのか、わかりにくいだが、あえて二説を挙げる。
①シン←ジン（陣）と清音化した語で、ワはワ（曲）で、曲がりくねっている所をいう（国語大辞典）。シンワとは「陣地すなわち城郭の曲がりくねっている所」としたいが、どうであろうか。

②シンはシン（神）で神社の境内をいう。ワはハ（端）の転訛した語で、境

内の端をいうか。シンワとは「神社の境内の端にあたる」としたい。しかし爪神社の境内が、そこまで広がっていたことがあったのかどうか。

全国地図には12ヶ所にシンワ地名がある。

【神峯】

カミミネ。

この小字内に、現在は久堅神社と民間放送のテレビ中継放送局がある。

カミミネとは、文字通りで「神社のある丘陵の頂上部」であろう。

全国地図には、4ヶ所にカミミネ地名はあるが、いずれも「上峰」の字が宛てられている。

【寺ヤシキ】

テラヤシキ。

この小字は、神之峯城址の麓を回る道路の外側にある。

テラヤシキの意味は、「寺の屋敷地」（国語大辞典）で、ここには、かつて知久18ヶ寺の一つである「経山」のあったところで、南原の文永寺の御経堂の跡と伝えられている（村誌）。

全国地図には、テラヤシキ地名が、中・大字として10ヶ所に挙げられている。

【キトワキ】

この小字は、ジョウ・ジュウニケン・オオタニの小字に囲まれている。

キトワキとはキドワキ（柵戸脇）のこと。キドは「防備のための柵に設けた門」（広辞苑）で、ワキは「傍」のこと。

キトワキとは「城へ登る門の傍」をいう。現在でも、このキトワキ小字の端には神之峯城址に登る道路が通っている。

全国地図にはキトワキ地名は載っていないが、キドワキ地名は4ヶ所あ

る。

【大谷・小谷】

オオタニ・コタニ。

オオタニ小字は一ヶ所、コタニ小字は三ヶ所に、神之峯城址の南東の麓に分布している。

オオタニとは、「幅の広い大きな谷」でコタニとは「幅の狭い小さな谷」のことを示していると思われる。谷の底部は、現在は荒れ地になっているが、かつては棚田であったかもしれない。

全国には、オオタニ地名は多く、25000分の一地図には、207ヶ所にものぼる。コタニ地名は24ヶ所とやや少なめではあるが記載されている。

【堀田坂】

ホッタザカ。

この小字は神之峯城址丘陵の南側傾斜地の中腹にある。

ホッタザカとは何を意味しているのか。二説を挙げる。

①ホッタとは「小規模な開墾でごく小さな田。隠田」（語源辞典）という意味もある。ホッタザカとは「小さな開墾地のある坂道」をいうか。

②ホッタを固有名詞と考えれば、ホッタサカとは、「堀田氏の住んでいたところの坂道」ということになるがどうか。すぐ北側の傾斜地の上の方にミナゴヤ小字があるので、可能性はある。

全国地図にはホッタザカ地名は記載がない。

【ミナゴヤ】

この小字は神之峯城址の南側斜面にある。二の郭を含み、主郭への通路もこの小字内にある。

ミナゴヤ←ミナミゴヤと省略形になったものと思われる。すなわちミナゴヤとは「城の南にある知久家臣の住

居のあった所」であろう。

全国地図にはミナゴヤ地名は一つもない。

【小沢】

コザワ。

この小字は神之峯城址の南側斜面の大部分を占めている、大きなコザワ小字と下流側に三つの小さなコザワ小字がある。

神之峯城址丘陵には二本の沢があり、東側の沢の方が大きいので、小さい方の南側の沢をコザワとしたのではないだろうか。

全国地図には、コザワ地名が34ヶ所にも中・大字として挙げられている。

【北沢】

キタザワ。

この小字は、大きなコザワ小字の下流側にある。すぐ北側にはミナミゴヤ小字もある。

キタをキタ（北）とするのは、何を基準にしてのキタなのかははっきりしない。

そこで、キタ←キダと清音化したもので、キタはキダハシ（階段）を意味するものと考えたい。

キタザワとは、「階段状になっている沢」となりそうだ。現在は谷の底部は荒れ地になっているが、地名発生時には棚田になっていたのかもしれない。

全国地図には、キタザワ地名が48ヶ所に記載されている。

【田向】

タムカイ。

この小字は神之峯城址丘陵の南側の麓を流れる谷川を越えたところにある低い丘陵の谷となっている。

タムカイもまた難しい地名である。現在は水田はないが、かつては山中で

の稲作があったかもしれない。語源辞典を参考にして二説挙げておきたい。

①タムカイはタ(接頭語)・ムカイ(向)で、タは単なる接頭語。ムカイは神之峯からみての向かいとも考えられる。タムカイとは、「神之峯城址の向かい側になる所」か。

②タムカイ←タブ・カヒと転訛したもので、タブは動詞タフル(倒)と関係し、「崩壊地」をいう。カヒはカヒ(峽)で「山と山との間の谷間」のこと。タムカイとは、「崩崖のある谷間」であろうか。

全国地図には26ヶ所にある。

【中山】

ナカヤマ。

この小字は堂平地区に四ヶ所あるが、うち二ヶ所は面積の広い山地になっている。

ナカヤマとは、「丘陵地」のことであろうか。尾根があり谷があり、谷川が流れている。わずかではあるが、現在でも水田がある。

ナカ(中)には、神之峯のような高地と平野部との間の土地、というような含みがあるのかもしれない。

ナカヤマ地名は多く、全国地図でも295ヶ所に中・大字として記載されている。

【狝岩】

ムジナイワ。

この小字も神之峯丘陵の南麓で谷川を一つ越えた山地にある、かなり面積の広い小字である。

ムジナとは「アナグマの異称であるが、混同して狸をムジナと呼ぶこともある」(広辞苑)という。つまり、アナグマやタヌキのことをいう。イワ(岩)は「小石まじりの土地」(語源辞典)としたい。

以上から、ムジナイワとは「アナグマやタヌキが棲息している小石まじりの土地」であろう。

意外にも、全国地図にはムジナイワ地名は1ヶ所の記載もない。

【急ばしいわ】

エボシイワ。

この小字は尾根の先端部分にある小さな小字である。

エボシイワとは、「形が烏帽子に似た岩のあるところ」と思われる。

この地名も多く、中・大字として全国地図にもエボシイワ地名は31ヶ所にもある。

【丸山】

マルヤマ。

この小字は大鹿地区の玉川左岸にある東西に長い小字になっている。神之峯の南西方向の中腹にある。

マルヤマとは「形の丸く見える山」(国語大辞典)とある。当たり前過ぎるが、やはりそうした山に山神が鎮座していたのではないだろうか。山神が統合されていく前には、各部落各地区ごとに形のいい山に祀られていたものと思われる。

この小字に円錐形の独立峰はないが、傾斜地の下からみれば尾根の先端部も丸く見えるはずである。そうした山もマルヤマと名付けられていたと考えられる。

マルヤマ地名はどこにでもある。全国地図には、なんと352ヶ所に、マルヤマ地名が中・大字として挙げられている。

【水神釜】

スイジンガマ。

この小字は大鹿地区の玉川左岸の二ヶ所にある。一ヶ所は支流が流れ込んでいるところであり、もう一ヶ所は玉

川が直角に曲がっているところにある。

スイジンガマとは、「大きくえぐられていて、水神を祀ってあるところ」を意味する。

水神は「水にかかわる多種多様な神の総称」（民俗大辞典）である。そうした意味では、山の神に神格が似ているのかもしれない。下流側にある大鹿地区には水田もある。水神は田の神とも重なるので、この水神は大鹿地区で祀っていたのであろう。

全国地図にはこの地名はない。

【アサクボ】

この小字は大鹿地区の東方の山中にある。

アサクボとは何か。アサ←アス（埒）の転訛した語で、「崩崖」を意味する（語源辞典）。クボは「窪んだところ」で「谷」をいう。以上から、アサクボは「崩れたところのある谷」をいうのであろうか。

全国地図には、アサクボ地名が1ヶ所にある。

【ヒメコ山】

ヒメコヤマ。

この小字は大鹿地区のアサクボ小字下流側にあり、北辺を玉川の支流が流れている。

ヒメコヤマとは何を意味するのか。語源辞典によりながら、解釈を二つ。
①ヒメは動詞ヒム（秘）の連用形で「何かの影になったところ」をいうか。コはコ（処）で「場所」を示す接尾語。ヤマ（山）は「森林」のこと。以上から、ヒメコヤマとは「山の蔭になる山林」を意味するか。

②ヒメは「深く入りこんだ所」をいう。あとは同様で、ヒメコヤマとは「谷が深く入りこんでいる森林地帯」であろ

うか。

全国地図にはヒメコヤマ地名もヒメコ地名も記載されていない。

【村腰】

ムラコシ。

この小字はヒメコヤマ小字の北東隣にある小さな小字である。丘陵の麓に近く、北端には玉川の支流が流れている。

ムラコシは何を意味しているのか。ムラはムラ（斑）で「物のでこぼこ」をいい、コシ（腰）は「山の麓に近い所」をいう。（以上は国語大辞典）

ムラコシとは「山の麓に近いところで、でこぼこのある所」であろう。ちょっとした土石流が何回もあって凹凸のある場所であろうか。

全国地図には、ムラコシ地名は一つも載っていない。

【坂田本】

サカタモト。

この小字は丘陵地の尾根部分から西側の麓までを含む、広い面積をもつ小字である。

サカタモトとは何か。サカは「山の峠」をいう。サカは峠の古語らしい。タモはタバと同じで動詞タワム（撓）の語幹が転じた語で「山中の平坦地」を意味する。トはト（処）で「場所」を示す接尾語。（以上は語源辞典）

従って、サカタモトとは「丘陵地帯で峠や平坦地のある地域」であろうか。

全国地図にはサカタモト小字は記載が無い。

【井戸久保】

イドクボ。

この小字は大鹿地区のサカタモト小字とスイジンガマ小字の間にあり、一部が玉川に接している。

イドクボとは「窪地で流水のある所」

か。

イドクボ地名は意外に少なく、全国地図にも1ヶ所に記載があるだけ。

【角間】

カドマ。

この小字は大鹿地区にあり、玉川左岸にあり、山稜の麓になっている。

カド(角)は「物のとがって突出した部分」(広辞苑)である。マ(間)は「場所」を示す。カドマとは「(玉川が)曲流して突出している所」をいう。全国地図には8ヶ所ある。

【北背】

キタセ。

この小字は大鹿の集落北側にあつて、北端で玉川が大きく曲がっている。

キタセとは何か。二説を挙げたい。

①セはセ(瀬)で、キタセとは「北側に流水のある所」か。この小字の北側を玉川が流れている。

②キタセとは「北側が背のように丸くなっている所」であろうか。玉川の曲流で動物の背のようになっていることをいうのだろうか。

全国地図にはキタセ地名は載っていない。

【石荒田】

イシアラダ。

この小字は玉川左岸の氾濫原で、現在は殆どが水田になっている。

イシアラダにも解釈を二通り挙げておきたい。

①イシは「石の多い所」、アラダは「浸水などで荒れやすい水田」をいうか。

②アラダはアラダ(新田)で、イシアラダとは「石の多い新しく開墾された水田」であろうか。

全国地図には、なぜかイシアラダ地名は載っていない。

【前田】

マエダ

この小字は大鹿集落の東端に東から迫る丘陵の麓になる。

マエダはマエ(前)・ダ(処)で「前の方」ということになるが、基準になっているのは何だろうか。やはり有力者の居住地ではないだろうか。お宮もあるが川向こうで少し遠い。

位置関係は、次のイエウラとも関わっているのかもしれない。

以上から、マエダとは「有力者の前の方になる所」であろうか。

【家浦】

イエウラ。

この小字は大鹿の東端に2ヶ所あり、東から丘陵が迫ってきている場所にある。

イエは大鹿の集落をいうか。イエウラとは「大鹿集落の裏手の方」となる。あるいは「有力者の家の裏」かもしれないがはっきりはしない。

全国地図にはイエウラ地名も見つけることはできない。

【家ノ上・家ノ下】

イエノウエ・イエノシタ。

イエノウエ小字は玉川右岸に、イエノシタ小字は玉川左岸にある。

イエは「大鹿の集落」をいうか。

イエノウエとは「大鹿集落の高い所」をいい、イエノシタとは「大鹿集落の下流側」を意味していると思われる。

現在の住宅分布をみると、必ずしもイエノシタが正確ではないが、地名発生時には、集落の下流側にあったと考えたい。

全国地図には、イエノウエ地名もイエノシタ地名もそれぞれ4ヶ所ずつ、中・大字として挙げられている。

【井ノ口】

イノクチ。

この小字は大鹿集落のはずれ付近から下流側に三ヶ所ある。

イノクチとは「井水の取り入れ口」(広辞苑)をいう。井水を取り入れるための堰がはっきりしているのは、三ヶ所のうちの一ヶ所のみであるが、堰を設けない取り入れ口もあったのであろうか。

全国地図にはイノグチ地名は、中・大字として35ヶ所に挙げられている。

【西垣外】

ニシカイト。

この小字は玉川左岸で大鹿集落の南東端に近いところに一つ、もう一つ大鹿集落の東方の丘陵地にもある。

大鹿集落の中のニシカイであるが、ニシをニシ(西)とすると説明がつかない。そこで語源辞典に従って二説を挙げたい。

①ニシは動詞ニジム(滲)の語幹の清音化で、「湿地」をいう。ニシカイトとは、「湿地にある住居地」であろう。

②ニシは動詞ニジル(躓)の語幹の清音化した語で、ニシカイトとは「崩壊地のある住居地」であろうか。

次に大鹿集落東方の丘陵地にあるニシカイトは何を意味するのか。ニシは先にみたように、動詞ニジルの語幹の清音化で「崩壊地」をいい、カイト(垣外)はカヒ(峽)・ト(処)で「山間の小平地」をいう(語源辞典)。すなわちニシカイトとは「崩壊地もある山間の小平地を意味する。

なお、意外であるが、全国地図には、ニシカイト地名は載っていない。

【坂の上】

サカノウエ。

この小字は大鹿集落の東方の丘陵地にある。

サカは「山の峠」をいう(語源辞典)。サカノウエとは「峠より高い所にある丘陵」を意味するのであろう。

全国地図には、サカノウエ地名は中・大字として26ヶ所に挙げられている。

【井堰山】

イセキヤマ。

この小字も大鹿集落東方の丘陵地にある。

イセキ(井堰)といえは「水を他に引くため、川水をせきとめた所」であるが、現地に井堰はなさそうだ。

イセキヤマとは何を意味するのか。ここでも二説を挙げておきたい。

①イセはイソ(磯)の転じた語で、「石地」をいう(語源辞典)。石地とは石の多いやせた土地のこと。キはキ(処)で「場所」を示す。以上からイセキヤマとは「丘陵地で石の多いやせた土地」を意味するか。

②イセキとはイセキ(伊勢木)で、「材木を伐採するときの斧始めに一本切る木。お初穂にあたる。中部日本の各地では、これを伊勢神宮に奉納する気持をこめて切る」(国語大辞典)という。イセキヤマとは、「斧始めに木を一本きる、その山」をいうのであろうか。山人たちの仕事始めであろう。大鹿上地区では神明神社のお宮を氏神として地区全体でお祭りをしているという(上久堅の民俗)。後に出てくるドイレ小字とのとの関わりもあるので、こちらの解釈に分があると思われる。

全国地図には、イセキヤマ地名もイゼキヤマ地名も記載はない。

【発田】

ホッタ。

この小字はイセキヤマ小字の南隣

にある。南西向きの斜面と谷の底部からなる。ここだけに水田があり、付近には無い。

ホッタとは「私的に開いた地。隠田」（語源辞典）ではないだろうか。この山中にまさか田んぼあるとは思えないのではないだろうか。周辺は隠田にふさわしい地形になっている。

全国地図には、ホッタ地名は18ヶ所に記載がある。

【中土入】

ナカドイレ。

この小字はイセキヤマ小字やホッタ小字に囲まれていて玉川の支流が流れている。

ナカ（中）は尾根と尾根の間の谷間をいう。ドイレはドイレ（渡入）で「流し木を谷に投げ入れること」（分類山村語彙）をいう。

以上から、ナカドイレとは「谷間に流れる川へ流し木を投げ入れる所」であろう。

なお、『分類山村語彙』には、ドイレとイセギについて、次のように書いている。「三河の北設楽などの御伊勢木は水神柱とも呼んで、やはりドイレ祝に大川へ木端が出た時、庄屋が先だって一同で之を拝む風がある」と。

なお、全国地図にはナカドイレ地名もドイレ地名も載っていない。

【下垣外】

シモガイト。

この小字は大鹿集落から東側の山地につながる大きな面積になっている。棚田のある低地から谷を遡行すると、尾根の頂上にまで達するまで、この小字内である。

シモは動詞シモル（滲）の語幹で「湿地」を意味する（語源辞典）。シモガイトとは、「湿地に居住地のあるところ」

を意味するか。

全国地図には、シモガイト地名は7ヶ所にある。

【上小沢】

カミコザワ。

大鹿の玉川に注ぐ支流が開析した谷の下流側と上流側の二ヶ所に、この小字がある。

カミコザワとは、玉川の上流側にある、小さな流量の少ない沢」をいうのだろうか。

玉川の下流側にはコザワ小字がある。

全国地図にはカミコザワ地名は1ヶ所にだけある。

【下山】

シモヤマ。

この小字は大鹿集落の東側にある丘陵地の尾根筋にあるが、標高638.2mの独立峰になっている。まだ東方にはもっと高い尾根が続いている。

シモヤマとは「比較的低い尾根続きの峰」を意味するか。

全国地図には、シモヤマ地名は68ヶ所に中・大字として挙げられている。

【大平】

オオビラ。

この小字はシモヤマ小字の奥にある。それほど大きな小字ではない。玉川の支流の右岸の傾斜地になる。

オオビラのオオは美称か。オオビラとは「傾斜地」をいう。

全国地図では、オオビラ地名は21ヶ所に、オオヒラ地名になると、なんと137ヶ所に及ぶ。

【小沢口】

コザワグチ。

この小字は二ヶ所にあり、一つは谷の上側下側をカミコザワに挟まれて

おり、もう一つのコザワグチ小字は、他の谷の上下をコザワ小字に挟まれている。

コザワグチとは何か。はっきりしないが、「コザワやカミコザワの下流側、つまり口の側にある所」を示しているものと思われる。いずれも上流側にあるコザワやカミコザワに対しての地形上の位置を示しているのであろう。

【ママクボ】

この小字は玉川と龍江の尾科村境との間にある。

ママについては「ハバよりも急で、水平面と殆ど直角に交わる斜面を、北信地方ではママと説いている。地形の崖をママと呼ぶことは東日本に多い」（分類山村語彙）といわれている。

ママクボとは「側壁が崖になっている窪地」をいうか。北に開いている谷の両側は、確かに急傾斜地になっている。

全国地図にはママクボ地名は無い。

【市場・市場下】

イチバ・イチバシタ。

イチバ小字は一ヶ所に、イチバシタ小字は二ヶ所にある。いずれも稲葉や尾科との村境に接しており、玉川が流れ、街道が交叉している場所にある。

イチバとは定期的に市が開かれる場所である。河原・中洲・山野・坂などが古くから市が開かれていた場所であるという。

イチバは「市が定期的に開かれていた場所」であり、イチバシタはほぼ「市場の下流側」をいう。

全国地図には、イチバ地名は164ヶ所にあるが、イチバシタ地名は1ヶ所もない。

【嶋】

シマ。

この小字は玉川にイタチ川が合流する所にある。かつては、ここに島があつて小字に残っているものと思われる。

シマとは「かつて島であつた所」を意味する。

全国地図には93ヶ所に中・大字として記録されている。

【斧研】

ヨキトギ。

この小字は玉川とイタチ川の合流点に近い、イチバ小字とイチバシタ小字に接している。

何を意味しているのか分からないが、迷った末の一つの結論は、字面通りで、ヨキトギとは「研師の仕事場であつた所」ではないか、ということであつた。研師は日葡辞書にも出ているので中世には存在していたであろうこと。斧は樹木を切り倒したり、荒削りをしたりする山人にとっては、なくてはならないものであつたこと。などによる。

全国地図には、ヨキトギ地名は、1ヶ所にあり、「斧磨」の字が宛てられている。

【市之瀬】

イチノセ。

この小字は大鹿集落の玉川右岸の傾斜地にある。玉川の対岸にはイチバ小字群がある。

イチノセとは何か。解釈を二つ。

①イチは「市場」と思われる。ノセは「緩やかな傾斜地」（語源辞典）をいうか。下伊那の方言だという。イチノセは「市場の近くで、緩やかな傾斜地になっている所」か。

②ノセはノ（助詞）・セ（瀬）で、「市場の近くで川がある所」であろうか。

全国地図にはイチノセ地名は91

ヶ所にある。

【日向】

ヒナタ。

この小字は玉川右岸の緩傾斜地にある。イノクチ小字とタナダ小字の間に挟まれている。

ヒナタとは文字通りで「日当たりのいい所」をいう。

【小金岩】

コガネイワ。

この小字は大鹿集落の北辺にあり玉川が曲流しているところにある。

コガネイワとは何か。黄金伝説があるかもしれないが、まだ聞いたことはない。また砂鉄も取れるが、製鉄はなかったと思われる。等々考えて、次の二説を挙げておきたい。

- ①カネ（矩）には「直角」の意味がある（広辞苑）。「玉川が曲流している所」を意味していると思われる。この小字にある玉川は直角までは曲がっていないが、その上・下流には、直角以上に曲がっているところもあるので、良しとした。コはコ（小）で接頭語。コガネイワとは「川が曲流していてちょっとした岩が出ている所」であろうか。
- ②コガネはコガ（倒。壊。扱）・ネ（根）で「崖の下」をいい、イワは「小石混じりの地」という（語源辞典）。コガネイワとは、「崖の下の小石混じりの土地」をいうか。

全国地図には、なぜかコガネイワ地名は1件も記載が無い。

【棚田】

タナダ。

この小字は大鹿集落の中にあり、玉川の曲流点にある小さな小字である。

タナダはタナ（棚）・ダ（処）で、「棚所になっている所」をいう。現在も水田は見当たらないので、水田に特

定しない方がいいと思われる。

全国地図にはタナダ地名が11ヶ所に、中・大字として挙げられており、すべて「棚田」の字が宛てられている。

【森林】

モリバヤシ。

尾科との村境にあり、境界地と小字がずれているようで、分かりにくい部分になっている。

モリバヤシはモリ（盛）・ハヤシ（林）で、「樹木の繁っている小高くなった所」をいうのであろうか。

【中村沢】

ナカムラサワ。

この小字も尾科との境界がはっきりしない小字地帯で、解釈も難しい小字になっている。

ナカムラサワとは、「隣村になるが尾科集落の中心部に開口する小さな谷」となるが、はっきりはしない。地名発生時には村境地帯ではなかったであろう。

【大岩平】

オオイワダイラ。

この小字は大鹿地区の稲葉との村境にあり、尾根から玉川までの傾斜地となっている。尾根付近には岩があちこちに出ている。

オオイワダイラとは「大きな岩があちこちに出ている所のある土地」であろうか。

全国地図には、オオイワダイラ地名が2ヶ所に記載され、「大岩平」の字が宛てられている。

【野岩】

ノイワ。

この小字は大鹿集落の玉川右岸にある。

ノイワとは何を意味するのか。これも語源辞典に依りながら解釈を二つ。

①ノは「緩傾斜地」をいう。ノイワとは、「緩やかな傾斜地で小石混じりの土地」であろうか。当たり前過ぎるかもしれない。

②ノ←ヌ（沼）と転訛したもので、ノイワとは「小石混じりの湿地」か。

全国地図にはノイワ地名は無い。

【平木垣外】

ヘイキガイト。

この小字は大鹿集落の北端にあたり、玉川右岸にある。

ヘイキガイトとは何を意味するのだろうか。語源辞典によりながら、三つの解釈を示す。

①ヘイはヘイ（隔。重）から「何かによって隔てられた所」のこと。キはキ（牙）で、「鋭く尖った場所」か。ヘイキガイトとは「玉川に隔てられて対岸に突き出ている居住地がある所」か。

②ヘイは「平」（ヒラ）を音読したものではないかという。こういう使い方もあるということは、やや驚きである。ヒラは「傾斜地」をいう。キは「岬」のこと。ヘイキガイトとは「傾斜地で突き出しており、居住地のあった所」を意味するか。

③ヘイはヒエ（稗）の転訛した語で、キ（処）は「場所」を示す接尾語。ヘイキガイトとは「田稗を栽培していた所にある居住地」であろうか。

なお、全国地図にはヘイキガイト地名は無い。

【名登】

ナト。

この小字は大鹿集落西部の下久堅稲葉との村境にある。側稜の尾根から東に下る緩い傾斜地にある。

ナトとは何か。語源辞典に従って二説を挙げる。

①ナト←ナドと清音化した語で、ナド

はナデ（撫）が転訛したもので、「崩壊地形」をいう。この小字の東端は崩壊地になっている。

②ナト←ナドと清音化したもので、ナドヤカ（穏やか）と関連して「緩傾斜地」を意味する。この稲葉境の丘陵地は、この小字付近が緩い傾斜地になっている。

全国地図には、ナト地名は1ヶ所もない。

【藤七山】

トウシチャマ。

この小字も稲葉境の尾根から東に下る丘陵地に二ヶ所ある。

トウシチャマとは何をいうのだろうか。これも主に語源辞典に依りながら三通りの考え方を挙げておきたい。

①「藤七」は固有名詞かもしれない。トウシチャマとは「藤七が所有した山」で、焼畑などが行われたのであろうか。

②トウはタヲ（峠）の長音化した語で、シチ←ヒジで「山をうねうね登る道」をいう。トウシチャマとは「うねうねと登る道が尾根で峠になっている所」か。

③トウは動詞タフス（倒）の語幹タフが転じた語で「傾斜地」を意味する。シチ←ヒチ（漬）の転訛した語で、「湿った所」をいう。トウシチャマとは、「崩壊地もあって湿地にもなっている所がある山地」を意味するか。

全国地図にはトウシチャマ地名は1つも記載がない。

【又洞・又洞尻】

マタボラ・マタボラジリ。

これらの小字も稲葉境の側稜の東側傾斜地にある。

マタ（又）は「一つのもので二つ以上に分かれているところ」（国語大辞

典)をいう。マタボラとは「洞が二つに分かれているところ」であろうが、その二つがどの洞とどの洞になるのかは、あまり明瞭ではない。

マタボラジリとは「マタボラ小字の下流側になるところ」であろう。

【向田】

ムカイダ。

この小字は大鹿集落の玉川右岸にある。

ムカイダとは大鹿集会所から見て「(玉川の) 向こう側にある田んぼ」のことをいうのであろう。

全国地図にもムカイダ地名は41ヶ所と比較的多い地名になっている。

【ヲサメ】

オサメ。

この小字も大鹿集落の玉川右岸にある。

オサメとは何か。あまり聞いたことの無い地名であるが、これも主に語源辞典によりながら考えていきたい。

①オサメはオ(小)サメ(沢目)で、山間の沢の氾濫原に開かれた水田をいう。オサメとは「(玉川の) 河原に開かれた、ちょっとした水田」をいうのであろう。

②サメは動詞サメクの語幹で「騒がしく音をたてる」(国語大辞典)ことを意味する。オはヲ(尾)で「山裾の末端部」をいう。オサメとは「山裾の末端部で、川音が騒がしい所」であろうか。

全国地図には、オサメ地名は2ヶ所にあり、いずれも「納」の字が宛てられている。

【四百目】

シヒャクメ。

これも大鹿集落の玉川右岸にあり、下流の隣はオサメ小字になっている。

シヒャクメとは作物の収量を公に表示しているものと思われるが、重量なのか価格なのかは、よくわからない。

ちなみに、シヒャクメ地名は全国地図には無い。

【井戸洞】

イドボラ。

この小字も大鹿集落の玉川右岸にある。上流側にあるイドジリ小字からの流水を受けて、そのまま更に下流側のシヒャクメ小字に流水を引き継いでいる。

イドボラとは、「流水もあり、一部洞にもなっている所」か。

全国地図にはイドボラ地名は、中・大字として2ヶ所に挙げられ、「井戸洞」の字が宛てられている。

【井戸尻】

イドジリ。

この小字も大鹿集落の玉川右岸にある。

イドジリだから、「流水の末端部」でその流水が玉川に合流する場所のように思えるが、現在は、そうっていない。流水が玉川に合流するのは、このイドジリ小字から三つ目のオサメ小字になっている。小字発生当時は、イドジリで玉川に入っていたことも考えられるが、ここでは別の解釈を示しておきたい。

ジリは「湿地」を意味するという(語源辞典)。すなわち、イドジリとは「流水がある湿地」としたいが、どうであろうか。

イドジリ地名は、全国地図に、5ヶ所挙げられている。宛てられている文字は、すべて「井戸尻」である。

【茶畑】

チャバタケ。

この小字は大鹿集落の北方にある

洞の南向き斜面にある。

チャバタケとは、字面の通りで「茶を栽培している畑」であろう。南向きの傾斜地で暖かい場所と思われる。

全国地図には9ヶ所にある。

【入道洞】

ニュウドウボラ。

この小字は、大鹿集落の北方にあり柿野沢との境界がある尾根筋から南側に開いている谷にある。

ニュウドウボラとは何か。二説を挙げておきたい。

①山の峰を入道に見立てたか。この谷の南西端には標高600.5mの独立峰があるので、それを坊主頭に見立てたものと思われる。

②ニュウドウ←ニフ・ト（処）と転訛したもので、さらにニフ←ニブと転じている。ニブとは「湿地」を意味する（語源辞典）。以上から、ニュウドウボラとは「湿地のある谷」をいうか。この洞の尾根近くにも池があり、洞全体に自然の湧水が多いと思われる。しかし、転訛する過程が複雑であること、ニブがなぜ湿地なのかははっきりしていないこと、などがこの解釈のマイナス要因となっている。

全国地図にはニュウドウボラ地名は無いが、ニュウドウ地名は7ヶ所にある。

【山ノ神】

ヤマノカミ。

この小字は大鹿集落の北西部にある。大鹿区民センターのあるところで、氏神様らしい祠もあるようだ。山神と氏神と重なる例がいくつかあり、神格が多様だといわれている山神の加護のもとで山人達も生活しているが、田神という面もあって、里人達の信仰の対象にもなっているようだ。

上久堅では多くの集落で山の神祭りを行っている。

また、この小字では大鹿地区の人たちが集まり、神主のお祓いの後、水をつけた笹竹を盛んに振って雨乞いをしたという（上久堅の民俗）。

全国地図にもヤマノカミ地名は多く、中・大字として70ヶ所も挙げられている。

【峠下】

トウゲシタ。

柿野沢との村境を通る尾根道があり、その道を越える場所が峠になっている。その尾根道の南東側傾斜地がトウゲシタ小字になっている。

トウゲシタとは「峠より下る道路付近の傾斜地」のこと。

全国地図には、トウゲシタ地名は7ヶ所に挙げられている。

【北林】

キタバヤシ。

この小字は大鹿集落の北側の玉川右岸にある。

キタバヤシも字面の通りで「(大鹿集落)の北側にある樹木の生えている所」であろう。あるいは神聖な場所という意味も含まれているかもしれない。

全国地図には、キタバヤシ地名は7ヶ所にある。

【北浦】

キタウラ。

この小字は大鹿集落の北方で、玉川右岸にある。

キタウラとは何をいうのだろうか。キタは大鹿集落の北の方であることを示す。ウラは「川の上流の方」か、あるいは「水際」であろうか（以上は語源辞典）。とすれば解釈は二つ。

①キタウラとは「大鹿集落の北の方で、

それは玉川の上流側になっている所」をいう。

②キタウラとは「大鹿集落の北の方で玉川の水際になっている所」となる。

【小畑】

オバタ。

玉川の右岸側も左岸側も、側稜の先端部分を玉川が洗う所に、オバタ小字はある。

オバタとはヲ(尾)・ハタ(畑)で、ヲは「山裾の末端」をいう(語源辞典)。ハタは、現在でも水田や畑が無いことから、「焼畑」と思われる。

すなわち、オバタとは「側稜の山裾にあった焼畑」を意味するか。

全国地図には、オバタ地名は39ヶ所にある。

【戸屋ノ口】

トヤノクチ。

この小字も大鹿の柿野沢境の丘陵地にある二つの谷になっている。

トヤノクチとは何か。トヤとは「鳥などを捕らえるためにその時機を待って、人がこもっている小屋」(国語大辞典)であろう。クチには二通りの解釈がありそうだ。

①クチとは「出入口」のことで、トヤノクチとは「トヤのあるところに通じる出入口」のことか。

②クチは動詞クチル(朽。腐)の連用形が名詞化した語で「湿地」のこと(語源辞典)。トヤノクチとは「トヤのある湿地の多い所」をいうか。

トヤでは渡り鳥の南下のコースで霞網を使うことも多かったのではないだろうか。

全国地図にはトヤノクチ地名は記載が無い。

【柱ミゾ】

ハシラミゾ。

この小字は下平と堂平にある。下平のジョウサカ小字とシンケイ小字の間にある小さな小字である。側稜の中腹部にあたる。堂平のハシラミゾ小字は二本の側稜に間の大きな谷になっている。

ハシラミゾとは何か。下平と堂平のハシラミゾはそれぞれの意味が微妙に違っているので、別々に考えてみたい。

まず下平の小さな小字について。ハシラはハス(斜)・ラ(接尾語)で「傾斜地」をいうらしい。ミゾは「小さな谷」か(以上は語源辞典)。すなわち、ハシラミゾとは「急傾斜地にある小さな谷」を意味するか。

次に堂平の大きな小字について。ハシラは「二本の側稜の間の谷」をいう。ミゾは「細流」のこと(以上は語源辞典)。以上から、ミゾハシラとは「側稜間の谷を流れる小さな沢のある所」をいうか。

全国地図にはハシラミゾ地名は記載されていない。

【平内田】

ヘイナイダ。

この小字は堂平の東部にある。二本の側稜の間の谷になっており、側稜には独立峰もある。

ヘイナイダとは何か。難しい地名である。

語源辞典は、ヘイは「ヒラ(坂。斜面)、タヒラ(平)に“平”の字を当て、音読した物か」という。すなわち「傾斜地」をいう。ナイダ←ナエ(萎)・ダ(処)で、ナエは「峠、鞍部など、たるんだ地形」をいう(語源辞典)。

以上から、ヘイナイダとは「峠のある傾斜地の多い所」であろうか。この

小字内には、二つの独立峰の間に峠がはっきりしている。

全国地図には、この地名は無い。

【中山・中山尻】

ナカヤマ・ナカヤマジリ。

これらの小字は堂平地区にあるが、ナカヤマ小字は三ヶ所、ナカヤマジリ小字は一ヶ所にある。いずれも比較的広い面積になっており、傾斜地や谷や独立峰もある。

ナカヤマは「山に入った中」（語源辞典）とあり、丘陵地のことを意味しているのだろうか。曖昧な表現である。

ナカヤマジリはナカヤマ小字の下流側にあり、「ナカヤマの下流側になる所」であろう。

ナカヤマ地名は多く、全国地図でも295ヶ所に記載されている。

【雀岩】

スズメイワ。

この小字も堂平地区の丘陵地にある。尾根や谷を含む広い面積になっている。

スズメイワとは何を意味するのか。「雀に似た岩」としたいが、小字になっているから特徴のある岩でなければならないが、どんな岩か想像も出来ない。それに雀伝説もありそうにもない。そこで語源辞典によりながら、二説を挙げたい。

①スズメ←スズミ（稲積）と転じたもので、「稲積形の山」をいう。尾根の所々にある峰を見立てたのであろうか。あるいは、この小字のすぐ東側にある円錐形の独立峰を見立てたのかもしれない。イワは「小石混じりの地」か。以上から、スズメイワとは「稲積形の峰が近くにある小石混じりの地」であろうか。

②スズメのスズ（篠）は「細い竹」（国

語大辞典）で、メはベ（辺）の転訛した語。スズメイワとは「小石混じりの土地で篠竹が生えている所」をいうか。

全国地図にはスズメイワ地名は3ヶ所に中・大字として挙げられている。

【木山入】

キヤマイリ。

この小字は堂平にある、水田と側稜の傾斜地からなる。現在も複数の住宅もある。

キヤマとは天竜川兩岸の山村では鉦のことをいうらしい（分類山村語彙）が、ここではあてはまりそうにない。

キヤマ（木山）は「材木を切り出す山」であるという（語源辞典）。クチ（口）が問題になるが、一般的にいわれているように、クチを「奥。上流」とするのは、やはり現地に合わない。そこで、キヤマイリとは「材木を切り出す山への入り口」としたいが、どうであろうか。

全国地図にはキヤマイリ地名は掲載されていない。

【溝田】

ミゾダ。

この小字は堂平地区のキヤマイリより下流側にあり、一部が水田になっている谷で、南端を川が流れている。

ミゾは人工的な水路を指すことが多いが、この小字の場合は谷の小川を南端に寄せた形跡があるので、ミゾとしたのであろうか。ミ（水）・ゾ（処）であれば（国語大辞典）、「水のあるところ」を意味する。

以上から、ミゾダとは「湧水もあり小川も流れている所にある水田」にしておきたい。現在、水田になっているところは上流部の三分の一ぐらいであるが、地名発生時には湿田になっていた可能性はある。

全国地図には、なぜかミゾダ地名は載せられていない。

【柳沢】

ヤナギサワ。

この小字は、堂平地区（あるいは小野子地区か）に二ヶ所ある。いずれも谷の底部で水田になっていたり、湿地になっていたりする。いずれもキヤマイリ小字に接している。

ヤナギサワとは何を意味するのか。考えられることを二つ挙げておきたい。

①ヤナギサワとは「ヤナギ属の植物が自生している谷」と考えるのが、一般的であろう。

②ヤナはヤナ（斜面）で、ギは「場所」を示す接尾語（語源辞典）。ヤナギサワとは「緩傾斜地になっている谷」か。

ヤナギサワ地名は多く、全国地図にも83ヶ所で中・大字に挙げられている。

【岡田峠】

オカダトウゲ。

この小字は堂平地区の主要地方道下条米川飯田線に沿った緩やかな斜面の丘にある。現在は果樹園になっている。整地でもしたのであるだろうか。

オカダとはオカダ（陸田）で、「畑」をいう（国語大辞典）。オカダトウゲとは「畑の中に峠のある所」か。現在は丘の裾を通る道路しかないが、かつてはこの丘を横断する道があったのかもしれない。

全国地図には、オカダ地名は64ヶ所にあるが、オカダトウゲ地名は無い。

【井戸入】

イドイリ。

この小字は堂平地区にミゾダ小字を挟んだ二ヶ所と他に二ヶ所ある。

イドとは流水ではないと思われる。

二ヶ所のイドイリ小字には、現在流水がないからである。かつては川が流れていたかもしれないが。イドはキ（井）・ド（処）で「湿地」としたい（語源辞典）。イリは先にキヤマイリでのイリと同じように「入口」としたい。すなわち、イドイリとは「湿地への入口」ではないだろうか。

全国地図には、意外であるが、イドイリ地名は一つも載っていない。

【ウバカミ】

この小字は堂平の丘陵の中腹から麓にかかる崩壊地にある。

ウバカミと聞くと、ウバガミ（姥神）ではないかと期待してしまうが、この小字で姥神を祀っているとは思われない。因みに姥神とは「尊い御子を養育する姥（乳母）にまつわる伝承。水神信仰との関わりがあることから、雨乞いの神としている地域も各地にある」（民俗大辞典）という。

ウバは動詞ウバウ（奪）の語幹で「崩崖」をいう（語源辞典）。カミは動詞カム（噛）の連用形で、「噛み取られたように崩れている所」をいうか。

以上から、ウバカミとは「噛み取られたように崩れている所」をいうのであろう。この小字はほぼ半円形に崩れ落ちた地形になっている。

全国地図にはウバカミ地名は1ヶ所にあり、「姥神」の字が宛てられている。

【砂廣】

スナヒロ。

この小字はウバカミ小字の上の段の丘陵地にある。周りには道もある。

スナヒロのヒロはヒラ（平）の転訛した語で「傾斜地。坂」をいう（語源辞典）。すなわちスナヒロとは「砂地で緩い坂道のある所」であろうか。

全国地図にはスナヒロ地名は無い。

【中ノ切】

ナカノキリ。

この小字は堂平地区に二ヶ所あり、いずれも玉川支流の左岸の急傾斜地にある。

キリはキリ（断）で「断ち切られたような地形」をいう（語源辞典）。ナカは「丘陵の尾根と麓の間」のことであろうか。

以上から、ナカノキリとは「丘陵の中腹部から麓の間にあつて、断崖になっている所」であろうか。

全国地図にはナカノキリ地名は2ヶ所に記載がある。

【赤ナギ】

アカナギ。

この小字は二つのナカノキリ小字の間にある。

ナギ（薙）は「山で薙ぎ落としたように崩れた地点」（広辞苑）をいう。アカナギとは「表土の赤土が見える薙ぎ崩れた崖のある所」か。小字発生時には赤土が見えていたのであろう。

全国地図にはアカナギ地名が1ヶ所ある。

【笹原】

ササハラ。

この小字はナカノキリ小字とアカナギ小字の間にある。

ササハラとは文字通り「笹類の生えていた丘陵の中腹部」であろうか。ハラはハラ（腹）としたい。

全国地図にはササハラ地名が26ヶ所に、中・大字として挙げられている。

【六十田】

ロクトダ。

この小字は神之峯城址丘陵の南麓にある。尾根と谷を含んでいる。

ロクトダとは何を意味しているのか。はっきりはしないが、作物の播種量か収穫量と思われる。何かありそうだと重いながら、他の解釈に思いつかないでいる。ロクトは「6斗」であろう。60升で108リットルとなる。これなら収穫量であろうか。

玉川支流の南側の斜面は急勾配になっている。棚田の跡らしい所はあるが、現在は作物を作ってはいない。小字発生時には、焼畑が行われていたとしか考えられない。

以上から、ロクトダとは「6斗の収穫をあげた土地」としたいが、どうであろうか。なお、ダはダ（処）で「場所」を示す接尾語である。

全国地図にはロクトダ地名は載っていない。

【濱井場】

ハマイバ。

この小字は神之峯城址丘陵の東方にある山地にある。

ハマイバで考えられることは二通り。

①ハマイバとは「破魔射行事が行われていた所」か。民俗大辞典には「古くは全国的に行われたらしく、各地にハマイバという地名が残っている。その多くが村はずれや浜であることも注目値する。正月の単なる子供の遊びとなる以前に神事としてハマを射る、あるいはハマを棒や竹で打つといった民俗があったと思われる」とある。この堂平には川もないし村はずれでもないが、近くにミヤノワキ小字がある。

②ハマは「崖」をいい、イは「湿地」のこと（語源辞典）。ハマイバとは「崖もあり湧水のある所」か。

全国地図には13ヶ所にある。

【日焼田】

ヒヤケダ。

神之峯城址丘陵の南東麓付近に、この小字はある。玉川支流の右岸にあって、尾根までを含む広い面積になっている。

ヒヤケダとは「ひでりつづきで水がかれて、乾ききった田」(国語大辞典)とある。

二本の玉川支流があり、乾きやすい土地とも思えないが、水はけがいいのかもしれない。

ヒヤケダとは「干ばつの時には、水がなくなる田んぼのあった所」であろうか。

全国地図にはヒヤケダ地名は、1ヶ所にある。

【西ノ久保】

ニシノクボ。

ハマイバ小字の南側にニシノクボ小字が2ヶ所にある。

ニシノクボといえは文字通りに解釈すれば、「西の方にある窪地」となるが、“何の西の方”なのかははっきりしない。そこで次のように考えたがどうであろうか。

ニシは動詞ニジム(滲)の語幹が清音化した語で「湿地」をいう(語源辞典)。ニシノクボとは「湿地になっている窪地」としておきたい。

全国地図にはニシノクボ地名は、中・大字として8ヶ所に記載されている。

【坂尻】

サカジリ。

この小字は堂平地区のウバガミ小字から登る坂道にある。

サカジリとは「坂道の登り口」をいう(語源辞典)。上伊那郡や山梨県の方言だという。

【血取場】

チトリバ。

この小字は堂平地区にある緩傾斜地のイマワリ小字の中にある。

「血とり場」とは、「定期的にハクラク(伯楽)などと呼ばれる民間の獣医がやってきては、馬のひづめを削ったり悪血を抜いたりした場所。馬の首などの静脈から血をとることによって馬の健康が保たれるとされた」(民俗大辞典)という。

チトリバとは「馬などの血を抜く所」であろう。

全国地図にはチトリバ地名は載っていない。

【風祭】

カザマツリ。

堂平地区、集会所の西に田んぼが広がっているが、その田んぼきれて雑木林になった所にカザマツリ小字がある。

昭和の初めごろまでは、台風を鎮めるためのお祭りをしていたという。毎年九月のはじめに最も背の高い榎の梢に幣束を立てた。

西風が強かったと地元ではいうが、地形から見て、あるいは南西風であったかもしれない。

全国地図にはカザマツリ地名が2ヶ所に記載されている。

【薄畑】

ウスバタ。

この小字も堂平のイマワリ小字に囲まれている。

ウスダ(薄田)は「土地が肥えていないため、収穫の少ない田」(国語大辞典)であるという。

ウスバタは「土地が痩せていて収穫の少ない畑」か。

【家廻り】

イエマワリ。

堂平地区の緩傾斜地の中腹部に、この小字はある。隣接するイマワリ小字に囲まれている。

イエマワリとは何か。語源辞典に依りつつ二説を挙げる。

①マワリは「山裾などの屈曲した所」をいう。イエマワリとは「家の周辺が丘陵先端部で曲がっている所」であろうか。

②イマワリ→イエマワリと転じたのか。「周辺の湿地が屈曲しつつ取り巻いている所」をいうのだろうか。

全国地図にイエマワリ地名は載っていない。

【堂平】

ドウダイラ。

堂平中字名にもなっている小字である。小字内には、細田川と主要地方道下条米川飯田線がある。堂平地区の中心部であろうか。

ドウダイラについては二説。

①ドウ（堂）は「僧堂のあった所」でタイラは長野県では「盆地」をいう（語源辞典）。ドウダイラとは「僧堂があった小盆地」であろうか。村誌のいう東方寺関係の僧堂があったのではないだろうか。

②ドウダイラとはタヲ・タヒラの転で「緩傾斜地」とう語を重ねた地名ともいう（語源辞典）。であれば、ドウダイラとは「緩い傾斜地になっている所」となるが、ちょっと寂しい。

全国地図には、ドウダイラ地名が中・大字として13ヶ所に挙げられている。

【煙草畑】

タバコバタ。

堂平地区の農家生活改善施設の近くにある小さな小字である。

タバコバタとは「タバコを栽培していた畑のあった所」か。

タバコについては、17世紀の初めには喫煙も栽培も盛んに行われていたらしい。江戸幕府はタバコ栽培で食料確保に影響があるとして、タバコ耕作の禁止令を出したがあまり効果がなく、17世紀後半には殆ど出さなくなったという（民俗大辞典）。

あまり公には栽培できないタバコだったらしい。

全国地図にもタバコバタ地名は載っていない。

【宮ノ脇】

ミヤノワキ。

この小字は堂平地区の細田川に沿った緩傾斜地にある。

ミヤノワキは「お宮の傍」を意味するが、どのような神社がどこにあったのかはまだ調べていない。

【長田】

オサダ。

堂平地区のイマワリ小字の中にある小さな小字である。

オサダとは何を意味するのか。

オサは「水田の一区画」のことをいう（語源辞典）。各地の方言になっているが、長野県の文字は無いのが少し気になるが、順当な意味と思われる。

オサダとは「田一枚分の広さのある耕作地」か。現在は畑地になっており、小字発生時に田んぼであったかどうかわからないので、「耕作地」とした。

この付近には、タバコバタやイエマワリなど小さな小字が並んでいる。オグラダ小字の位置が特定できないので、ここでは取り上げないが、この近くにあることは確かであろう。

【居廻り】

イマワリ。

この小字はドウダイラ小字の西側に接している、なだらかな丘にある。

イマワリとは「流水が曲がりながら周辺にある土地」であろうか。

全国地図にはイマワリ地名は無い。

【樽の上】

タルノウエ。

この小字は堂平地区の龍江村境に二ヶ所ある。

タルは「平常は水の無い溪谷で、雨の時ばかりは滝になるような場所を中部日本の山地ではタルといっている」(分類山村語彙)のタルである。ウエはスエ(末)の転で「谷の奥」のこと(語源辞典)。

以上から、タルノウエとは「雨になれが滝になるような谷間の奥」をいうのであろう。

タルノウエ地名は全国地図には記載が無い。

【ホリキリ・堀切】

ホリキリ。

この小字も堂平地区の龍江村境に二ヶ所ある。

ホリキリとは「地を掘って切り通した堀」(広辞苑)をいうが、城址でも無いこの丘陵地では当てはまらない。

ここでは語源辞典にもあるように、ホリキリは「堀切のようになっている谷のある所」であろうか。

よくわからないが、尾根道ではなくてこの谷を行き来したことがあるのだろうか。

全国地図にはホリキリ地名が50ヶ所もある。殆どが人工の堀のある所と思われる。

【大洞】

オオボラ。

この小字は堂平にあり、龍江・千代の三ヶ村の村境になっている。

オオボラとは文字通り「大きな谷」を意味するものと思われる。

オオボラ地名も、意外に多く、全国地図には20ヶ所に挙げられている。

【相ノ洞】

アイノホラ。

この小字も堂平地区の山地にある。

アイノホラとは何を意味しているのか。よくわからないが、「一つの側稜を挟んで相對している二つの谷」のことをいうのであろうか。どこの側稜についてもいえそうな地形であることが気になる。

全国地図にはアイノホラ地名は記載が無い。

【比矢沢・下比矢沢】

ビヤザワ・シモビヤザワ。

堂平地区の丘陵地にある小字で、ビヤザワ小字は三ヶ所、シモビヤザワ小字は一ヶ所にある。

ビヤ←ヒヤ(冷)と転じて濁音化した語か。ビヤザワとは「(夏などに)冷たい湧水のある沢」であろうか。

シモビヤザワは「ビヤザワの下流側にある沢」をいうものと思われる。

全国地図にはビヤザワ地名は記載が無い。

【雨堤】

アマツツミ。

この小字は堂平地区の平栗川に沿っており、現在でも堤がある。

アマツツミは「灌漑用の堤」をいう。雨水や湧水を溜めておき水田にまわすための堤である。

アマツツミは一般の辞典類には載っていないが、全国地図には5ヶ所にあり「天堤」の字を宛てている。

【内萩・外萩】

ウチハギ・ソトハギ。

これらの小字は平栗川左岸の傾斜

地にある。

ハギは動詞ハグ（剥）の連用形が名詞化した語で「崩崖」をいう（語源辞典）。しかし、ウチとソトがはっきりしない。ウチは平栗川の支流のある、水の豊かな下流側をいい、ソトはその上流側で乾燥しやすい土地をいうのだろうか。

ウチハギとは「下流側の崩崖のある所」をいい、ソトハギは「上流側の崩崖のある所」をいうか。

全国地図には、ウチハギもソトハギも記載は無い。

【大芝原】

オオシバハラ。

この小字は堂平のウチハギ・ソトハギ小字の上の段にある。

シバは動詞シバク（打。なぐる）の語幹で「崩崖」をいう（語源辞典）。

オオシバハラとは「崩壊地のある開墾地」をいう。オオは美称の接頭語か。

全国地図にはオオシバハラ地名は1ヶ所あるだけであるが、シバハラ地名は38ヶ所が、中・大字として挙げられている。

【猿子沢】

サルコザワ。

この小字は堂平地区の龍江尾科との村境にある大きな小字である。

サルコはサル・コ（処）で、サルは動詞サル（去。曝）で「崖地」をいう（語源辞典）。

サルコザワとは「崖地の多く、沢が流れている土地」であろうか。

全国地図には、サルコザワ地名が1ヶ所だけ記載されている。

【野々尻】

ノノジリ。

堂平地区にあって、卯月川とその支流が西流する広い小字である。

ノ（野）について、「古来の野は野原のみならず、付近の山や丘などをひっくるめた相当広い地域をいった場合が多いようである」（民俗地名語彙事典）といわれている。この堂平のノについても同じことがいえるのではないだろうか。

ジリ（尻）は末端部というのでは意味がはっきりしないので、この場合はジリで「湿地」の方が適切であろう。

以上からノノジリとは「広い丘陵地で湿地帯のある所」としておきたい。

全国地図にはノノジリ地名が3ヶ所に記載されている。

【亀ヶ淵】

カメガフチ。

この小字は堂平地区のオオビラ小字の南麓にある小さな小字である。

カメはカミ（噛）の転訛した語で「崩壊地形」をいう。フチはフチ（縁）で「段丘の縁」のこと（以上は語源辞典）。

カメガフチとは「丘陵の麓で崩壊していた所」をいう。

全国地図にはカメガフチ地名は2ヶ所にある。

【大平】

オオビラ。

堂平地区の大きな丘陵地にある。

オオビラとは「傾斜面の多い、大きな丘陵」をいうか。

全国地図には、オオビラ地名は21ヶ所が中・大字として挙げられている。